

# 戦艦「八洲」

遠歩

## 序章 爬間諸島沖海戦——全ての始まり——

堂々たる隊列を組んだ艦隊が前進していた。全長二〇〇間（メートル）を超える戦艦だけで八隻。皇国聯合艦隊（インペリアル・グランド・フリート）——瑞穂皇国海軍（インペリアル・ネイビー）がこの一戦に賭ける意気込みが窺える。何しろこれは彼らが保有する戦艦の半数に値するのだから。

決戦場に選ばれた爬間（はうあい）諸島は、予ねてより敵対国家——加利米矢（カリメヤ）聯合帝国と領有権を争ってきた場所であった。今回の戦争、それが開始された理由は、領土問題ではなく経済関係のこじれ——貿易摩擦なのだが、実際に敵と砲火を交えなければならない者らからすれば、それは重要な事柄ではない。目的はただ一つ。敵艦隊を瑞穂本国——内地より一人でも遠い場所で叩き潰し、橋道洋（きょうどうよう）が瑞穂の内海であることを内外に誇示し、早期終戦を実現する事。戦の発端など、政治家か後の世の歴史家が考えれば良い。

周囲は、まだ天道——惑星地球の太陽——が昇っていないので闇に閉ざされている。晴れてはいるが、視界が酷く悪いのは確かだ。間の悪い事に波も高い。そんな中で、軍艦が大名行列宜しく進むのは、衝突事故を誘発する原因になりかねない。しかし夜間戦闘を伝統的に得意とする瑞穂海軍は、その難行を苦にしていない。先を進む艦の艦尾に備えられた、僅かな光を放つ標識灯や吹き流しを頼りに、各艦は前進を続ける。

夜明けは、〇五〇〇——午前五時だとされていた。この日——一月二七日は、瑞穂本国では真冬にあたり、日の出も六時以降になるのだが、温暖な気候を持つ爬間諸島では、文字通りの常夏なので、日付に日の入り時刻があまり左右されない。

現在時刻は〇四三〇。会敵予想時刻は三〇分後とされていた。つまりは夜の帳（とぼり）が開くのと同時に海戦が発生する計算だ。敵の数は、偵察機や潜水艦が寄越した報告を信じる限り、戦艦が六隻。巡洋艦が一二隻。駆逐艦が三二隻。戦力的には、こちらが戦艦の隻数で優り、補助艦艇の数では劣勢だと言えた。

皇国聯合艦隊主力を為す第一艦隊を直率する、司令長官・猪松敏平（いのまつとしひら）大將は、名うての大艦巨砲主義者である。彼は戦艦同士の砲戦に打ち勝てば、それで全てが決すると考えていた。巡洋艦や駆逐艦が束になろうとも、戦艦部隊が砲列を向ければ直ちに撃退できると信じていた。ましてや海のものとも山のものともつかぬ航空機など、「補助戦力の補助戦力」だと頭から莫迦（ばか）にしていた。

これは猪松の頑迷さを物語る事柄の一つ——と言う訳ではない。彼は海軍に縁故採用された公爵家の次男との顔を持つが、海軍兵学寮や海軍大学校——前者が全国から少年少女を集め、海軍士官（ネイビー・オフィサー）を養成する士官学校で、後者が参謀や司令官足るに相応しい専門教育を施す機関——を優秀な成績で卒業した秀才でもあるからだ。

そして学校教育を優秀な成績で修了した者にありがちなことに、猪松もまた思考の柔軟性を欠いた部分を持つ人物になっていた。すなわち「海軍は艦隊決戦を行うために存在し、戦艦こそが海戦の雌雄を決するための最良兵器」との認識を植え付けられていたのである。

要するに海軍兵学寮の卒業席次（ハンモックナンバー）が高い者ほど、思考回路が硬直化して

いる訳で、先の記した猪松の見解は、戦術傾向（ドクトリン）を超えた「定説」と化していたのだ。

ただし、こうした傾向は瑞穂以外の国一一列強と呼ばれている、戦艦や空母に代表される大型戦闘艦艇を複数擁している国家でも顕著で、瑞穂海軍が特別に官僚化されていた訳でもないのだが。

猪松はそうした大艦巨砲主義者により占められた海軍の実戦部隊、その最高責任者であるとの自負を有していた。潮焼（しおやけ）してがっしりとした体躯（たいく）を持ち、顔には美髯（びぜん）と評してよい立派な口髭と顎髭があり、太い眉毛と鷹の如き鋭き光を持つ眼を持つ彼は押し出しも強い。そんな彼が紺色の海軍第一種軍装を身につけていると、海軍提督以外の何者にも見えない。

そうした自身を猪松もまた好んでおり、彼は海戦に勝利した暁（あかつき）には、戦艦の主砲塔を背景にした写真を報道機関関係者（マスコミ）に撮影させ、それを各新聞の一面に飾らせようと考えていた。仁王像のような厳めしさを持つ自分がそうすれば、さぞ写真映えも良かろうとも思う。

敵艦隊一一加利米矢聯合帝国・西部帝家艦隊を撃滅し、国民的英雄となれば、兄と同様に政界に身を転じ、将来的には首相の座を射止めるのも決して夢ではなかった。何しろ猪松公爵家はかつては皇室と縁戚関係を結んだ事もある大名家である。家柄的にも問題はないし、戦場の英雄である事を背景に大量得票で皇民院議員になり、その勢いで大臣になった者など、他にも大勢いる。一般皇民出身の者ですらそうなのだ。平民にすら出来た芸当が、自分に不可能なはずがない。

そんな風に、内閣総理大臣として首相官邸に迎えられる自身の姿を、猪松は心眼で捉えていたが、不意に耳に飛び込んできた、艦橋見張員の声が、彼を現実に戻らせた。

「前方に敵艦隊！ 戦艦複数有すると認む」

敵主力艦隊だ一一猪松は直感的にそう感じた。この状況で他の敵部隊に出くわす可能性は絶無に近い。ましてや能力に定評のある、瑞穂海軍の見張員が艦種誤認などする訳がない。他の者も同様で、周囲に控えている参謀陣が、彼に戦闘開始の合図を出すようにと促した。

「合戦準備！」

かくて後に「爬間諸島沖海戦」と称される事になる海戦が開始された。時に瑞穂暦二〇〇一年一月二七日午前五時一一

戦闘は双方が互いの姿を視認した直後より始まった。口火を切ったのは、戦艦の数で相手に劣る西部帝家艦隊側であった。彼らは瑞穂側の頭を抑えるような形で一一艦隊決戦時の理想とされる丁字を描くべく動き、彼我距離三万八〇〇〇間から砲撃を開始したのだ。

この敵の動きを、瑞穂側は驚きよりも呆れを以て迎えた。彼らが艦隊決戦時の切札と目する矢隠（やがくし）級戦艦の四隻一一近年まで全世界に一一隻しか存在しない四〇センチ砲艦として、世界一一大戦艦(ビッグ・イレヴン)と呼ばれている一一である「矢隠」「時和（ときわ）」「龍隠（たつがくし）」「穂先(ほさき)」にしても、決戦時の最大砲戦距離は三万六〇〇〇間と定めている。その「上限」よりも二〇〇〇間も離れた場所から射撃を開始したところで、命中する以前に届くものかと考えたのである。

これは戦艦の砲撃精度が、一般的に考えられているよりも、かなり低い事と、聯合帝国が抱える国内事情に起因する。戦艦の砲弾は、念じれば当たるというものではなく、風速や風向、気温に気圧、果ては星の自転まで計算に入れて行う。そしてこれらの情報は、基本的に砲撃を行う艦が観測できる範囲のものに留まる。砲弾が飛んでいく途中の空間や、目標物の周囲まで同じであるとの保証はなく、一度高度数千間まで上昇してから落下する砲弾は、たとえ相手が地上建造物――不動目標であろうとも、百発百中の命中精度を誇る訳がない。大抵は見当違いの方向に落ちる。

それならば、敵が自軍よりも射程の長い艦載砲を開発、それを搭載した戦艦を前線に投入してきたのなら、いわゆる射程圏外攻撃（アウトレンジアタック）をしてきても不思議はないのでは、との指摘に対しても、瑞穂側はこう答えられた。

「聯合帝国海軍には『ファナマの軛(くびき)』がある。彼らは国土防衛の観点から北加大陸両海岸に艦隊を展開させねばならないが、兵力の柔軟な運用を行うには南北加利米矢大陸を結ぶ大陸海峡を使用せねばならぬ。彼らはその大陸海峡の制約を受けているから、四〇センチ以上の艦載砲を積んだ戦艦を建造する事は出来ない。もし仮に四六センチ砲を積んだ艦を建造したら、費用対効果（コストパフォーマンス）が悪すぎる艦になる。如何に聯合帝国と言えども無限の国力を持つ訳ではないから、それはありえない」

「大陸海峡」とは、南北ある加利米矢大陸を結ぶ場所で、聯合帝国が拡大膨張政策を開始する前は、そこを管理運営する事により莫大な富を得ていた商業国家――ファナマ共和国の名を取り、ファナマ海峡とも呼ばれていた。橋道洋側から西平洋（せいへいよう）に出る際、あるいはその逆の道を進む際の近道になる。もしここを使用できないのであれば、南加利米矢大陸の南端を通過する必要が生じるため、時間の喪失（タイムロス）は計り知れないものがある。どこかの商人が口にしたように、「時は金なり」を実践したい者らからすれば、是が非でもそこを通らねばならない。

その大陸海峡には、一つ制約がある。幅が思いの外狭く、四〇センチ以上の大砲を積んだ戦艦だと、通行が不可能なのだ。北加利米矢大陸の過半を領有し、南加利米矢大陸北部――全体の三割程度――を占領している聯合帝国でも、物理的制約を精神論で超越する事は出来ぬ。勿論、海峡の拡張――大型戦闘艦艇の通過を容易にするための工事は、ファナマ共和国が聯合帝国軍の手に落ちて以来行われているが、祖国奪還を目指す武装抵抗勢力（パルチザン）――民間人が自発的に組織したものから、旧政府軍や諸外国からの支援を受けた便衣兵（ゲリラ）勢力など、様々な組織があるが――の妨害が激しく、それは今のところ実を結んでいない。そして彼らは国土防衛の観点から、橋道洋・西平洋の両洋に大規模な艦隊を配備する必要がある。

双方の艦隊をある程度まで柔軟に活用する――北加利米矢大陸西海岸から同大陸東海岸に移動するだけで、楽に一月半は潰れるが――には、ゆえに「戦艦の主砲は四〇センチまでに抑える」との制約が課されている。もしこれを無視すれば、強力だがどちらかの危機に駆けつけるのに、恐ろしく時間を喰う、融通の利かない戦艦が出来てしまう。

国防とは一般的に危険を最低限にまで抑える事を前提に組み立てる。そう言う意味から自国領の防衛に際し欠陥を露呈しかねない兵器というものは、敬遠される傾向にある。瑞穂にしても、

その陸軍は大陸での大規模な戦車戦など想定していないため、機甲部隊は殆どおらず、戦車聯隊ですら定数を割り込んでいる部隊が全体の過半を占めるという為体（ていたらく）だ（これは瑞穂が海洋通商国家で、軍部に於ける主導権を海軍が握っている――海主陸従国家なのも影響しているが）。

そうした次第で、瑞穂艦隊は彼我距離三万八〇〇〇間から発射された砲弾を、「単なる焦りが生んだ発砲」あるいは「砲弾の浪費」程度に捉えて、誰もその命中率を気にしていなかった。

だが、その嘲（あざけ）りは、先頭を進む「矢隠」――矢隠級戦艦の一番艦（ネームシップ）の両舷を挟み込む形で砲弾が落下し、丈高い水柱が立ち上った時、春の陽射しを受けた雪の如く、跡形もなく溶け消えていたが。

「本艦、夾叉（きょうさ）されました！」

「矢隠」艦橋見張員が叫ぶ。夾叉とは至近弾に両舷を挟まれる形を指し、そのまま撃ち続けられると、やがて砲弾が直撃される事を意味する。

「莫迦な……！」

猪松は「矢隠」第一艦橋内にある唯一の座席――猿の腰掛と呼ばれている――に背を預けたまま叫んだ。彼の常識に照らし合わせれば、本格的な砲戦が開始されるのは、彼我距離が二万間から三万間の間なのだ。それよりも遠方から砲弾を撃ち込まれるなど、想定外の範囲外だ。

司令長官が驚愕に顔を歪めている間にも、敵艦からの砲撃は続く。単なるまぐれであれば、次からの砲弾は外れてもよさそうなものだが、これは偶然ではなく「技術を伴う必然」なのだと言え、砲弾が宣言するかのようになり、「矢隠」の近くに落下――損害報告が各所から舞い込んでくるようになる。

「六番高角砲損傷！」

「艦載機用射出装置（カタパルト）に直撃弾！」

「第八副砲沈黙。被弾力所から延焼が――」

連続する被弾にも、「矢隠」はしぶとく耐えている。主砲塔や機関部といった主要部分に被害が及んでいないのが幸いしてか、まだ全速を発揮する事も可能だ。しかし状況が芳しくないのは誰の目にも明らかだ。こちらは一方的に撃たれ、敵に対し損害どころか脅威すら与えていない。

「敵は電探（でんたん）照準射撃を実用化したようです」通信・情報参謀が分析した情報を、艦隊参謀長――天雲勇也（てんくもゆうや）少将が猪松に告げる。「遠距離からの射撃精度が高いのはそのためかと」

「電探」とは電波探針儀（でんぱたんしんぎ）の略称である。自ら電波を発し、敵艦や敵機との距離を測定する装置で、近年実用化された。瑞穂海軍でもその導入が進められているのだが、如何（いかん）せんまだ運用実績があまりない兵器で、高級将校たちの少なからずが「自ら電波を発すれば、逆探知装置で容易く発見されてしまうのではないか」と拒否反応を示している事でも知られる。

天雲は貴族出身者の将官らしく、まだ三〇代である。五〇代中頃の猪松と比べると、まだ思考に柔軟性がある。だから本国で研究開発が進められている、射撃用電探に関する理解があり、それを脅威だと受け止めたのだ。

「遠距離砲戦では」猪松は歯を軋（きし）らせながら訊ねた。「敵に分がある？」

「まず間違いなく」天雲は頷いた。「我々がこの距離から砲撃しても、百に一発も命中を期せません」彼は進言を付け加えた。「接近戦を挑まねば」

矢隠級戦艦は一隻につき四〇センチ四五口径連装砲を四基——合計八門装備している。接近すれば被害は更に拡大するかも知れないが、成程敵も無事では済むまい。遠距離砲戦では敵に利があるのだとすれば、肉を切らせて骨を断つ戦法を採用するよりあるまい。

「それで良い。直ぐに指示を出せ！」猪松は状況から参謀長の主張が正しいのを認め、その戦法を採用する事に決める。愚図愚図していたら、「瑞穂海軍史上有数の大艦隊を率いながら、敵に一方的に撃たれ続けただけの提督」との汚名を歴史に残しかねない。

進路変更が艦長に通達され、後続艦にも報（しら）される。一番手早く敵艦隊との距離を詰めるには、自ら丁字を描くように進む他なく、しばらくは忍耐を強いられるが、この際やむを得ない。接近戦に持ち込めば——あるいは同航戦となれば、砲の数の多さがものを言う。負ける気遣いはないはずだ。

しかし、そうした動きは敵に見透かされていた。瑞穂側は最も速度の遅い艦に合わせて二四航里(ノット)で動かねばならないのに対し、敵艦隊は最低速度が二九航里。時速に直すと九里程の優速を獲得していた。彼らはその速度の優位を、瑞穂艦隊とつかず離れずの位置を獲得するのに使用した。彼我距離を三万八〇〇〇間開けておけば、あちらから放たれた砲弾は決して命中しない——そう確信している様子だった。

「長官、敵は我々との距離を詰めるつもりはなさそうです」天雲が端正な顔を顰（しか）めながら、状況を的確に評した。日頃は社交界の貴婦人を射止めるのに役立つ彼の容貌は、心中の明らかな動揺を映し出す鏡と化している。

「やむを得ん。とにかく砲撃を開始しよう」

弾着観測機——戦艦主砲の命中率を向上させるための切札は、海戦が開始される直前に発艦させている。三万八〇〇〇間の彼我距離は確かに遠いが、砲弾を届かせるのは不可能ではない。彼らの働きに期待するよりない。

瑞穂海軍の戦艦に搭載されている弾着観測機は、この時点から六年前に採用された、九五式水上観測機を指す。「水上」と付く事からも判るように、この機体はフロート付きである。業界用語では「下駄履き」と呼ばれている。機体そのものの戦闘力は皆無に等しいが、艦隊決戦時にはなくてはならない存在だ。

矢隠級戦艦は、その下駄履きを各艦に四機ずつ搭載している。現在、敵艦を砲撃可能な位置にいるのは、「矢隠」だけだから、取り敢えずその所属機だけが仕事をすれば良い格好だ（砲撃もしていない戦艦の弾着観測機など、する事がない）。

その「矢隠」一号機——弾着観測機隊の隊長は、艦隊司令部の対応の遅さに、内心で腹を立てていた。後手に立ってから弾着観測をしると言われても困る。もうすこしどうにかならなかったものかな。これだから大砲屋は頭が硬くて困る——と。

眼下に拡（ひろ）がる光景は、戦況が決して芳しくない事を、無言で物語る。六隻の敵新鋭戦艦が瑞穂側の先頭艦——「矢隠」に砲撃を集中しているのに対し、こちらは散発的な砲撃をようや

く開始したばかりで、それすらも見当外れな方向に飛ばしている。

状況がこのまま推移すれば、大敗を喫するのは火を見るよりも明らかで、戦況打開を弾着観測機に求めたくなる気持も理解できるが、彼らは別に悲壮感を求めて空に上がっている訳ではない。飛行機に乗りたい、あるいは空に在りたいとの願望が最初にありきで、軍に籍を置いたのは、子供の夢の延長に過ぎない者が多い。

とは言え、仕事は仕事である。言われた事をやり、給料分の働きをせねば、税金泥棒の誹（そし）りを免れぬ。おまけに還（かえ）るべき母艦も沈没してしまう。

とにかく弾着観測を始めよう――と彼らが眼を凝らした時、更なる悪夢が、敵戦艦の後方から接近しつつあるのを、彼らは認めた。

「敵機、敵戦艦後方より多数接近中！」

この状況で接近中の敵機と言え、戦闘機――それも技量優秀な者だけで占められる、艦上戦闘機以外にあり得ない。この近くに敵の拠点になるべき島はないのである。彼らは戦場上空の制空権を確保し、勝利への道を確保する役者になるだろう。

航空母艦の存在を、各偵察部隊は認めていなかった。見落としていたのか、あるいは別行動中なのか。瑞穂海軍もその導入を検討した、空母機動部隊を、彼らはいち早く編成投入し、別行動を取らせていたのか？ その辺は判然としない。何しろ敵が保有する空母の所在地をきちんとと言える人間は、本国にすら皆無なのだから（敵信傍受――暗号解読が試みられているが、決め手がない）。

「いかん、こちらの弾着観測機が喰われる！」航空参謀が顔を歪めて危惧を表明した。速度・運動性能の両面で艦上戦闘機に劣る九五式水上観測機など、空戦開始から五分も持たずに叩き落とされる事が確実だからだ。

「弾着観測機を退避させて、戦闘機隊を前進させろ！」

猪松が慌てて指示を出す。彼が直率する部隊――第一艦隊には、制空権確保及び直掩（ちよくえん）のために軽空母「海鷲（うみわし）」「青鷲（あおわし）」が帯同している。一隻につき戦闘機が三五機――他に対潜哨戒用の艦上攻撃機を五機搭載している――と数はさほどではないが、とにかく急場を凌（しの）ぐには役に立つ。

固定脚の艦上戦闘機――九六式艦戦「清風（せいふう）」が、味方戦艦群の頭上を飛び越え、敵艦載騎群を目指して前進を始める。半数ほどが即座に戦闘加入できるようにと空中待機していたので、三四機の艦戦が戦闘に加入する形になる。

それに対し敵艦載機群の方は、驚くなかれ二〇〇機近かった。何としても決戦海域上空の制空権を握る――と言う敵艦隊の目論見が透けて見えるようで、プロペラから響き渡る爆音が雀蜂（すずめばち）の巣を悪戯（いたずら）半分に突いた者の末路を、不気味に想起させる。

「戦は数ではない。直に基地航空隊からも援護が来る。かかれ！」

勇気を武器に、「清風」隊は数に優る敵戦闘機群に挑みかかる。この時代の空戦は、格闘戦能力の有無が勝敗を分ける。速度は速い事に越した事はないが、旋回性能が劣悪な機体は嫌われる。少なくとも、瑞穂海軍では、そういうものだとされていた。

だが、出現した敵艦戦の群は、格闘戦（ドッグ・ファイト）に応じようとはしなかった。彼ら

は最大速度が時速四三五里に過ぎない「清風」に対し、五四五里――〇〇里近い優速を活かし、一撃離脱戦法を取る事に終始したのである。

「敵ハ新型艦上戦闘機ヲ投入セリ！」

各機の電信――無線機はまだ搭載されておらず、昔ながらの電鍵が意思疎通手段なのだ――は悲鳴じみた感じで、それを艦隊司令部に伝えていた。

「清風」は悪い機体ではない。瑞穂海軍が初めて製作した、全金属製の艦上戦闘機で、採用当時は世界水準を軽く凌駕（りょうが）していた。操縦性も良好で、新米飛行士でも直ぐに操縦のコツを呑み込めると言われている。

されども、五年の歳月が彼の戦闘機の性能を陳腐化させていた。仮想敵に定めていた、聯合帝国海軍・2号艦上戦闘機「飛龍（フライングドラゴン）」であれば、恐らく五分以上の戦いが出来たのであろうが、現在目前にいる相手は、それよりも二世代先――4号艦上戦闘機「火龍（サラマンドラ）」である。一二・七ミリ機銃四丁を装備したその機体は、数的差がなくとも「清風」にとり死神に等しく、その搭乗員たちを絶望と共に、空鉄（エアニウム）と入り交じった破片に変えていく。

初めから七倍の戦力差がある戦闘が、長期化する道理はない。空戦が始められてから二〇分と経たぬうちに、戦闘海域上空を飛び交うのは、翼や胴体に聯合帝国所属機であることを示す青星をつけた機体ばかりになっていた。

「戦闘機隊は一体何をしているのか!？」

苛立たしげに猪松が吼（ほ）える。航空戦の素人である彼は、何故味方機が片端から墜とされていくのか、その理屈が判らない。ただ不甲斐ない友軍に腹を立てるのみだ。

そんな司令長官の抗議の言葉が聴こえたのか否か、油断した「火龍」の背を取る事に成功した「清風」が、操縦席（コクピット）目掛けて一二・七ミリ機銃の束を叩き込んだ。防弾硝子（ガラス）が被弾の刹那に割れ砕け、その搭乗員を醜（みにく）い肉塊へと変貌（へんぼう）させる。機体そのものが如何に頑丈で、これだけ打撃を受けて尚、燃料の漏洩（ろうえい）なく誘爆の気配すらないが、こうなってはもうお仕舞いである。

操縦者を喪（うしな）った「火龍」はふらふらと降下を続けた。通常であれば、そのまま海面に叩きつけられ、墓標代わりの水柱を一瞬立てたあとで消えるだけのそれが、しかし瑞穂側に思わぬ災厄をもたらした。

何とした事か、その「火龍」は「矢隠」中甲板上に墜落したのである。機体の破片がそこかしこに飛び取り、付近にいた将兵にそれがザクザクと突き刺さり、彼らを血飛沫（ちしぶぎ）上げる即席剣山へと変える。次いで、破損した燃料タンクから飛散した航空燃料が艦上に纏い付き、小火災を発生させた。いずれも戦艦の砲弾に比べれば威力に乏しいが、問題にすべき被害はそこではなかった。「矢隠」の通信用アンテナが機体激突の衝撃と飛んできた破片で破損し、旗艦としての能力が一瞬にして奪われた事が一番の問題だった。

「矢隠」はそれまでに数度の被弾に耐え、主砲塔や機関部という重要区画には被害が及んでいなかった。まだ充分に戦えた。にもかかわらず全体を統率する能力を喪失した。

視点を「矢隠」のみに限定すれば、通信用アンテナの破損は大した問題ではなかった。電気系



統が健在だから艦内電話が使用できるし、伝声管もある。最悪、伝令を派遣すれば各所との連絡は取れる。だが、視点を艦隊全体にまで拡大すると、司令部の意思や判断を麾下部隊に伝える術がないのだから、司令部をそこに留め置く訳にはいかなかった。

「通信装置を損傷した旨を、後続艦に信号旗で報せよ。艦隊の指揮権を一時期次席指揮官に委ねる。その上で『矢隠』を一度後退させる。艦隊司令部を『穂先』に移動させろ」

猪松は素早く決断し、「矢隠」は舳先（へさき）を翻（ひるがえ）した。戦闘能力と戦意を残しておきながら、後退を余儀なくされるとは、彼女の乗組員らにとり、屈辱に他ならなかった。

だが、戦況は一戦艦の乗組員たちの心境とは無縁の方角で動いていく。何をどう取り違えたのか、次席指揮官——重巡部隊司令官五島基（ごしまもと）中将の許に「司令部に直撃弾！猪松大将以下司令部要員全員戦死！」という誤報が飛び込み、彼は指揮権を行使する正当性を得て、直率する部隊と水雷戦隊に一斉突撃を命じたのである。

「猪松大将の仇を討て！ 全軍突撃!!」

五島は悪い意味での水雷屋だった。前進と突撃以外は何も考えておらず、遮二無二突っ込めば成果は自ずとついてくると信じていた。そして辺境での海賊討伐戦では、そのある種の気楽さが裏切られなかった事も確かだ。

四隻の重巡——「名高（なだか）」「妙義（みょうぎ）」「白羽（しろばね）」「胸柄（むながら）」が敵戦艦を目指して躍進し、二隻の軽巡——「神代（じんだい）」「名内（なうち）」に率いられた二〇隻の駆逐艦が続く。

彼らは良きにせよ悪きにせよ、瑞穂式の水雷魂を持つ者らにより形成されていた。死を恐れずに前進し、砲弾魚雷に我が身を打ち砕かれても悔いはなし。

「どうしてよいのか判らない時は、砲声のする方角に突撃せよ！」

瑞穂海軍は、それを軍規則以上に重要視されるべき「掟」に定めていた。敢闘精神の欠如を何より恥とする戦士らしいものだと言える。

されども、今回はその勇気が裏目に出た。重巡・軽巡共に六隻ずつを有する敵艦隊は、彼らの前進を阻むべく突撃に応じ、たちまち各所で激烈な砲雷撃戦が展開された。戦闘は時に勢いであるが、この事あるを予測して手ぐすね引いて待ち構えていた敵勢に正面から挑みかかるなど、形を変えた自殺でしかなかった。

敵戦艦に対し必殺の雷撃——瑞穂海軍の秘密兵器である第二空気魚雷、他国が持たない純粹酸素を動力源とした、無航跡かつ絶大な威力を誇る魚雷——を叩き込もうとした駆逐艦群が、道程半ばで敵重巡の二〇・三センチ砲弾をしこたま振る舞われて被害を続出させるという光景が各所で見られた。何しろ敵には数の余裕がある。同数の戦力で相手を牽制し、余剰戦力を別所に投入するのは、そんなに難しい話ではない。

魚雷発射管を根元から吹き飛ばされた駆逐艦が、誘爆を起こして沈没——文字通りの轟沈をする。一本でも命中すれば巡洋艦クラスの艦ですら航行不能になる威力を秘めた九三式第二空気魚雷も、発射する前に艦上で爆発しては、味方に被害を与える事しか芸がなかった。

五島は自らが試みた戦局打開の企てが頓挫する様を見て、歯噛みした。彼が率いる重巡四隻も決して無力な部隊ではないが、砲門数や主砲発射速度で優る敵艦を相手に苦戦を余儀なくされ、

味方部隊の援護にまで手が回らない。

「それにしても、敵艦の砲撃の激しい事だ」

名高級重巡洋艦は二〇・三センチ連装砲塔を四基——合計八門備えている。そしてこの主砲は二〇秒ごとに一発を発射するように出来ている。決して遅くはない。列強と称される国々との取り決めで、巡洋艦の等級が定められて以来、何処の国でも巡洋艦の主砲発射速度はそんなものだ。

しかし彼らの目前にいる敵重巡は、六秒に一発——つまりは一分に一〇発は主砲弾を発射している。しかも彼らの重巡は、三連装砲塔を三基備えている。主砲口径も名高級重巡洋艦の二〇・三センチ五〇口径砲に対し、二〇・三センチ五五口径砲だから、一発あたりの威力も勝っている。

主砲の発射速度で三倍以上、一発ごとの打撃力も単純な威力指数計算——砲の大きさ×口径で決まる——で——〇・五も差をつけられては、勝てる道理など初めからありはしなかった。瑞穂海軍が得意とする夜戦で、島影を利用した待ち伏せ作戦などを行えばまた別の結果が出たのかもしれないが、朝方に正面決戦を挑むのは無謀に過ぎた。

軽巡二隻にしても、展開は似たようなものだ。彼女らは一五・五センチ三連装砲塔五基——合計一五門の主砲を装備する敵軽巡六隻に撃ちかけられ、大苦戦をしていた。この時点で艦暦二〇年を超える旧式艦に部類される彼女らは、主砲が一四センチ単装砲七門に過ぎず、単純な砲門数ですら九〇対一四と話にならない開きが生じていた。如何なる敢闘精神の持主であれ、六倍の差を容易く覆（くつがえ）せるはずもなく、時間の経過はただ損害の増加を招いた。

「五島の奴は一体全体何をしておるのか!？」

誤った情報が戒められなければならぬ乱戦を招いたのを状況から察した猪松が、次席指揮官を罵った。罵言に状況を好転させる力などなき事は、彼自身が一番良く理解できているのだが、口にせざるを得なかったのだ。

その頃、「矢隠」に代わり戦艦部隊の先頭に立たされた「時和」も、姉同様に優速な敵勢に近づく事すら叶わずに損害を受けていた。想定内の最大射程を超えた砲撃をして、尚かつ命中させるのはもはや奇跡に近い事を、彼女の砲撃は無言のうちに物語る。

「せめて弾着観測機が機能していれば……」

「時和」艦長——浅橋豊次（あさばしとよつぐ）大佐は齒軋りをした。搭乗員の怠(たい)慢(まん)が原因ではない。敵戦闘機の予想外の数がいけないのだ。軽空母二隻合計で七〇機の戦闘機は、制空権を確保するのに、決して者足りぬ数ではなかった。従来常識に従えば。

猪松大將は航空部隊をさほど重視していないが、さりとして弾着観測の重要さを理解していない訳ではない。基地航空隊も二〇〇機近い戦闘機を擁している事を思えば、必要数は事前に充分揃えたと言ええる。

では何がいけなかったのかと言え、戦闘海域を爬間諸島の中心部——州都フォノルルのある親夫（おやふ）島から二〇〇里離れた場所に定めた事か。

瑞穂海軍が東橋道洋最大の軍港を置く阿古屋（あこや）湾を眼前に望む位置に艦隊を展開すれば、成程流れ弾が基地施設や民間人の居住区域に落ちる可能性は絶無ではない。特に後者は問

題だ。平和な南国であるところの爬間諸島の民間家屋は、その殆どが木製だ。戦艦や巡洋艦の主砲弾が直撃すれば、木端微塵(こっぱみじん)に吹き飛ばされる事だろう。人的被害は莫迦にならず、国民の軍に対する信頼を揺らがせる原因になりかねない。

だが、国民の信頼を最も裏切る行為と言え、敗北ではないか？

特に国民の血税を注ぎ込んだ戦艦群が縦しんば壊滅などでもしたら、心的物的打撃は計り知れない。そもそも主力艦隊が潰れたあとに、一体誰が瑞穂を護るのか？

「清風」隊が完全に駆逐され、戦場海域上空に、翼や胴体に赤丸を記した機体が儂く潰れ去ろうとした時――ようやく待ち望んでいた増援が訪れた。異変を察知した軽空母二隻が慌てて残存機を寄越したのと、緊急発進(スクランブル)した基地機が空中で合流し、合計七〇機ほどの編隊となって、現場に到着したのだ。

戦力の逐次投入とは、戦略レベルで見ると最悪の行為である。敵に勝てないからと他所から兵力を転用する際に生じる、時間や物資の浪費もさることながら、本来は抑えられた味方部隊の損害が重なるという事象も無視できない。初めから一万か二万投入していれば楽勝のうちに済んだのに、一〇〇〇だの二〇〇〇だのを段階的に投入した結果、軍組織そのものを揺るがすような損害を出した――との事例は、戦史上に数多い。

もっとも、いきなり三〇〇機近い戦闘機を前線に投入し、予備隊を零にするという振舞も、事態が急変した際の対応力をなくす、との観点から批判できるので、一概にこの展開を莫迦のする事だと決めつけるべきではないのだが。

勝ちに驕る敵戦闘機群は、新たな――そして復讐の念に燃える戦闘機隊と出くわし、なし崩し的に戦闘を余儀なくされた。自軍の三割程度とは言え、疲労度の低い新鮮な部隊が突入してくれば、ある程度の苦戦はやむを得ない。航空戦に関しては、戦況は五分五分となった。瑞穂側の弾着観測機がどうにか行動可能となる。

「まだ、やれるか……？」

戦艦部隊に籍を置く将兵らは、等しくそう思う。だがそれは悪魔の誘いであったのかも知れない。補助艦艇部隊も大苦戦をし、戦艦もまた駄目と来れば、温和(おとな)しく撤退し、基地部隊と共に沿岸部での迎撃作戦をする気になれたのに、希望を与えられたせいで引き際を見失い、戦いが継続される事になったのだから。

前甲板に被弾し、第一主砲塔、次いで第二主砲塔を爆砕された「時和」は、砲撃能力の半分を消失した――との事で後退を決めた。被弾力所を覆い尽くさんがばかりに立ち籠める真赤な焰や黒煙が視界を凄まじく悪化させ、消火しなければ戦闘継続すら困難だとの事情もある。

敵にまともな打撃を与える前に、戦艦の数を互角にされた――との焦りがある瑞穂戦艦部隊は、とにかく敵との距離を詰めようともがくが、「冷徹な戦闘機械」と称したくなる艦隊機動を取る敵戦艦群に隙を見出せず、損害を累積させていく。三番艦「龍隠」も戦況を好転させる事は難しいかと思われた。

しかしここで偶然がもたらした変化が起きる。瀕死の駆逐艦群が放った魚雷が航走を続けた結果、敵戦艦の四番艦及び五番艦にそれぞれ二本、一本と命中させ、彼らの動きを乱したのである。

これは第二空気魚雷の長射程——最大射程距離四万間という、戦艦主砲に匹敵するだけの航走距離に起因する、奇跡に等しい出来事なのだが、瑞穂海軍の秘密兵器を知らない敵艦隊からすれば、戦場海域に潜水艦が紛れ込んでおり、密かに接近されていたのではないか——との恐怖を呼び起こした。

そのため、瑞穂駆逐艦群を文字通り「駆逐（デストロイ）」しかけていた敵駆逐艦が呼び戻され、戦艦部隊の周囲にところ構わず爆雷を投げ込むというおかしな風景が現出した(一連の被害は潜水艦によるものではないので、戦果を挙げられる道理はないのだ)。

「一体何が起きたんだ!？」

戦場で状況が激変するのは珍しくないが、突然敵戦艦の横腹に丈高い水柱が立ち上がったかと思うと、いきなり敵駆逐艦群が爆雷を連続投射し始めた。その様は各戦艦の艦長らの頭に疑問符を浮かべさせた。彼らはこの海域に潜水艦が派遣されていないのを作戦説明（ブリーフィング）の段階で報されているので、これが当然の反応だと言えた。

されども、理屈はどうあれ、好機は好機である。敵戦艦の隊列は著（いちじる）しく乱れ、先程までの機敏な機動は望めぬ。彼我距離を詰め同航戦に持ち込めば、砲門数で敵を圧倒するのは充分可能だ。

「天は未だ我らを見捨てず！ 突撃!!」

旧式戦艦部隊——「神勢（じんせ）」「初宮（はつみや）」「敷島（しきしま）」「皇京（こうきょう）」により構成されている戦艦群を率いる栗田義雄（くりたよしお）中將が吼える。彼が預けられた戦艦は、その全てが今から二〇年以上も昔に造られた代物で、それゆえ主砲が三六センチ四五口径砲なのだ。一発の威力や射程距離がどうしても矢隠級戦艦に劣るから、距離を詰めねば戦闘加入すら覚束ぬ。彼が勇んで躍進する気になったのは、精神力では越えられぬ壁を乗り越えるためだと評せた。

一本でも命中すれば巡洋艦クラスの艦を航行不能にするとされている第二空気魚雷は、設計者の願望を叶えた。四〇センチ四五口径砲、三八センチ五〇口径砲をそれぞれ装備する戦艦及び巡洋戦艦は、高速を発揮していたせいもあり、被雷力所から大量の海水を呑み込んで部隊から脱落した。

一般に信じられている程、戦艦は頑丈ではない。傾斜が三〇度を超過してしまうと揚弾機(ようだんき)——主砲弾を砲塔内に揚げる装置——が作動しなくなり、砲撃が不能になる。方位盤射撃装置が被弾時に破損し、統一射撃が不可能になっても砲撃力は激減するから、戦闘艦としての価値は大いに減じる。

被雷した敵戦艦は、それらに加えて速力の低下——注排水装置により艦の均衡はどうにか保たれていると思われるが——も起こしている。これでは足手纏いにしかならないと、敵艦隊司令官は判断したのだろう。でなければ、戦力の三分の一に相当する数をあっさり後退させるはずがないのだ。

数的優位を再び確保した瑞穂側は、お返しとばかりに今度は敵戦艦群の頭を抑え、全艦で砲撃を開始した。「龍隠」「穂先」の四〇センチ四五口径砲一六門が、「神勢」「初宮」「敷島」「皇京」の三六センチ四五口径砲四八門が敵戦艦群の先頭艦に対し放たれる。

百雷（ひゃくらい）にも優る激烈な砲撃音が響き、砲煙が周囲をドス黒く染め上げる。彼我距離二万五〇〇〇間から発射された各艦の砲弾は、目標物の周囲に「天然色（テクニカラー）の水柱」を林立させる。

これは弾着修正を容易にするために、砲弾内に染料を仕込んであるから起きる現象である。同一目標に複数の艦が砲撃すると弾着観測——修正が難しくなる。どの砲弾をどの艦が撃ったのか皆目見当不能では話にならない。だが、こちらが赤で隣が青という風に区別がつくのなら、弾着観測をする方も責任が持てる。

先頭を進む敵戦艦に二発の直撃弾が生じる。外れたものはどれだか判るが、命中したものに関してはよく判らない。第一主砲塔及び艦橋基部に飛び込んだそれらは、前者がその天蓋（てんがい）にヒビを入れ、後者が超重量級の拳闘家（ハード・パンチャー）が渾身（こんしん）の一撃を叩き込んだ砂袋（サンドバック）のような袂（えぐ）れが生じ、それなりの打撃を与えた事が証明された。

「この調子なら、いけるのではないか？」

航空戦と補助艦艇同士の戦闘は相変わらず混沌とし、好転する兆しささえ見えないが、戦艦部隊はどうか逆転できそうだ——栗田はそう考えた。

栗田の考えは、ようやく司令部を「穂先」に移動させた猪松と同じものであった。大昔の陸戦が、騎兵同士の戦闘で敗れようとも、中央にいる歩兵同士の戦闘で勝てば、それを帳消しにして戦場の勝者になれたのと同様なように。

両翼が崩壊し背後に回り込まれるのが先か、中央突破して敵の指揮系統を崩壊させるのが先か、それらは二次元的な発想であり、盤上遊戯（ボードゲーム）に興じる人間と大差ない思考回路だが、単純な数と兵の質により勝敗が左右された頃だと、それでも十分に通用した。惑星海球で二〇〇〇年の時を越えて語り継がれる伝説の戦い——カンネイ会戦にしても、「理想的な包囲殲滅戦」として知られるが、そこに三次元的な部分はさほどなく、大勝したカルタヒネスのハミルカル・バルカスにしても、偵察に飛龍を用いたぐらいだ。

この時、瑞穂側の上級指揮官たちは、空の脅威を精々が「弾着観測機が機能しなくなる」ぐらいにしか捉えていなかった。だが、彼らはもう少し頭を働かせるべきだったろう。二〇〇機以上の艦上戦闘機を展開できる相手が、本当にそれだけしか戦場投入してこないのか——という事について。

異変は、瑞穂戦艦群が斉射に移行し、敵戦艦群の先頭艦を叩きのめそうとしている時に生じた。役目だからと空を睨み続けていた見張員が、真先（まっさき）にそれに気づいた。

「敵機多数接近中！」

「また敵戦闘機か!？」

奴らは何隻空母を投入してきたんだ——と猪松は苦々しげに思う。こちらは本国の対応の遅れが響き、航空戦力の増援が遅れた。開戦直後に後手に回るとロクな事にならないな——と彼は吐き捨てたくなる。

だが、出現したのは戦闘機ではなかった。この場合、より質の悪いものだ。

大空に爆音奏でながら来襲したのは、艦上爆撃機「隕石（メテオ）」と艦上攻撃機「喰らう

者（イーター）」であった。これらが合計で一五〇機以上。前者が二五〇斤爆弾を一発、後者が八〇〇斤航空魚雷をそれぞれ装備していた。

「敵は砲撃と航空攻撃を同時に行うつもりか!？」

敵の意図が見て取れた。無茶苦茶な作戦と言い切る事は出来ない。瑞穂海軍も思考実験だけでなく可能性の追求という意味でその種の演習を行い、効果を試した事がある。

そして、「成功すれば効果が大きいが、同士討が発生する確率が高く、賭博性が極めて高い戦術だと言わざるを得ない」との結論を導き出し、採用は沙汰やみとされた。

敵艦隊の司令官は、その「賭博性が高い戦術」を決戦中に行う腹を固めたらしい。無謀と言うよりか「可能性の追求に熱心」と評すべきなのか。

「対空戦闘用意！」

各戦艦の艦長が、異口同音に叫ぶ。爆弾の一発や二発で沈む程、戦艦は脆弱ではない。しかし魚雷は脅威だった。一本でも命中すれば速度減は避けられぬ。複数命中すれば、戦場ど真ん中で航行不能になるという最悪の事態を招きかねない。

これまで戦場にありながら暇を囲（かこ）うていた高角砲員や対空機銃員らの動きが俄に活発化する。主砲用の対空砲弾もあるにはあるが、各艦に於ける搭載量は少なく、また空中を高速移動する航空機を相手に発射速度の遅い大口径砲を用いても効果は低い。それに何より敵戦艦を放置して対空戦闘に主砲を用いる訳にはゆかぬ。

戦場に於ける敵味方の識別は、慣れている者でも時に間違う。昼間だから簡単に区別がつくという訳ではなく、砲煙による視界悪化なども考慮すると、一定以上の部隊を戦闘に加入させるのは躊躇われるところだ。

瑞穂と聯合帝国の戦艦の差違とは何か、と問われれば、それはまず第一に艦橋の形であろう。瑞穂の戦艦は近代化改装の際に、艦橋を大型化し、古い城の天守閣を連想させる形になったが、聯合帝国が現在戦場海域に展開している新鋭戦艦は、いずれも艦橋が塔状をしている。被弾面積を減らし、コンパクトに収めている。

これは技術力の差と言うよりか、設計思想の違いと評すべきで、瑞穂側は各戦艦に高い指揮機能を持たせるべく腐心し、聯合帝国側は戦艦そのものを細身（スマート）にし、被弾する可能性自体を減じさせた。

どちらが正しいのかどうかはともかく、敵味方の識別が難易度を下げたのは間違いない。空から見下ろしても、模型や絵にした時に映える形をしている瑞穂戦艦は目立った。

「急降下爆撃隊突撃！」

艦爆が攻撃の口火を切る。機体名称のように「隕石」を想起させる勢いで彼らは急降下する。頑丈に造られている機体が、降下角度四五度――搭乗員の側からすれば、垂直に等しい急角度で標的との距離を詰めていく。

瑞穂側も勿論反撃している。一二・七センチ高角砲や二五ミリ対空機銃が艦爆を狙い撃つ。しかし高速で移動する艦爆隊を目視だけで追尾するのは難しく、殆どが後追い射撃となり、空中に虚しい黒い華が咲き誇る。

「対空火器は何をしているんだ！」

一向に落ちる気配のない、敵機の群を睨んでいる見張員が、罵るように叫んだ。実際彼は不甲斐ない味方に腹を立てているのだが、攻撃を許せば戦死する者の中に含まれる確率は彼もまた高いのだから、真剣である。

目標物との距離を、数千間から数百間にまで詰めた「隕石」の群は、爆弾を一斉に投下した。撃沈を期している訳ではない。まずは対空火器を沈黙させて、それから艦攻隊が魚雷で料理するつもりだ。獲物の牙を叩き折ってから止めを刺す戦法。

最初に被弾したのは、戦艦「敷島」であった。三六センチ四五口径砲連装六基――合計一二門の主砲を持つ彼女は、火力という意味では、敵戦艦にそんなに見劣りする存在ではなかった。しかし主砲の発射速度は一分に一発、機関部は配置の関係から改装・強化が難しく、最大で二四航里しか出せないこの艦は、防御力でも難を抱えていた。

後甲板に装甲らしい装甲がない「敷島」は、何とした事か五〇斤爆弾の直撃でそこを破壊される――という恐ろしい判定を、戦前の段階から受けていた。一度主砲を撃つと、凄まじい黒煙が立ちこめる事から、「自らの砲撃で煙幕を張り、砲撃困難になる戦艦」とも揶揄（やゆ）されていた彼女は、「前線での使用は好ましくなく、いっそ練習戦艦に艦種変更した方が、余分な損害が出ずに済むのでは？」とまで言われた。

しかし日々悪化する聯合帝国との関係が、一隻でも多くの戦闘艦艇を海軍に求めさせ、「使用可能であるのなら、取り敢えず使おう」という妥協をさせた。幾つもある欠陥は綺麗に無視され、「敷島」は引退する時機を喪ったのだ。

その、上層部の過る判断のツケを払うのは、いつとても前線部隊の将兵なのである。彼らは真先に「隕石」の洗礼を浴び、五・六番主砲との中間部分に二五〇斤徹甲爆弾を受け、予想通りの大被害を受けた。

缶（ボイラー）の幾つかが被弾の刹那にその動きを止め、電路を各所で寸断された。人間で言えば、血管と神経を突然ズタズタにされたに等しく、荒れ狂う爆風は各所で乗組員を薙ぎ倒した。

「応急修理班（ダメージ・コントロール・チーム）急げ！」

「敷島」艦長は叫ぶが、艦内電話ですら満足に機能しない状態では、機能的な被害対策は難しい。さすがに瞬時に轟沈する事はないが、彼女の戦闘力が著しく削がれたのは誰の目にも明らかで、速度減もあって落伍し始めた。

次に被弾したのは「敷島」の同型艦である「皇京」で、彼女は前甲板に位置する第一主砲塔に直撃弾を受け、その基部（ターレット）が歪み、発射不能となる。「ああでもない、こうでもない」と弄くり回した物は何でも故障しやすく扱いが難しいが、彼女もその例外に漏れず、応急修理に必要とされる人材はいても、それを有効的に機能させるのは困難だという莫迦げた――ある意味では喜劇的な現象を起こしていた。

「神勢」「初宮」も災害とは無縁ではない。彼女たちの方は、主砲塔や缶室（ボイラー・ルーム）という主要区画に被害を受けずに済んだが、直撃弾が高角砲を、連続する至近弾が防楯のない対空機関銃の操作員を薙ぎ倒し、対空火力を大幅に低下させていた。「全体的な損害比率からすれば大したことはないが、深刻な被害」を受けていたのだ。

「長官、敵の航空部隊に対処する術はありません！　ここは一時的に退却し、態勢を整えるべきです。このままでは我々は……！」

無視できぬ規模の損害。それが累積する様に肝を潰した参謀の一人が、猪松に進言する。

「何処に逃げるといふのだ!？」

その進言に対し、猪松はあたかも政敵に対する政治家のように冷たい視線と言葉を投げつける。敵戦艦の六隻中三隻までも撃破したが、残りの三隻は健在なのだ。ここで戦場離脱などを企てたが最後、追撃を受けて大損害を被るのは、誰にでも判る。

大体、対空防御陣形――輪形陣すら組んでいない状態で尻に帆をかけたら、余計に航空機による損害が増すではないか。飛行機が戦艦を振り切れても、その逆は無理なのである。

踏ん切りがつかぬままに抗戦が継続される。既に敵の先頭艦――恐らくは艦隊旗艦だろう――は撃破されて退場しているが、後続艦の三隻は未だ意気軒昂で、屈する気配を見せない。それに対し瑞穂側は敷島級戦艦二隻の大破落伍――速度が半減した僚艦に合わせる事は、流石（さすが）に出来ない――が発生し、ジリジリと押され気味になる。

「こちらが苦しい時はあちらも苦しいのだ！」

撤退を訴える幕僚らに対し、猪松はそう口にして黙らせる。実際、戦艦同士の戦いは、同航戦に移行しており、この段階ではどちらが戦場の勝者になるかは判然としない。補助艦艇や航空戦での劣勢を覆すには、敵戦艦を完全に撃滅する以外にあり得ない――その信念が彼を支えていた。

だが、精神力だけで戦いに勝利した事例は皆無だ。大抵は物量の限界が先に訪れ、次いで精神が折れる。爬間諸島――東橋道洋の要衝を巡る戦いもその例外に漏れず、瑞穂側に「その時」が訪れる瞬間がやってきた。

「敵駆逐艦群が突進してきます！」

「穂先」艦橋見張員が指し示した方角に、猪松は視線を転じる。双眼鏡を構えて状況を確認する。成程確かに艦首で波濤（はとう）を砕きながら突撃してくる駆逐艦が六隻――敵の基準から言えば二個駆逐隊――の姿があるではないか。

「迎撃しろ！」猪松は血相を変えて叫んだ。

矢隠級戦艦は元が高速性を重視した巡洋戦艦である。防御力を犠牲にして砲撃能力を求めた艦なのだ。改装を重ねて防御力を増した結果、戦艦に艦種変更されてはいるが、水中防御力――魚雷に対する防御力は近代戦を遂行するに際し、少し不安がある旨が指摘されている。

何しろ瑞穂海軍が四半世紀前に夢見た海軍大拡充計画――二〇（ふたまる）艦隊計画艦の嚆矢（こうし）となるべく建造された艦だ。戦艦と巡洋戦艦を一〇隻ずつ。空母や巡洋艦に代表される各種補助艦艇を二〇〇隻建造するという大風呂敷な話の名残を残した艦だ。それが近年になり製造された魚雷を受けて耐えられるのか否か、未知数だ（敵国の魚雷の威力を正確に把握している人間など、開戦前には絶無だ）。

敵戦艦の砲撃ならば耐えられると踏んでいる猪松が、魚雷を喰らうのはまずいと感じるのも無理はなく、即座の迎撃を命じるのも当然だった。

矢隠級戦艦には、そうした事態を想定して、一四センチ単装砲――軽巡の主砲としても使用さ



れている艦載砲――が二〇門装備されている。片舷に一〇門――軽巡一隻分以上の火力を差し向けられる。相手が駆逐艦であれば、一発か二発命中させれば撃沈破が可能なはずで、通常であれば相手をするのは難しくなかった。

けれども――

「敵戦艦の砲撃で副砲群は半壊しています！」

戦艦の主砲塔は、敵からの執拗な攻撃を受ける事を前提に造られているので、簡単には壊れない。敵弾の一発や二発は跳ね返せるようにしておかないと、即座に轟爆沈する「鉄の棺」になりかねないからだ。

しかし、軽巡主砲を転用、あるいは共通装備する事が多い副砲だと、砲戦の最中に大被害を受けるのも珍しくない。隣の爆発に巻き込まれて、小爆発が連鎖するとの展開も多く、被害対策のやりようがない――との事情も絡むが、破損しやすいとの事実は、戦闘中は理屈を抜きにした致命傷になりかねない恐ろしさを持つ。

「提督、主砲を一時的に駆逐艦に向けさせてください！」

「穂先」艦長――田畑勲（たばたいさお）大佐が泣くような声で訴えた。敵戦艦に対する射撃情報を最初から取り直す破目になろうとも、艦の保全を第一に考えねば、ここが墓場になりかねない――との悲壮感を、彼の言葉は醸し出している。

「やむを得んか」猪松は進言を認めた。「主砲で迎撃しろ！」

艦内電話を通じて艦長や司令部の判断を伝えられた各主砲塔は、大慌てで砲撃目標を変更する。統一射撃などする余裕がないから各個射撃になるが、致し方なかった。

聯合帝国の駆逐艦が装備する魚雷――彼らは砲雷分離主義を徹底しており、巡洋艦以上の艦には魚雷を装備させていなかったが――の射程距離は、瑞穂海軍と比べると短い。射程距離が八〇〇〇間程度なのだ。だがそれだけに思い切って距離を詰めてくる傾向があり、一度発射されると回避が困難である。

瑞穂戦艦群に対し呐喊（とっかん）をかけた駆逐艦群にしても、最大射程で狙って命中する訳がないと、思い切り踏み込んできた。彼らは彼我距離が四〇〇〇間になるまでに少なからぬ犠牲を払わされた。四〇センチ砲弾を艦体中央に受けた艦が真二（まっぶた）つにされたり、一四センチ副砲弾を連続で被弾した艦が蜂の巣のようになり停止したり、魚雷発射管に高角砲弾を受けた艦が瞬間的に誘爆したりし、その半数を攻撃前に喪失した。

だが残された三隻は、一隻につき一〇門装備する魚雷を何とした事か彼我距離二〇〇〇間で発射――扇状に放射された「白い殺人者」が、「龍隠」に狙いを定めて忍び寄る。

「回避！ 回避！」

標的にされた「龍隠」は、艦長以下の全乗組員らが必死の努力を以て破局から逃れようと足掻いていた。魚雷は全弾命中を期する兵器ではないから、三〇本の魚雷を全て被雷する道理はない。しかしその三割を受けただけでも沈没は必至となると、恐慌（パニック）状態になるのも無理はあるまい。

果たして凱歌（がいか）はどちらに上がったのであろうか？ 戦艦か仲間の半数を残酷な神の生贄に供した駆逐艦群か？ 不吉の訪れを告げる彗星のように白い尾を引きながら前進した魚雷

の群が、それを雄弁に物語った。

発射された魚雷の二割一六本が、「龍隠」の左舷に命中した。「艦首から艦尾にかけて満遍まんべんなく」との表記が相応しく、彼女の脾腹（ひばら）は鋼鉄製の鮫（さめ）に食い千切られたのだ。複数カ所から同時に発生した浸水が、彼女の傾斜を一気に悪化させ、砲撃を不可能にする。

「いかん！」

「龍隠」艦長一一三国典重（みくにのりしげ）大佐は顔を青ざめさせた。片舷に致命的な集中被雷をした以上、もはや沈没は避けようがないのを、瞬時に悟ったのである。乗組員らが押し寄せる海水を前に、隔壁を慌てて閉鎖するなど、被害が拡大しないように努力しているが、それは沈没までの時間を僅かながらに延ばす虚しい努力でしかない。

「総員、最上甲板！」

これは退艦命令である。沈没を免れない艦に乗組員を残し、一緒に海没させるという莫迦げた事態を防ぐための措置だ。戦闘中でも海に飛び込めば助かる可能性は零ではない。

されどその命令が発せられるのは、少し遅かったと見える。急速に傾斜を増した「龍隠」は、砲弾が横滑りを起こした結果、砲塔内爆発を起こし、それが負の連鎖反応を招き、大規模な誘爆を起こしたからだ。

艦内を「焰の龍」が荒れ狂い、各種砲弾を乗組員と共に呑み込んでいく。その様子は地獄さながらで、そこにあるものは人や物の違いを問わずに燃やされ、瞬間的に燃え尽きていく。あとには何も残らない。

爆焰に包まれた「龍隠」は、竣工（しゅんこう）時に新聞に記載された「我が国の将来を担うに足る美しさを持つ精悍（せいかん）な艦」の外観をなくしていた。溶鉱炉から取り出されたばかりの灼熱（しゃくねつ）の鉄塊と化していた。主砲とはその全てを喪失し、艦橋もその半ばが溶け崩れ、落城した城の跡を思わせる有様だ。

その「醜く変貌した姿」を敵にも味方にも見られたくない一一と訴えかけるように、「龍隠」は極めつけの大爆発を起こし、キノコ雲や水蒸気に包まれて海面に没していった。脱出に成功した乗組員の数は、この段階で三桁に満たない。大半が彼女に殉じたのである。瞬間的に一〇〇〇名以上の戦死者が出たのだった。

味方の戦艦が、しかも艦隊決戦時の切札と目していた矢隠級戦艦三番艦の喪失は、猪松に強い精神的な打撃を与えた。これで戦場に残された矢隠級戦艦は、彼が座乗する「穂先」だけだ。この状態で敵の新鋭戦艦群に対抗できるのかと言えば疑問だ。

そこに、更なる悲劇が重なる。

「敷島」が応急修理に失敗し、大爆発を起こしたのだ。彼女を沈没に至らしめたのは、設計段階で抱えた欠陥によるものなのだが、航空攻撃が致命傷になったという部分は紛れがなく、彼女は「航空攻撃により撃沈された初めての戦艦」という二重の不名誉を被った事になる（戦争は数字が全てだとの金言があるが、名誉や不名誉を問われる究極の場でもある）。

相次ぐ味方戦艦の沈没に、流石の猪松の強情も折れた。制空権を確保できる見通しはなく、補助艦艇の群一一敵水雷戦隊が全周を包囲しようとしている状況で戦闘を継続しても徒（いたずら

)に犠牲が増えるだけだ。撤退するしかない。

猪松が撤退を訴える参謀らに頷いて見せたのは、それでも尚、数瞬を要した。

戦闘は進撃よりも撤退が難しいと俗に言う。敵を求めて進撃するのであれば、将兵の士気を維持するのも容易いが、敗北感に打ちのめされ、尚かつ現実には敵の追撃という物理的脅威が伴う中で被害を抑えるのは、事実困難だ。疲労の果てに現実には抗うよりか敵に殺された方が楽だと感じる者がどうしても現れ、彼らは隊列から気づけば消えてしまう。撤退戦の最中に行方不明者が大量に出るのはそのためだ。

皇国聯合艦隊・臨時総旗艦を務める「穂先」の周囲を取り巻く状況も、その悲惨な敗走を物語る。彼女は撤退の最中に砲爆撃を受け、三番主砲塔及び四番主砲塔を破壊され、使用不能にされていた。周辺には脇を固める僚艦の姿もなく、孤独な撤退をしている最中なのを教えてくれる。

「やはり沖に出ずに、阿古屋湾を背にして戦うべきでしたかな」強い疲労感を覚えている表情で、天雲が戦いを振り返る。

もし、親夫島から二〇〇里離れた海域でなければ、基地航空隊の航空支援（エア・カヴァー）をより容易に受けられたはずで、航空優性の確保は無理でも、五分の戦いは出来たはずなのだ。「沖に出て戦えというのは、本国政府（セントラル・ガバメント）からの要望だ。我々にとやかく言う筋合いはない」猪松は座席に腰掛けたまま、慚然とした面持ちで応じた。

当初、皇国聯合艦隊は聯合帝国との決戦海域をより西に――中部橋道洋の要衝である、珊瑚岩礁帯（さんごがんしょうたい）に定めていた。そこには海軍が戦前から整備していた大規模な軍事施設があり、航空隊もそれに見合うだけの数が揃えられていた。

ところが、爬間諸島に利権を持つ議員らが、軍部の計画――東橋道洋地区の放棄、戦略的撤退に待ったをかけ、強引かつ乱暴に、爬間諸島沖を決戦場にするようにと圧力をかけた。その莫迦げた提案を採用した内閣閣僚や彼らの操り人形だとの噂もある総理大臣にも責任があるが、「恐らくどうにかなるだろう」と事前計画の変更に応じた猪松らも、責任からは逃れられまい。

そして主力艦隊は決戦に敗れ、事態は最悪のものとなった。

爬間諸島が戦火に呑まれぬようにとした措置が裏目に出た以上、彼の地が敵艦隊の攻撃に晒されるのは疑いの余地がない。

戦果報告や猪松が我が眼で確認した情報によれば、敵主力艦隊の半数は撃沈破した計算になるが、半分が健在ならば、敵は作戦を継続できる。

何しろ敵にはまだ、所在不明な機動部隊がいるのだ。航空優性を確保しさえすれば、戦艦部隊が戦力半減でも上陸作戦は遂行できるだろう。

猪松は爬間諸島の住民が聯合帝国軍の軍靴に蹂躪される光景を束の間だが想像した。我が艦隊の勝利を信じて疑わなかった同胞たち。苦勞して未開の地を開拓してきた入植者たち。我々に帰属する事で安全を確保した先住民たち。彼らを護る術は、もうない。

だが、艦隊を預かる者が真先に絶望を表明する訳にはゆかぬ。

猪松は殊更に力を込めた声で、幕僚らに告げた。

「状況は極めて悪いが、絶望的ではない。艦隊残存戦力と基地航空隊の総力を合わせれば、時間稼

ぎは出来るはずだ。その間に増援が来れば、逆転は不可能ではない」

指揮官とは、時に自分すらも信じられぬ嘘をつかなければならない。今がその時だと、彼は自らに言い聞かせている。そんな上官の心理を慮（おもんぱか）り、幕僚らも頷いた時――  
「敵機直上！」

艦橋見張員が声を嗄（か）らして叫んだ。敗走中で皆が混乱していたので、頭上に位置されるまで気づかなかったのだろう。空気が瞬間的に凍り付いた。

「また艦爆か！」急降下爆撃機に散々に痛めつけられた後なので、猪松には先入観がある。彼は重ねて訊ねた。「数は判るか？」

「一〇機――一個中隊程度です！ 高度は推定六〇〇〇間！」

瑞穂海軍は機種を問わずに飛行機は一〇機で一個中隊としている。それが三個か四個で大隊となり、大隊が同じく三個か四個で聯隊になる。つまり一〇機とは最小の戦術単位に他ならない。

「一〇機か。それだけならどうにかなるか……？」

親夫島――そこにある阿古屋湾はもう目前だ。軍港内ならば戦艦主砲を転用した陸上砲台が複数設置されているし、何より複数の大型艦艇が一度に通行できる幅がない。敵艦隊が如何に執拗（しつよう）でも、五分以上の戦いが出来るはずだ。

その微かな希望は、だが次の瞬間には波の直撃を受けた砂城のように溶け崩れた。

「敵機爆撃を開始！」

「何だと!？」

高度六〇〇〇間から爆撃を開始してどうするのか――との疑問が、猪松の脳裏をチラリと過ぎる。やる気のない飛行士が、「攻撃すれども命中せず」という報告書を作成するためにそうしている可能性があるが、まさかこの段階でそんな奴が出てくるとは思えないし――

皆も感じたであろうその疑問は、程なくして氷解した。「穂先」の周辺に林立した丈高い水柱、艦底部から突き上げてくる水中爆発の衝撃が、投弾された爆弾が「ただの航空爆弾」ではない事を教えてくれたからだ。

「八〇〇斤徹甲爆弾――いや、戦艦の主砲弾を改造したものか!？」

瑞穂海軍にも、似たような装備がある。それは矢隠級戦艦の主砲弾を基礎にして造った航空爆弾で、艦攻や重爆撃機に対し配布された。命中率は、高高度からの爆撃に頼らざるを得ないので極めて低いが、実験では戦艦の装甲板を一撃で貫通し、致命傷を与えられるとの判定を得られた。

「そんなものが一発でも命中したら……！」

既に「穂先」は度重なる被弾で戦闘力や乗組員らの士気がかなり低下している。中破状態にある。死傷した者も多いので、応急修理能力も低下している。止めになりかねない。

――頼む、躲（かわ）してくれ。そして耐えてくれ……！

祈りにも似た思いが、皆の脳裏を駆け巡る。「穂先」まで沈没してしまうと、爬間諸島の防衛は本当に絶望的になる。何としても踏ん張ってもらい、基地部隊との協力で再戦を挑む。そうする以外に希望はないのだ。

冷静に考えれば、「穂先」が阿古屋湾内に辿り着こうが、戦局がさほど好転しないのは、誰の

目にも明らかだ。戦艦とは外洋を自由に行動してこそ価値がある。軍港内に根を下ろしてしまえば、成程沈没は免れようが、敵からは脅威ではなくなる。攻め込む方は、別の場所から上陸すれば済む話だからだ。

そんな理屈も判らない程、皇国聯合艦隊司令部要員らの頭は混乱している。度重なる損害と敗北に伴う衝撃が彼らの頭脳を鈍らせているのだ。

まあ、理屈を理解できていれば、災厄が避けてくる訳でもないのだが。

戦場での願いは、いつとても虚しい。損害により動きを鈍らせていた「穂先」は、結局のところ被弾した。場所は第一主砲塔天蓋。そこが貫通力に優れる徹甲爆弾に刺し貫かれ、砲塔内爆発を起こした。強い衝撃と共に主砲塔が弾き飛ばされ、波間へと消えた。

しかし砲塔員の懸命な努力――死に際の抵抗――により注水が間に合い、誘爆は防がれた。瞬時の轟沈は免れた。艦橋に詰めていた者らも、壁などに額を打ち付けた不幸な者を除き、皆が健在だ。窮地（きゅうち）を辛うじて脱したかと思われた。

なれども、「穂先」の命運は尽き果てた。至近弾による衝撃が艦底部のそこかしこを歪めて浸水を発生させ、先の被弾力所の付近――艦首部分から大規模な海水の流入が確認されたためだ。最大二六航里を誇った速力は目に見えて低下し、今にも行き足が止まりそうだ。あと僅かで阿古屋湾に辿り着けるというのに。

「司令部、退去してください！」

このままでは、艦隊司令部を消滅させる事になりかねない――そう判断した田畑大佐が、堪りかねて進言した。敵機の更なる攻撃が予想される以上、停止横転しかねない艦に重要人物を乗せてなどいられない。

「承知した」猪松は促されるままに頷いた。座乗艦を捨てて逃げ出す事に対する抵抗感は、既に失せている。その艦の乗組員の士気がどん底にまで低下するという危惧すらそこにはない。ただ沈没する艦と運命を共にするのは避けたい、との観念のみがある。

一日のうちに旗艦を二度にわたり捨てるという恥知らずな経歴を、意識せぬうちに刻んだ猪松一同は、とにかく味方が確保している領域を目指し、退避を開始する。

情けない有様を敵味方に見せる一同が無事に逃げ延びた頃、完全に行き足を止めた「穂先」は、目的地を目前に力尽きようとしていた。浸水は止まらず、右舷側への傾きはいよいよ激しさを増し、もはや直立すら難しい。

応急修理班班長からは、左舷側への注水はもう限界で、隔壁閉鎖も各所から発生している浸水の前にはもはや無意味になりつつあり、「穂先」を救う術はなさそうです、との報告が寄越された。

艦内電話でその報せを受けた田畑は、「了解した」と言う受話器を戻した。天を仰ぎ呟いた。

「万事休すか……！」

自身が預かる艦の生涯に悲壮かつ悲痛なものを感じた。建艦以来二〇余年――矢隠級巡洋戦艦の一隻として、世界――大戦艦（ビッグ・イレヴン）の一角として、世界最強の戦艦になるべく生を受けたのに、遂に一隻の敵戦艦を撃沈する事も叶わず命運が尽きるのかと思うと、哀れだ

った。

瑞穂海軍の艦長には、沈没艦と運命を共にするべし、という不文律がある。それを無視して生還した艦長は、殆どが予備役に編入されるか、閑職に回されている。そのため、自らが預かる艦と共に沈む艦長は後を絶たない。

その事もあるし、戦果を挙げられないまま「穂先」を沈める事になったのも俺の責任だと感じる田畑は、自らの身を自らの判断で処する事に決めた。だが他の乗組員を巻き添えにするつもりは毛頭なかった。部下に無理心中を強要した愚か者として後世に名を残すのは御免だった。彼は艦長として最後の命令を下した。

「総員に告ぐ。残念ながら本艦は間もなく沈没する。総員最上甲板！」

状況からその命令は充分にあると踏んでいた「穂先」乗組員たちだが、いざそれが伝えられると、咄嗟(とっさ)に動けない。皆が惚(ほう)けたような、何処か遠い世界の出来事を聴くような顔つきで、それを耳にする。

「総員退艦せよ。繰り返す。退艦せよ。諸君らは無事に生き残り、明日の皇国海軍を再建してくれ給え。大皇陛下万歳！」

田畑が退艦を促す命令を都合三度発すると、流石に乗組員たちは動き出した。陸地に近いから、最上甲板にまで行ければ、救命艇(ライフボート)に乗れなくてもどうにか助かる確率が高い。事態は一刻を争う――と踏んだ彼らは、脱兎の如く持ち場から離れていく。

「これで良い。これで……」

乗組員らが「穂先」から脱出する様子を傾きが増した艦橋内で眺めながら、田畑は呟く。その彼の手には護身用の拳銃がある。愛艦と運命を共にするのが流儀と言えども、溺死は趣味ではなかった。彼は我が身を計器類に縛り付けた。「穂先」と二度と離れずに済むように。そこで側頭部に銃口を当て、そっと引き金を引いた――

阿古屋湾とそれに隣接する軍港に詰めている陸海軍の将兵や軍属らは、見慣れた艦影が親夫島を目前にして横転沈没する様を見て仰天した。出撃時に八隻を数えた戦艦群の勇ましい姿も脳裏から消えていないのに、一体何が起きたのだと皆が疑問を感じた。質の悪い夢でも見ているのではないかと考え、頬を何度もつねる者の姿も珍しくない。

しかし現実を否定したところで眼前の光景は消滅せぬ。何十人も乗せた救命艇が重さに負けて転覆し、海に放り出された者が陸地を目指して必死に泳ぐ図や、海面を漂う戦死体が波に揺られて浮き沈みする地獄絵図は、確かに存在するのだ。

「皇国聯合艦隊が負けたのか……？」

作業員らが呆然として呟いた。戦艦が、瑞穂海軍最強の軍艦である矢隠級戦艦の一隻が、軍港を目前にして沈没する程の被害を受けたとなれば、答えは一つしかない。戦闘に勝利したのであれば、海軍はどれだけの手間暇がかかろうとも、大破した彼女を見捨てず、内地に連れ帰り修理を施したであろうから。

「莫迦な」と否定する面々の声もか弱い。そもそも海戦に勝利したのであれば、その報せは早々に届いて然るべきで、海軍が黙(だんま)りを決め込んでいるという事は、紛う事なき大敗を喫

したのではないか――との疑念が、彼らの心を蝕（むしば）んでいたからだ。

そしてその疑念が正しかった事は、皇国聯合艦隊司令部要員が飛行艇で軽空母「海鷲」に移動し、そこに将旗を掲げた、という事実からも窺える。

皇国聯合艦隊は、伝統的に戦艦に司令部を置く。それは最前線で敵艦隊と砲火を交える時も、本国で全般作戦指導を行う時も変わらない。それが理屈に沿うかはさておき、彼らがその行いを誇りにしていたのは確かだ。

その誇りを自ら捨て去るような状況が、最前線で起きたという事は、無事な戦艦がもはや近場に存在しない事を、何より雄弁に物語る。

事実、皇国聯合艦隊はこの海戦で四隻の戦艦を喪失、残る四隻も大中破し、その他に重巡二隻・軽巡二隻・駆逐艦一二隻を撃沈され、作戦能力を既になくしていた。残存艦による反撃はもはや不可能。それは緊急通信を受けた海軍総司令部も認めた。

かくなる上は残存部隊を纏めて撤退し、捲土重来（けんどちょうらい）を期すよりない。海軍は陸軍と共同で設置した戦時最高戦争指導部――総本営でそれを主張し、爬間諸島防衛の要であった海軍主力艦隊が敗れた以上、もはや防衛戦に精算なしと踏んだ陸軍も同調し、彼の地の放棄が決定した。

とは言え、島を捨ててもそこにいる同胞の全てを見捨てる訳にはゆかない。陸軍一個師団及び海軍陸戦隊一個旅団――三万人。その他に瑞穂人入植者三〇万。合計で三三万人の瑞穂人を助け出さねばならない。そうせねば、軍に要求される必要最低限の矜持すら守れぬ。

彼らを脱出させるのに必要な船舶はある。瑞穂皇国は島国であり、海洋貿易国家であるから。だが、最低でも半数が健在な敵艦隊主力の眼を如何にかいくぐるか、となると、また別の問題が浮上するのだ。莫迦正直に行動理由を彼らに説明したところで、素直に通してくれるはずがない。何しろ陸海軍爬間諸島守備隊は彼らの敵だ。多数の民間人は人質として交渉材料になる。

詰まるところ、瑞穂海軍に残された道は、更なる悪戦苦闘でしかない。彼らは既に喪われたもののために戦闘を継続せねばならず、血を流さねばならないのだった。

大自然の猛威の前では、人間の小賢しい知恵などさほどの意味を持たない。黒雲から降り注ぐ豪雨、全てを薙ぎ払うかの如く吹き付ける暴風、何もかも洗い流そうとする荒波、時折姿を覗かせる雷(いかずち)——それらの前では満載排水量が二万石(トン)を超える軍艦でも無力な存在に過ぎない。簡単に沈没したりはしないが、縦傾斜(トリム)を維持するだけで一苦勞となる。とても戦闘行動など取れない。

鳥瞰(ちょうかん)すればカマボコ板のように見える艦——瑞穂海軍・第二航空戦隊を形成する二隻の航空母艦——正規空母「翔龍(しょうりゅう)」「碧龍(へきりゅう)」もまたその例外に漏れず、彼女らの乗組員たちは自らの艦の均衡を保つのと僚艦の位置を意識を集中している。自然現象を理由に衝突事故を起こし、沈没に追い込まれた戦闘艦艇は以前より数多い。これより最前線に赴く艦がその手前で本来の味方と激突して沈没乃至(ないし)大破となれば阿呆の極みだ。見張員や操舵担当者が必要以上に緊張するのも無理なかった。

嵐はそんな彼らの努力を嘲笑うかのよう吹き荒び、戦隊司令部要員が詰めている島型装甲艦橋にも風雨を投げかけ、そこから映じる視界を酷く狭めている。メインマストに掲げられている、瑞穂皇国籍にある事を示す天昇旗——青地の旗の中央に、天道が昇る様を記した瑞穂国旗と、白地の旗に金糸で錨を記した旗——瑞穂海軍旗をばたばたとはためかせ、彼らの不安を煽る材料、その一つに成り果てている。

「天候は明日にならないと回復しないそうです」第二航空戦隊参謀長——楠裕(くすのきゆたか)大佐が、戦隊司令官に天象士官の見立てを報告した。「それまでは動けそうにありません」

付け加えられた台詞は、彼の判断である。戦艦でさえ難儀しそうな大時化の時に、空母に何が出来ようか。尤も、空母とは晴天時での運用を前提に造られている艦なので、彼の考えに間違いはないが。

「仕方があるまい。まさか空母と防空重巡だけで動く訳にもいかんだろう」

第二航空戦隊司令官は答えた。声には張りがある。眼前に広がる光景に絶望感など微塵も感じていない風に。船酔いしやすい者ならば、たちまち昏倒しそうな揺れに艦橋内は満ちているのに。

その時、ひときわ大きな雷が、「翔龍」の近くに落ちた。薄暗い艦橋内に雷光が飛び込む。そこを明るく照らした。二航戦司令官の姿が、その拍子に闇の中に浮かび上がる。

二航戦司令官は、美しい少女であった。腰にまで届く長い黒髪を団子状に纏め、制帽の中に押し込んでいた。端正な容貌は黒曜石と呼ぶべき輝きを有する双眸によりその印象を眼にする者に強烈に焼き付ける。軍服の上からでも明らかな、形良い胸にくびれのある腰——そして透けるように白い肌が、彼女を人間ではない何か、名のある人形師が丹精込めて造り上げた最高傑作なのではないか、と思わせる。

しかし白磁の人形にしては、その表情は覇気がありすぎた。彼女は外見に相応しい年齢の持主



であり、つい半年前に一七歳を迎えたばかりである。にもかかわらず少将——一個航空戦隊を預かる立場にあるのは、海軍元帥の父親——皇族の長老格である戦船宮英治（いくさぶねのみやひではる）の後押しもあるが、一二歳の時に少尉任官して以来、常に最前線と言うべき場所に身を置き、野戦昇進を重ねてきた——それが正式昇進として認められてきた——賜物であるのは、部隊の内外に広く知られている。

その御仁——戦船英（いくさぶねはなぶさ）少将の優美な肢体を包むのは、白い上着と緋色の軍袴（ズボン）により構成される、讃州（さんしゅう）県海軍国民防衛隊（ネイビー・シビリアン・ガーズ）の大佐服であった。海軍が軍部内に於ける主導権を握っている瑞穂では、海軍が地方民兵まで統括しており、二航戦は讃州県の行政都市——美呉（みくれ）市に設置されている美呉鎮守府所属の艦だから、彼の部隊から参加している者は数多い。ゆえに見慣れた格好、その一つではある。

惑星地球の軍隊では、軍服の着用を義務づけているところが、この段階では多い。一昔前まではかなりいい加減で、シルクハットにモーニング姿で指揮を執る将軍などが各地の戦場で散見され、従軍記者からすれば有り難い存在だった。瑞穂皇国海軍でも、制服規定の厳格な適用で、そうした類の人種は一般に姿を消したのであるが、皇族や名門貴族出身の高級将校の中には、自主発注した特別仕様の軍服を着て戦場に赴く者がまだ残されているので、絶滅した訳ではなかった。

讃州出身の将兵からすれば、地元で馴染みのある姿をしている英のそれは、宮様提督らしい稚気の現れ——言い方を変えれば、「姫様の他愛のない我儘」に映るらしく、その辺に関する苦情は、ついぞ聴かれた事はない。

まあ、讃州県に於いて絶対的な権威である、戦船宮家の人間のする事に、正面から批判の言葉を浴びせる讃州人などいるはずもないが。他県出身者が大半を占める将校たちにしても、英治が持つ海軍部内での影響力を知り抜いているから、何も言わない。

「その空母ですが」報告書の束を捲りながら、楠は伝えた。「第七航空戦隊の露天繫留している分の艦載機が駄目になりそうだとこの報せが」

「七航戦に積んでいるのは、確か『清風』に『烈山（れつざん）』だったな」

七航戦は軽空母二隻により構成されている。どちらも平時には客船として使用されていた艦だ。これは建造費用の半分を海軍が負担し、戦時には徴用船舶として使用すると契約を結んだ艦である。聯合帝国との関係がいよいよよきな臭くなり、開戦は必至だと判断された結果、その目的に沿うべく改造されたのだ。

その空母——「飛燕（ひえん）」「隼燕（じゅんえん）」に搭載されているのは、九六式艦上戦闘機「清風」と九五式艦上攻撃機「烈山」の二機種だ。彼女らは分類上は改造軽空母に属するが、搭載機数はそれぞれ四八機。予備機が五機。露天繫留分を含めれば七〇機以上を運用できるため、単純な攻撃力は正規空母とさほど変わらない優秀艦である。

だが、航空機を飛行甲板上に露天繫留すると、楠が指摘したように、自然現象でそれが使用不能になる事がある。打ち寄せる波に突発性の台風——空母乗組員の懸命な努力を、一瞬にしてふいにする事柄は多い。

「露天繫留分は全て基地航空隊の補充用です」

楠が触れた部分には、飛行甲板上に並べている機体の全てを海上投棄する破目になろうとも、彼女らの空母としての攻撃力は殆ど変わらない、との真実が潜んでいる。

通常の輸送船に艦載機や重爆撃機などを分解した状態で運ぶよりも、空母のように高速を出せて、しかも完成品状態の航空機を搭載できる艦を輸送用に使おう——との発想は何処の国にもある。前線に赴く空母なら、本来の限界以上に艦載機を積み込み、搭乗員の数も増やし、その消耗に備えても良いのだが、どんな国にも国力に限界がある。

瑞穂皇国海軍は、予備役に編入されていた者たちを慌てて呼び戻し、航空機搭乗員の確保に躍起になったが、精鋭中の精鋭と目されている艦載機搭乗員を短時間のうちに多数揃える事は出来ず、開戦の時を迎えた。

そこで艦載機搭乗員の代わりを、基地航空隊に求める事になり、今回前線配備される事になった「飛燕」「隼燕」に旧式化したとは言え、まだ十分に使用できる「清風」「烈山」を可能な限り積み込む旨が決められ、瑞穂本国から遙々と此処（ここ）まで——爬間諸島から北西に二二〇〇里の位置にある御道栄(みどうえい)諸島近海にまで進出してきたのだ。

だが、重ねられてきた努力も、大自然の気まぐれの前に立ち崩れそうで、七航戦関係者の苦難と苦渋が容易に想像できた。三〇機以上の艦載機を、海に投擲するのは、確かに惜しい。

しかし——

「艦の保全に極力務めよと伝えてくれ」

英は基地航空隊の補充機よりも、母艦の安全を確保する方を選んだ。軽空母とは言え、一隻につき一二〇〇名の乗組員により運営されている艦である。艦載機が御釈迦になろうとも工場生産すれば済むが、経験を積んだ艦載機乗りや航空機整備員、そして艦の骨格にして血管でもある乗組員を喪う訳にはゆかなかった。

「そう伝えます」楠は頷いた。爬間諸島には既に三〇〇機からの各種航空機が配備されている。猪松大將が直率する第一艦隊には、直掩用の軽空母「海鷲」「青鷲」もある。それらを合わせれば四〇〇機。玉石混淆の趣があるが、航空機とは固体性能よりも数が求められる分野でもあるので、それだけいけば敵に引けを取る事もないだろうと彼は考えている。

楠が踵を返して通信室へと向かおうとしたその時である。英の副官を務める五十旗紅葉(いそはたもみじ)少佐が、女性歌劇団員——その男役を思わせる凜々しい顔を顰めながら、艦橋内に駆け込んできたのは。

「提督、前線で問題が起きました。直ぐに作戦室においで願います」

「問題？」英は副官の顔を視る。背丈があちらの方が二〇センチ近く高いため、見上げる形になる。瑞穂女性の平均身長——一間五尺程しか身長がない英に対し、紅葉はそこいらの男性より背が大きいのだ。

「詳しい事については、司令部要員の間でだけ話す必要があると美星(みほし)少佐が」

美星少佐とはこの艦隊——第一東遣艦隊の通信参謀を務める人物だ。味方部隊の通信や敵信傍受を統括しており、彼女の許に大抵の情報は集まる。その御仁が機密性の高い事象だと判断した事柄が舞い込んできたのだ。

「承知した」英は頷いた。予想よりも早く決戦が生起したのかも知れない。「直ぐに行く。皆を集めてくれ」

## 2

敗北の予見者はいつの時代、何処の国の組織に於いても異端児扱いされるのが常だ。不吉な事柄を口にしてからばかりが理由ではない。組織全体が熱に突き動かされ、一定の方角に向かい構成員全員が突撃しようとしている時に「待った」をかける人間は大抵白眼視される。

瑞加開戦がもはや避けようがない――と判断された時に行われた凶上演習での出来事である。英はその他者からはあまり好まれない行いに手を染めた。演習時の敵軍――赤軍の指揮官役を務めた英は、戦いの主導権を握るのは防御側だとどうしても敵軍になると看過し、爬間諸島沖での防衛戦闘は敗北必至だと主張した。

「第一東遣艦隊司令官は、政府の決定事項に異を唱えるつもりかね？」

皇国聯合艦隊司令長官――猪松敏平大將は、苛立ちを込めた眼差しを、場に居合わせている者の中で、最も若い人物に対し注いだ。盤上で行われる模擬戦闘（シミュレーション）とは言え、実戦に近い結果が出るため、その途中経過や正否は軍機に属するとされ、各艦隊司令官の他は、秘書役を務める副官ぐらいしかいないのだが、流石に一七歳以下の者は他にいない。

「開戦そのものについては反対しません」英は眼光鋭い猪松に負けない、意思の強さを宿した眼で答えた。「今更回避のしようがありませんから。血を見ない事には、収まりがつかずまい」

「では何かね？ 貴官は爬間諸島の防衛について反対なのかね？」猪松は相手が皇族と言えども遠慮がない。所詮は元帥宮（げんすいのみや）――海軍に強い影響力を持つ、戦船宮英治の娘である事を笠に着る小娘だと考えているためだ。

いやもしかしたら、そう考える事により彼女に対する優位性を自身の精神世界で良いから保とうとしているのかも知れない。有力貴族出身の猪松には、人に誇れるような実戦経験など皆無だからだ。戦死されたり捕虜になられたら困るとの理由で、若い頃は現場から遠ざけられた。

それに対し英の方は、少尉任官以来、最前線勤務が多い。まるで父親から「海賊相手の小競り合いも出来ない奴は必要ない」と突き放されているかのように、戦闘機搭乗員として、あるいは陸戦隊指揮官として海賊討伐に従事し、多数の敵機を我が手で叩き落とし、海賊の襲撃に悩まされてきた民間人を護ってきた。

軍隊で幅を利かすのは、時に階級ではなく経験である。特に最前線勤務を精力的にこなしてきた人間には、一種独特の雰囲気があり、単に階級が高いだけの者だと、その迫力に根負けし、言い負かされる事が屢々（しばしば）ある。

そうした事象に従えば、猪松からすれば英は「扱いづらい奴」になる。彼女は広告風船（アドバルーン）代わりに使われがちな他の皇族将官とは異なり、苛烈な戦闘経験がある。実際に玉砕寸前にまで追い詰められた部隊を率い、国民的英雄にまで上り詰めた事がある。

とりわけ名高いのは催飯（さいはん）防衛戦で、英は二万の民間人を、海賊の蓑を着た反政府軍から見事に守り抜いた。その際に率いた戦力は、敵軍数万に対し雑軍三〇〇〇――陸海軍の正規部隊の他に、現地で編成された民兵部隊も含まれていた――程度と少なく、彼女が戦闘部隊を率いる人間としての適性がある事を事実が物語る。

少なくとも他人を従わせるだけの能力や雰囲気を身につけているのは間違いなく、英はその功績から三階級特進を成し遂げ、少佐から少将に一気に上り詰めた。もっとも、海軍のこの持ち上げぶりは、敵の数の多さに肝を潰した正規任命の指揮官が、持病を理由に敵前逃亡を企てた挙げ句に捕虜となり、あまつさえ守備隊や民間人に投降を呼びかけたという前代未聞の珍事——軍に対する国民の信頼を根本から揺るがしかねない醜聞（スキャンダル）があったからで、英雄をでっち上げてその場を取り繕った、との観点を否定できない部分もあるが。

「我が海軍は、対聯合帝国戦を、橋道洋を西進する彼らを中部橋道洋で迎え撃ち、撃滅するとの骨子を組んで望んでいると私は考えております」

これは海軍兵学寮の幼年科生徒ですら知っている話である。北加大陸そのものを国土とする聯合帝国、その本土に攻め込んで城下の誓いを結ばせるのは不可能との結論から導き出された戦争計画だ。

海軍を重視し、予算配分や人員に関する割り当てもそちらを優先した結果、陸軍はあまり強力ではない瑞穂皇国の事情を鑑みれば、妥当な結論だと言える。縦しんば艦隊決戦勝利後にその余勢を駆り敵国本土に侵攻作戦を企てたところで、五〇〇万を超える陸軍を持つ聯合帝国軍をどうやって撃破するのか？ 誰もその方法を思いつかない。

「貴官に言われるまでもない」猪松は憮然として言い返した。「我が海軍は堂々たる艦隊決戦で敵艦隊を撃滅し、敵国を屈服させるか和議を結ぶために存在している。それは聯合帝国軍が相手でも変わらぬ」

「ならば、何故今になり迎撃計画を根本から練り直さなければいけないのですか？」

そこは純軍事的に見ると、かなりの問題点である。猪松は返答に窮し沈黙した。まさか爬間諸島に於ける利権や対聯合帝国との貿易で多大な利益を得てきた内閣閣僚や議員筋からの圧力で作戦変更を余儀なくされたとは言いづらい。

黙り込んだ猪松に構わず、英は続けた。「爬間諸島は確かに東橋道洋の要衝です。珊瑚岩礁帯に次ぐ外地の拠点にするために、港湾施設や飛行場の拡張などを続けてきました。ですが、要塞築城は全体の六割程度しか済んでおらず、危機的状況に際し、鞆縄諸島のように瑞穂本国から即座に援軍を送るという行為も不可能です。一番近い別の海軍基地が御道栄諸島と来ては、急場に同基地から航空支援を行うのも困難かと思われます」

正論である。耳にする者を黙らせる類の話だ。

場に居合わせている他の戦隊司令官たちも、言われてみればその通りなので、反論しなかった。いや下手にどちらかに与して後々面倒になるのを恐れているのが正解か。公爵家出身の門閥貴族に海軍元帥の皇族を背後に有する姫提督。どちらを敵に回しても面倒臭い事になるだろうから。

ざわめきが周囲を満たしつつある時——

「我が海軍の漸減邀撃（ぜんげんようげき）計画は年を経るごとに本国から離れた海域を決戦場にする傾向にあります」

そう皇国聯合艦隊参謀長——天雲勇也少将が口を挟んだ。彼は口が達者な部分があり、そこを他人から嫌われる事が少なくない人物だが、司令長官に代わり何かを説明する事が多い。

「と言いますと？」

相手が前任なので、英は幾らか声音を和らげた。

「対聯合帝国戦が現実味を帯びた時、決戦海域は本土近海——花崗島（かこうじま）沖でした。それが一〇年後には鞆縄諸島に、その数年後には珊瑚岩礁帯になりました。いずれも本国に戦火を及ぼさないための措置です。その傾向に照らし合わせれば、各艦や航空機の性能向上が著しい現在、決戦海域が爬間諸島沖に変更されたところでおかしくはありませんまい」

これは事実である。皇国聯合艦隊は戦争計画を変更する度に、決戦場を本国から遠い場所に定めてきた。本土近海で決戦に敗れば、いきなり瑞穂本国が艦砲射撃の脅威にさらされる危険があるからだ。

「しかしそれは準備期間が数年にわたりあったはずです。明日に開戦してもおかしくない状況下で、突然作戦変更を伝えられては、現場は混乱します。現に航空戦力の集結ですら遅れているではありませんか」

瑞穂海軍は空母を戦艦の補助兵器と位置づけ、その役割を、「制空権の確保及び砲雷撃戦前に敵戦艦を漸減する事」に定めた。ただ空母を大量配備するのも難しいので、決戦海域の近くに基地航空隊を展開させ、その補助をさせるようにしていた。

「政府は交渉を続けています。その見積もりによれば、開戦は早くても一二月中頃になるのだとか。それまでには爬間諸島に各種航空機が五〇〇機は揃う予定です。空母も数隻派遣する事が決定しておりますし、現状の混乱が決定的な不利になるとは思われません」

「何を呑気な！」英は机を強く叩いた。盤上に並べられている赤と青の駒が、その無体さを責めるようにゴロリと床に転げ落ちた。彼女はそれに構わず続けた。

「こちらの戦力集中は敵も承知しています。我々が準備を整える前に敵が仕掛けてくる公算は極めて高いと言わざるを得ません。外交交渉など、もはや形式を整えるためにのに継続されているのが判りませんか!？」

「まさか」天雲は冷笑した。「外交団の団長は現役時代には海軍法務官長を務めていた来栖直邦（くるすなおくに）予備役中将ですぞ。来栖提督なら海軍の事情にも精通しておりますし、我々が必要とする時間を稼ぐ事ぐらひは難しくないはずだと思いますが」

「駐在武官の水島重之（みずしましげゆき）中佐からは、聯合帝国軍は既に開戦準備を整え、西部帝家艦隊が新鋭戦艦や複数の正規空母を中心とする部隊を西海岸に集結させているとの情報が来ております」

「海軍情報部からは、西部帝家艦隊の少なからぬ艦は西平洋や南加大陸沖にいると聞いたが」猪松が首を傾げた。敵信傍受班に言わせれば、電鍵にも打ち手の癖があるそうで、そこから発信源の居場所を特定できるらしい。彼はそれを信じていた。

「開戦ともなれば、敵は西海岸から各戦闘艦艇や陸兵を送り込むのは必定！ そんなはずがありません！」

英は強い口調で言い切る。頭から否定された猪松は面白くなく、不快感を表情に表す。

場の雰囲気、険悪を通り越して剣呑になりかけた頃——

「話は平行線ですな。しかし皇国聯合艦隊司令部としては、爬間諸島沖での敵艦隊迎撃を決めま

した。海軍総司令部も既にその計画を承認しており、それにあくまで反対されると仰るのであれば、第一東遣艦隊司令官は軍命令に対し抗命する事になりますが」

天雲が冷めた口調で告げた。その声音は明らかな嘲りの色がある。彼は臆病者は前線に行く必要がない。戦争は我々だけで行う――と言葉の裏に潜ませていた。

英の怒りが瞬時に爆発する。彼女は「怒鳴り魔」との異名がある瞬間湯沸かし器でもある。端正な外見とは違い、口が悪く短気な部分があるので、直属上官ですら持て余した、との逸話が多い。

「抗命ですと!？」

「軍司令部や政府の決定に従えないとあらば、そうですね。立派な利敵行為とも言えますな」

「貴公は――」

腰に提げている軍刀、その鯉口を切りかねない調子の英を視て、顔色を変える提督連。誰か止めると囁き交わされるが、問題事の渦中の人になるのを嫌う役人体質が行動を阻害する者が過半を占めた。

だが、落雷を思わせる怒鳴り声が、凍り付きつつある場の空気を一変させた。

「やめんか！　ここは軍議の場だぞ!!」

発言の主は、第二艦隊司令長官である真田信繁（さなだのぶしげ）中将である。年齢は英より丁度四〇歳上。この時代には老人と言える五七歳。頭髪や眉毛には白い部分が目立つ、古武士を思わせる人物だ。厳(いか)めしい外見に相応しい軍歴を持ち、縁故ではなく実力で昇進を重ねてきた。

彼は英との縁も多分にある。英が海軍兵学寮の幼年科生徒だった頃、そこの学長を務めていたのだ。その性格から他人と衝突しがちで、喧嘩ばかりしていた英は、素行を問題にされて何度も放校処分になされたが、その度に英治から「どうか娘のやる事については大目に見て欲しい」との嘆願が届き、やむなく彼が私闘騒ぎを事故かつ不問扱いにし、誤魔化してきた――との経緯がある。

つまり、英からすれば真田は大恩ある恩師になる。彼がある種の柔軟性のある人物でなければ、流石に卒業できなかったであろうから（真田はこの揉み消し措置で何らかの利益を得た訳ではない）。

英と天雲はバツの悪そうな顔をして沈黙した。憑き物が落ちたと言うべきか、互いに顔を逸らす。

ため息をついた真田は、改めて口を開いた。

「我々は御国に忠誠と生命を捧げた軍人だ。御上が戦えと仰るのであれば、如何なる場所にも赴くし、死を恐れるものでもない。作戦計画の是非について、今更何をか況（いわ）んやだ」

その言葉には、大義名分の他に何処か投げやりな部分が潜んでいた。真田は軍人が政治に関与すべきではないと考える点に関して、理想的な人物だが、政治が軍事に与える影響について、下級士族出身者らしく知り抜いていた。無茶苦茶だと思われる決定の裏側に潜むものは、いつとても莫迦莫迦しい政治的理由が潜むのだ。

「……………」

沈黙を続ける天雲にぎらつく眼光を向けた後、真田は猪松に視線を転じた。彼に訊ねる。

「それで、開戦となれば儂の艦隊にも出番はあるのですかな？」

「それは……」

猪松は返答に窮した。第二艦隊は旧式化した巡洋戦艦群——岩城（いわしろ）級巡洋戦艦六隻を中心とした部隊だ。

岩城級巡洋戦艦は三〇年以上前に西洲列強の一角であるブリタニヤ帝国と技術交換の名目で購入し、その性能の良さから残りの五隻は一番艦（ネームシップ）である「岩城」を参考に瑞穂で建造された。

三六センチ砲を世界で最初に搭載した古参の艦であるために、何度も近代化改装を重ねてきた老嬢であるが、それゆえに信頼性は高く、主戦力の一つに数えられている。

「第二艦隊は万が一に備え、本国待機となります」

天雲が答えた。真田が眼を大きく開く。皇国聯合艦隊参謀長は、その迫力に気圧されながら続けた。

「まさか本国をもぬけのカラにする訳にはいきません。聯合帝国は他にも戦線を抱えておりますし、我々に対し投入できる戦艦の数は、一〇隻を超える事はありません。その程度であれば、第一艦隊だけで充分撃滅可能ですので——」

「戦力の半分近くを温存、何を莫迦な！」と言い切れない事情が、そこにはある。敵が本土近海に突如出現する危険性については、以前から指摘されていたし、燃料問題もある。保有戦艦一六隻全てを外地に派遣したら、凄まじい量の重油が必要になり、油槽船（タンカー）の数が足りなくなる。

艦隊に随伴可能な高速油槽船の数には限りがあるし、低速油槽船を先行させるにしても、潜水艦の脅威から身を守るための護衛艦艇が別途必要になり、それを何処から工面するのだ——との話にもなるのだ。

「つまり戦争は第一艦隊だけで行われるのか？」

「真田提督のように老練な宿将が本土に控えているだけで、国民も安心感を抱くだろうからな」

苦しい言い訳である。燃料問題もさることながら、猪松は戦功を独占したいのだ。勝利の際に得られる栄光を独り占めしたいのだ。それは子供じみた莫迦げた妄想なのだが。

「それが決定であるのならば、従いましょう」

真田は握り拳を震わせながら答えた。彼がもう勝手にしろとの居直りの心境にあるのが、英には語られずとも理解できた。彼女も同じ気分だからだ。

結局、真田のこの言葉が決定打となった。作戦計画は爬間諸島沖での迎撃と決められ、一二月中旬までに第一艦隊とそれを支援する各種部隊は現地に展開できれば良いとされた。その中には英が率いる第一東遣艦隊も含まれ、彼女は不本意な気分のまま、望まぬ決戦の一翼を担う役割が割り振られたのだ。

### 3

事態の急変はいつとても人間に衝撃を与える。大地震が予告なく起きるように、戦争という人間が幾度となく繰り返してきた破壊行動も「さあやるぞ」との通達がなく始まる事が多い。

歴史好きな面を持つ英は、その事を書物から学んでいた。しかし実際に自分が当事者になると、混乱する人間を笑う事など出来ない。「翔龍」作戦室に詰めている参謀連の顔を、彼女は不機嫌そうな顔で、頬杖を突きながら眺めている。

「……それで第一艦隊が壊滅したのは間違いないと？」

沈黙を続ける英に代わり、楠が美星明乃（あけの）少佐——第一東遣艦隊の通信参謀に質問を発した。

「はい。味方からの通信に敵信傍受、その双方からそう結論せざるを得ません」

美星が書類挟み（クリップボード）を手にしたまま答えた。学生時代から通信を専門的に勉強してきた人間らしく、線の細いところのある人物だ。職務に関する能力には信頼があり、英もそちらの方は彼女に任せている。

「概算で良い。損害を報せてくれ」

「はい」と頷いた美星は、書類挟みを捲った。

沈没は戦艦が「龍隠」「穂先」「敷島」「皇京」の四隻。重巡が「名高」「胸柄」の二隻。軽巡が「名内」「神代」の二隻。駆逐艦が一二隻。

大破乃至中破したのが、戦艦「矢隠」「時和」「神勢」「初宮」の四隻。重巡「妙義」「白羽」の二隻。駆逐艦が四隻。

無傷なのが軽空母「海鷲」「青鷲」とその護衛に就いていた軽巡「川那（かわな）」と駆逐艦四隻——無傷で戦場離脱に成功した駆逐艦四隻がこれまた別にいるが、乗組員が等しく戦意喪失状態なので、これを含めない方が良い——だけと来ては、惨敗を喫したと評すよりない。

「敵に与えた損害は？」

「詳細は不明ですが、戦艦三隻を撃破したそうです。その他に重軽巡を各一隻ずつは撃沈し、駆逐艦数隻を撃沈破したとの事です」美星は顔を歪めている。

誰かが「うーん」と唸った。一步どころか百歩譲って敵戦艦部隊を当面は再起不能状態に追い込んだと判定しても、敵には無傷の機動部隊がある。彼らの目的が爬間諸島の攻略にあるとすれば、それを防ぐ手立てはないと言わざるを得ない。

「それで残った艦はどうした？」

「撤退中です」美星は渋面のままだ。「主力艦の半数をいちどきに喪失した敗残部隊ですから」

「戦力も戦意も皆無——か」

きつい言葉を、英は味方に対しぶつける。彼女の中では敗北は事前に予想できていた事態であり、別段驚くには値しない。参謀連も彼女が敗北主義に毒された結果そんな事を言い出したのではないのを知っているから、本来なら当然の話だと思ふべきなのだが、流石に開戦劈頭に主力戦艦の半数が撃沈破されたとの事態は、思考を硬直化させる威力がある。

「爬間諸島の防衛はどうなる？」楠が肝心な部分について触れた。海軍が東端の領土に戦力を集中したのは、そのためなのだ。三万の守備隊に基地航空隊三〇〇機。彼らはどうなるのか？

「艦隊決戦時に基地航空隊は多数の戦闘機を撃墜されました。敵が4号艦上戦闘機『火龍』を多数投入してきた結果、性能面で劣る『清風』では抗しきれず——」

そこまで言うと、美星は押し黙る。制海空権が喪われた島の守備隊、その運命など、改めて語



るまでもない。「難攻不落」を謳われた要塞の殆どが、大規模な敵軍の攻撃、その前に膝を屈した事を思えば、尚更に。

「陸軍の基地航空隊もいるはずだが」英が戦闘加入したとの報せがない陸軍所属機について触れた。

「それが……」美星は口ごもる。

「何が起きたのか正確に言い給え。現場での不都合は君の責任ではない」英は先を促した。

「猪松提督が戦闘海域上空に陸軍機に出張されると混乱の原因になるからと、出撃させなかったそうで」

「海軍機だけで」英は訝しむ。「勝つ気でいたのか？」

「そうとしか思えません」美星は呆れたような感じで言う。「他国ならともかく、我が国の航空機搭乗員は全員が洋上航法を習得しますから……」

瑞穂は島国である。ゆえに航空隊が瑞穂本国から外地——海外領土に移動する際は、空母に頼らず島伝いに進む事が多々ある。特に船舶部隊がいても純粋な航空母艦を保有しない陸軍だとその傾向は顕著で、彼らは島から島へ星を頼りに進む。

それに対し他国の陸軍は、海上防衛は海軍の仕事だとばかりに地紋——陸上の目標物を頼りに進む飛行法——しか覚えず、洋上で航空戦を行うなど不可能、との搭乗員ばかりだ。

「陸軍は最新鋭戦闘機である一式戦——『燕（つばくろ）』を五〇機程度持ち込んでいたはずだ。彼らなら有力な戦力として機能し、制空権確保に大いに役立ったろうに……」英は舌打ちして独りごちる。

作戦会議の情景からして、猪松大将が戦功を独占したがつているのは明らかだった。同業者である真田中将の参戦すら拒んだ部分を見れば、余計にそうだ。「格下」に見ている陸軍の支援など、初めから考慮すらしていなかったのではないかとさえ思える。

「あの人は」英は上官批判とも受け取れる発言をする。「この戦に敗れる事すなわち亡国だとの認識が果たしてあったのか？ 私は今更だが疑わしく感じるよ」

参謀連にしても同感だった。英の問題発言を問題だと捉える者は絶無だ。彼らにしても主力艦隊が初戦で潰えたら、その先はどう戦うのか見当もつかないと感じているのだ。

「過ぎた事を嘆（なげ）くよりも」英の直ぐ近くの席に座している大尉が発言した。「今後の対策を考えるべきでは？」

発言者に皆が視線を注いだ。彼——神社美御（かみやしろよしみ）大尉は若かった。英と同じ年で一七歳。濃緑（ダークグリーン）を基調とした航空兵の制服に身を包んでいる。戦闘機搭乗員（ファイター・パイロット）である。ゆえに細身（スマート）な身体に張りのある筋肉がある。美男子（ハンサム）で女性であれば誰でも目を引かれるような容姿をしている。

彼は本来なら作戦会議に呼ばれるような立場ではない。何しろこの場は機密性の高い情報を扱うところなのだ。提督かその補佐者（スタッフ）でもなければ、危なくてとても参加させられない。

だが、美御は年齢に対し階級が高い事からも判るように、特別扱いされている。何(な)故(ぜ)か。それは彼の母親が英の乳母だからだ。すなわち乳兄弟（ちきょうだい）——義弟なのだ。彼

は「翔龍」戦闘機大隊第二中隊の指揮官と皇族附武官を兼任していた。

この時代、そうした措置を執る部隊は、まだ数多く見られた。幼友達を兼ねていた義兄弟が皇族将官の側近として傍に控え、彼らを補助（サポート）していた。

讃州県出身者が多数を占め、戦船宮家の人間に従うのは当然だとの風潮がある第一東遣艦隊では、美御は楠参謀長よりもある意味で強い影響力を有していた。その容貌や立場の割に偉そうな部分がない彼は、艦隊将兵——その中でも女性兵士たちの人気が高く、一種の偶像（アイドル）扱いされていたからだ。

発言者の顔を視た英は、幾分か表情を和らげた。美御は同じ女性の乳を共に飲んで成長した弟との意識があるし、常に行動を共にしてきた——激戦区に身を置いてきた戦友との思いが強いからだ。誰かを鼻屑（ひいき）するのは好ましくないが、彼の進言は常に的を射ているので、軍事的助言者としても信頼している。

「美御」英は周囲の目があるうとも義弟を下の名前（ファーストネーム）で呼ぶのを躊躇（ためら）わない。「何か意見があるのかね？」

「はい」美御は頷いた。周囲の反応を伺う。差し出がましさを叱るような感じはない。他の者の進言は退ける事が多い英だが、お気に入りの彼の主張なら素直に耳を傾けるからだ。

「我々の目的は開戦前に爬間諸島に到着し、その後は第一艦隊の支援をする、との事でした。第一艦隊が壊滅し、支援すべき存在が消え果てた以上、引き返すべきでは」

「撤退か」英は腕を組んだ。表情を険しくする。

「抗戦を継続するにしても我々だけでは厳しいかと存じます」美御は理路整然と続けた。「入手できた情報によれば、敵は戦艦部隊の他に機動部隊を投入しているそうですから。空母・重巡が各四隻ずつの我が艦隊では、手に余る公算が大です」

第一東遣艦隊は正規空母「翔龍」「碧龍」と軽空母「飛燕」「隼燕」の他に愛雄（まなお）級重巡洋艦四隻——「愛雄」「高岩（たかご）」「摩海（まみ）」「鳥耶（ちょうや）」と第五水雷戦隊——軽巡「千穂乃（ちほの）」と駆逐艦八隻により構成されている。

戦艦はない。出発前に真田中将が「何ならうちの艦隊の巡戦を一隻か二隻は連れて行くか？」と申し出てくれたが、海軍総司令部が許可を出さず、この布陣での出撃を余儀なくされた。

「敵が『清風』をものともしない艦戦を多数揃えているとなると、七航戦は戦力的に見て当てにできまい。重巡四隻も空母直衛用に防空使用に改造されたものだから、敵戦艦と真正面から撃ち合うのは厳しいしな……」

第一艦隊との戦闘により敵が消耗している事を計算に入れても、正面決戦は厳しいと言わざるを得ない。「翔龍」「碧龍」には昨年度から正式採用された新鋭艦上戦闘機——零式艦上戦闘機「紫風(しふう)」が各四〇機ずつ積み込まれているし、九九式艦上爆撃機「赤星(せきせい)」と九七式艦上攻撃機「陣山(じんざん)」が各二〇機ずついるから、打撃を与えるのは不可能ではないが、敵艦隊を撃滅して叩き返すのは残念ながら無理だ。

皆が考え込んでしまった。当初の予定では一二月中頃に開戦とされていた。それを前提に動いていた。御道栄諸島にも爬間諸島への進出を予定していた重爆撃機隊が一〇〇機単位で控えている。それが二〇日程も予定を繰り上げて戦闘が開始され、主役は早々に退場となれば、「臨時編

成された」――第一東遣艦隊は常時設置されている艦隊ではなく、開戦に合わせて急増された部隊の一つで、爬間諸島沖海戦に参加後は解散する事が定められていた――機動部隊の司令部には手に余った。

「かと言って何もしない訳にはいかんぞ」英は義弟をたしなめるように言う。「瑞穂本国から御道栄まではるばる進出してきて、敵と戦う前に尻に帆をかけたとあれば、何と言われることやら」

「そこは義姉上（あねうえ）、貴女（あなた）の判断にお任せするしかありません」美御は事実を告げた。数秒の沈黙の後に付け加える。「貴女が戦えと仰（おっしゃ）るのであれば、皆が従います。僕が先頭を切り進みます。僕の命は貴女に捧げられていますので」

これを上役に公然としたおもねりをしていると受け取る者はいなかった。美御は英に付き従い、幾度となく生命を危険にさらしている。彼の戦歴は本国勤務が長い参謀たちよりも苛烈を極めており、その言葉には説得力があった。

「……危険に敢えて飛び込むのを必ずしも勇気とは言わない。時には退く勇気も必要だ」

英は我を折った。義弟の進言の正しさを認めた形であるが、前線の現実を見つめ続けてきた軍人らしい判断とも言えた。精神力は戦いに際して確かに必要とされるが、一定以上の物量差を覆すのは無理だ。

「本国に指示を仰ぎ」楠が口を挟んだ。

「撤退許可を――」と続けられようとした時、通信室から伝令が駆け込んできた。彼は「司令官宛です」とだけ言うと、伝聞を手渡した。そこに記されている内容を一瞥すると、俄に英の表情が変わった。

「どうされましたか？」

「撤退はなしだ」英は判決を下す裁判官のような口ぶりだった。「いや、出来なくなったと言うべきかな」

「と仰いますと？」

「海軍総司令部から撤退支援命令が下された。守備隊と民間人が爬間諸島から脱出するための時間を我々に稼げ――との事だ。方法は我々に一任するそうな」

「まさか」楠は驚いた。その拍子にかけている眼鏡がずり落ちそうになる。「爬間諸島には陸上守備隊だけで三万。民間人に至ると瑞穂人入植者だけで三〇万は数えるんですよ。無茶だ」

「本国政府は個人所有の遊覧船（ヨット）を徴用してでも、それを成し遂げるつもりでいるようだ」英は嘆息を交えながら、その決定を評した。「質の悪い冗談だと言えは済むのなら、私もそうしたいな」

瑞穂は一〇〇〇万石以上の商船隊を保有している。世界中どこの海に行こうとも苦労はないと豪語するだけの船舶を保有している。しかし手持の船が多いのと敵艦隊の妨害をくぐり抜けて撤退作戦を遂行できるのかと言えは、それはまた別の問題だ。

非武装の輸送船が第一艦隊さえ壊滅に追い込んだ戦艦部隊や機動部隊の前に姿を現すなど、形を変えた自殺に過ぎない。縦しんば敵の目を逃れたところで、兵士や避難民でごった返した船で何処まで行けるのか疑問だ。橋道洋は波が荒く、ただでさえ事故が起こりやすいのに。

「三三万人の大脱出ですか。過去に前例は？」

美御の問いかけに、英は過去に紐解いた戦史を思い出す。「確かスラヴが帝政時代に孤立した要塞から一個軍を鮮やかに撤収させた話がある」

スラヴとは惑星地球最大の大陸であるウーラシアの北部、その過半を支配する共産主義国家である。正式な国名はスラヴ人民連邦。彼らはほんの三〇年程前までは皇帝が全てを支配する専制君主国だった。

瑞穂暦二〇〇〇年時は、革命政府の追及を逃れた旧貴族と有産階級が建国したシベリヤン共和国とに分裂しており、瑞穂は立憲君主制国家の立場から共産主義と相容れないため、シベリヤン共和国のみを正式国家として認め、スラヴ人民連邦とは国交断絶状態にある。

そのスラヴは、帝政時代に冬の天候や視界が悪い隙を突き、孤立した海岸要塞から数万の兵士を一晩のうちに救出したとの「軍事的奇跡」を成し遂げた事がある（高速発揮可能な戦闘艦艇のみを用いた、との裏技的な技術を用いたが）。

「数字の桁が一つ違いますか？」

「確かあちらは五万か七万だと記憶している」

数字が曖昧なのは、既に滅んだ帝国、革命期の混乱で古い資料が何処にか消えたものだからだ。要塞を包囲していた側も、敵情を正確に把握していた訳ではないので、どうしてもそうなる。

「可能ですか？ 一度は敵艦隊を撃破しないと、爬間諸島に近づく前に輸送船団が大損害を被るか」と

「出来る出来ないではない。命令となれば遂行せねばならんよ。私が海軍総長でも似たような判断を下したかもしれない。実際、三〇万人以上の人員を救出し、軍の不名誉を僅かながらにでも軽減できるのなら、四隻の空母を沈めても惜しくないだろうからね」

「喪われたもののために、抗戦を継続する？」

「国民の信頼を繋ぎ止める事は出来るさ」英は達観したような顔色をする。「そのための錨に選ばれたのが我々なんだ」彼女は周囲の反応を、視線を走らせながら確認した後に続けた。「それに、どうしたらよいのか判らない時は『砲声に向かい突撃する』のが海軍の流儀さ」

命令が既に下され、現場最高責任者である人物が最前線へ向かう事を決めた。となれば、彼女を支える面々としては、翻意を促すよりも先に、如何なる手立てを用いて敵と戦うか、それを考えねばならない。

「承知しました。ならば全力を尽くすまでです」

一礼した参謀長に、英は「うん」と頷いて見せた。楠は父英治に事務処理能力を買われて起用された、官僚肌の軍人で、戦略戦術に関しては疎い部分がある。彼の役割は故に司令部内の意見調節と書類仕事に限定されている。何かと周囲と衝突しやすい英をなだめ、物資補給が滞（とどこお）りなく行われるように気を遣う係――と言えば貧乏籤を引かされたような感じがするが。

「艦隊司令部の決定を各戦隊に通達してくれ。嵐が収まり次第、我々は爬間諸島を目指して前進すると」

英は力強さを感じさせる口調で言った。その瞳は輝いている。彼女は戦闘機搭乗員として海賊と戦っていた時も、戦闘を前にするとこんな感じであった。本物の戦争好き、あるいは天性の軍

人なのかもしれない。

第一東遣艦隊は、航空戦力は二五〇機以上を有している。戦力不足は逃げてよい理由にならない。旧式機が全体の三割以上なのが気になるが、まだ十分に第一線で使用可能な機体ばかりだ。もう、やるしかあるまい。

そんな捨鉢（すてばち）気味な参謀連の内心、それを知ってか知らずか、英は殊更に朗らかさを感じさせる口調で言った。

「さあ諸君、戦争の時間だ」

戦争とは相手がいなければ出来ない行為の代名詞だ。机上であれば惑星の裏側から突如正体不明の軍勢が現れたとしても構いはしないが、現実には戦意を有して自軍を待ち構える敵軍がいなければ成立しない（戦う前から逃げ出し、対戦相手を困惑させる軍隊も時折だが見られるが）。

その事を踏まえている西部帝家艦隊司令長官であるが、各部隊から寄越された損害集計を眼にすると、渋面を形作らざるを得ない。そこには勝利した側とは思えない数字が記されていた。

「撃沈されたのが、巡洋戦艦『レヴォラシオン』に重巡『コルウス』に軽巡『レオン』と駆逐艦六隻か」

「他に戦艦・重巡・軽巡が各二隻ずつ大破。駆逐艦九隻が損傷を負い、後退を余儀なくされました」

顰め面の司令長官に、参謀長——ヴィルヘルム・フリードリヒ・フォン＝アドラー少将が告げた。彼は短く刈られた銀髪に少なからぬ白髪を交えているのと細面なため、「銀狐（シルバー・フォックス）」——森の奥深くで知恵をつけた狐、との意を込めた愛称で呼ばれている。

「つまり戦艦部隊の半数が沈没するか何らかの損傷を負い、退場させられたのだな？」司令長官の眼光が鋭くなる。「これは勝ったのか負けたのか？」

「我々の勝利です」アドラー参謀長は自信を持って言い切る。「敵艦隊は主力戦艦の過半を喪い、逃走いたしました。それに対し我々は半数が健在で戦場海域に留まっております」

確かにそうなのだ。西部帝家艦隊は迎撃してきた瑞穂艦隊と正面から砲雷撃戦を挑み、完膚無きまでにそれを撃破した。爬間諸島の攻略——占領に王手をかけた形で、戦術・戦略の双方で完勝したと評してよい。

だが、そのために払った犠牲は無視できない。

敵直掩機と激戦を展開した戦闘機隊は、戦闘に加入した機体の三割近くが撃墜されるか損傷し、稼働機は一〇〇機を割り込んでいる。敵戦艦二隻を撃沈した艦爆と艦攻にしても無理が祟り、状況は似たようなものだ。

「だとすれば爬間諸島の攻略は問題なく出来るな。輸送船団の護衛についている艦も回せるしな」

「はい。海戦の最中に飛来した敵基地航空隊にも直掩（ちよくえん）隊が大打撃を与えております。制空権さえ確保できれば、旧式艦でも沿岸部に近づけますから、上陸支援は可能です。敵の守備隊は陸軍と彼らの海兵隊とで三万程度ですから、一個軍団七万を投入可能な我々の優位は揺るぎますまい」

「そうか」

西部帝家艦隊司令長官は僅かに顔を綻（ほころ）ばせた。その拍子に長い金髪が揺れた。その様をアドラーは時の流れの速さを感じながら見つめた。この人の——姫のお側にお仕えしてから、もう一五年にもなるのか。

「姫」と称されている事からも判るように、西部帝家艦隊司令長官は女性であった。ユリーシア＝テレーズ・ド＝ボナパルト元帥。彼女こそは北加大陸の西部を治める西部帝家の長――西部王なのだ。聯合帝国を統治する現皇帝ジークフリート一世の従妹（いとこ）に当たる。

ユリーシアはうねりのある金色の髪他に、透けるような白い肌と古代の美の女神が自ら創造したかのような美貌（びぼう）に恵まれていた。年齢は二六歳。彼女の澄んだ湖のような色をした瞳に正面から見つめられて平然としていられる人間は少ない。

英が瑞穂人的な美しさを持つ少女だとすれば、ユリーシアは白色人種的な美を有する女性だと言える。彼女は主力戦艦を自ら率いるのではなく、電探射撃の専門家であるジスカール＝ポール・ド＝デスタン中将に任せていた。

「敵艦隊と正面から撃ち合えば、負けなくても座乗艦に直撃弾が生じる確率が高い。西部王で海軍元帥ともあろうお方が戦死あるいは重傷を負い指揮不能となれば、全軍の士気低下は避けられない。ここは後方に展開している機動部隊に艦隊司令部兼遠征軍総司令部を設置し、そこから戦艦部隊を督戦（とくせん）すべきである」

開戦劈頭から総司令官が身を危険にさらす事を参謀連が諫めた形だ。ユリーシアはその進言を容れ、戦艦部隊から一五〇里程離れた機動部隊――昨年から今年にかけて竣工したブラン・ラパス級正規空母の一隻、その一番艦に将旗を掲げていた。

ただ安全対策を理由に航空母艦を旗艦に定めたのではない証拠に、ユリーシアは機動部隊を直接指揮し、絶好の機会と言える時に航空攻撃に踏み切り、敵戦艦部隊に強烈な損害を与えた。

砲雷撃戦の最中に――言い方を変えればドサクサに紛れて――旧式戦艦を一隻。敗走の渦中にある、損傷戦艦――攻撃隊員の報告によれば、矢隠級戦艦の一隻らしい――を一隻。

これは大艦巨砲主義者と航空主兵主義者が長年にわたり重ねてきた論争――航空機は戦艦を実戦で沈め得るのか――に一応の終止符を打つ形である。

航空機による戦艦の撃沈は確かに可能で、それは戦力の集中という戦争の原則――勝負事の鉄則を忠実に守ったが故に得られた結果だった。

もっとも、不満がない訳ではない。ユリーシアが期待を込めて送り出した艦上攻撃機――「イーター」が雷撃で得た戦果が殆どないのだ。先に記した戦艦二隻撃沈は、防御力に難を抱えている旧式艦の弱点を突いたのと、戦艦の砲弾を改造した特殊爆弾が命中した事によるものだ。

「戦艦の装甲版をぶち抜ける威力を持つ航空爆弾及びそれを運用できる艦載機の開発」

これらを命じたのはユリーシアだ。彼女は魚雷の低命中率ぶりがいきなり改善される余地がない事から、艦上爆撃機――「メテオ」と特殊爆弾装備機に戦艦撃沈の夢を託したのだが、まさか本当に本命ではなく保険の方が機能したとなると、釈然としないものがある（姫様育ちらしい我儘と言うべきか）。

「それにしても魚雷による損害が大きいな」

自軍の航空魚雷の不甲斐なさ、それに半ばの呆れと憤慨を感じていたユリーシアは、報告書に記載されている損害理由について触れた。撃沈された巡洋戦艦「レヴォラシオン」――ガリヤ語で革命を意味する――の沈没原因は、何処からか忍び寄ってきた魚雷によるものだという。

攻撃力優先で防御力に関しては物足りないものがあるとは言え、三八センチ砲を八門搭載した

新鋭艦が撃沈されたのだ。重軽巡の撃沈破された艦にしても、敵艦隊の「威力抜群の魚雷」を叩き込まれ、大損害を受けたのだとか。

「各艦の見張員からの報告によれば、瑞穂艦隊が装備する魚雷は殆ど航跡を発しないために発見が困難なのだそうです。射程距離も我々が装備する魚雷よりも長く、躲したはずの魚雷が他の艦に命中した――と」

「無航跡かつ巡戦を撃沈可能な威力を持つ魚雷だと？」

「はい。詳しい事は後で調査しなければ判りませんが、彼らは我々が開発を断念した純粋酸素を動力源とした魚雷を装備しているのかも知れません。まさか砲雷撃戦の最中に潜水艦が乱入してきたとも考えられませんし」

アドラーは表情を硬くした。瑞穂艦隊は戦艦にしても予想より頑丈で、砲撃のみで撃沈できたものはない。それに勇猛果敢な水雷戦隊！ 彼らは死の恐怖を超越した一個の生き物のように突っ込んできた。

あのような連中ともう一度決戦をしろと言われたら、戦慣れしている「銀狐」にしても、拒絶したい心境だ。電探射撃装置の優位性は早い段階で消し飛び、後は厳しい戦闘が続いた。もっとも、主力戦艦の半数を初戦で撃沈破された彼らと再度艦隊決戦を挑む機会があるのかどうかは疑問だが。

「潜水艦か。それも面倒だが空母はどうした？」

ユリーシアは若いだけに新技術の導入に貪欲で、故にこれまでは「艦隊決戦時に制空権を提供するだけの補助戦力」と見なされてきた航空母艦を集中配備し、強烈な打撃力を生み出した。敵も同様の部隊を組織し、反撃に転じるのではないか――との危惧を抱いたのだ。

「敵は直掩用の戦闘機のみを積んだ軽空母を二隻擁しておりますが、本隊の後退と共に退却したそうですが」

瑞穂海軍の混乱は聯合帝国にも影響を及ぼしていた。彼らは英率いる第一東遣艦隊が正規空母・軽空母を各二隻ずつ有する部隊だと知らず、それどころか彼らが味方部隊の撤退支援のために爬間諸島へ接近中なのも知らなかったのである。全てが泥縄式に進められた事が、意外な形で現れていた。

「ならば構わないが……」

ユリーシアは腕組みをした。濃緑色の西部帝家艦隊用制服の上からも明らかな胸の膨らみ、それが微かに震えた。彼女もまた優れた軍人が有する第六感から敵の気配を感じる事が出来た。実は近くに他の部隊が潜んでいるのではないか――と思えた。

しかし軍隊は「直感」では動かせない。「俺が敵が来る気がするので、警戒態勢に入れ」などと言われて納得できる者はいないのである。敵が来るのが判るにしても、明確な根拠を必要とした。

結局ユリーシアの口をついて出たのは、

「敵基地航空隊は大分痛めつけたとは言えまだ健在なのだ。油断すれば思わぬ被害を被る可能性がある。各艦に引き続き警戒を続けるように伝えよ。爬間諸島を攻略するまでが今回の作戦なのだからな」



そのように油断を戒める弁のみであった。

これを勝ちに驕（おご）るのを由（よし）としない、慎重肌の総司令官の注意以上の意味で受け取った人間は、司令部要員を含めて尚、殆どいなかった。

5

英が海軍総司令部の意を汲んだ反撃を決意した直後から、御道栄諸島周辺海域の天候は回復を始めた。天象士官の見立ては見事に外れた形であるが、後年のように人工衛星を用いた気象予報など出来る時代ではないので、誰もがそれを当然だと受け止めた。

何しろ陸軍兵士の間で「まるで当たらない」にかけた「天気予報」なる護袋（まもりぶくろ）が流行した時期があるぐらいなのだ。もっともこれは駄洒落（だじゃれ）で「タマには当たるよ」と返されて廃った一一との落ちがつくのであるが。

英は悪天候時に予想より消耗した、駆逐艦群の燃料補給を待って、出発を命じた。機動部隊に随伴可能な高速油槽船をここまで連れてきたのであるが、これから突入せねばならない場所の危険度を思えば、ここに残しておくしかなかった。重軽巡や駆逐艦は、予想される敵機からの攻撃一一漏斗（シャワー）を思わせる勢いで降ってくる徹甲爆弾や鋼鉄製の鮫である航空魚雷から航空母艦を守らねばならない。護衛艦艇の数に余裕はなく、丸裸で行動させれば、たちまち潜水艦の餌食になりかねない船を火事場に連れて行く訳にはいかない。

油槽船から伸びる管（ホース）を通じて給油作業を受ける駆逐艦の群を、英は「翔龍」の島型装甲艦橋から見つめる。駆逐艦は対艦・対空・対潜の全てに用いる事が出来る万能艦種で、艦載機が着艦に失敗し、海面への不時着を余儀なくされた時にも、搭乗員の救出作業一一業界用語で「蜻蛉（とんぼ）釣り」と呼ばれている一一で活躍するため、飛行士たちの間でも馴染みの深い艦だ。

速度も水雷艇や魚雷艇を除けば、戦闘に用いられる艦の中では一番速く、量産性にも優れる事から、ある意味で戦艦以上の「海軍の顔」である。戦艦や空母がなくても海戦は出来るが、駆逐艦がなければ、それこそ歩がない将棋と同じような事になる。

しかし問題点はある。小さな艦体の大半を機関部が占めるため、航続距離が短く、艦隊用駆逐艦ですらも二日に一度はミルクを欲しがる赤ん坊のように給油してやる必要がある。

勿論、洋上のだ真ん中で必ず油槽船と出くわせる訳がない。戦艦や空母のように比較的余裕のある大型戦闘艦艇が分けてやるのが主流だ。艦船の燃料が石炭から石油に切り替えられる前は、波が比較的穏やかな時に、汗みどろの水兵が契約商船から石炭の袋を担いで自艦に移していた一一との話も残されている。

石炭と石油。どちらも化石燃料には違いないが、固形物と液体とでは扱う側の対応が変わる。石炭ならば袋詰めしない限り隣の艦に移せないが、石油だと管を通じて簡単に移す事が出来る。

取り扱いそのものは、機関兵が缶（ボイラー）に直接放り込めば済む石炭の方が、実は余程簡単なのだが、往復機関の限界と羽根車型（タービン）機関の発展を思えば、切り替えが進められたのも無理はない。

英はそうした事情を、知識と経験の上から学んでいる。石炭のみを燃料とした旧式船は、やはり煤煙（ばいえん）が凄まじく、視界が極端に制限される傾向にあるし、機関出力が小さいから

、思うように速度が出せないのだ。

それに何より、彼女が愛する航空機は、石炭では飛ばない。航空機用発動機（エンジン）は純度の高い空油——石油を元に造られる、航空機用の燃料——がなければ動かない。一昔前の発明家が、飛翔石——飛翔船を飛ばすのに必要な物の一つで、個人が携帯しても空を飛べる鉱石——を加熱加工する事により空鉄——全金属製航空機の原材料を生成できる事に気づかなければ、人類は未だに飛龍に跨（また）がって航空戦を演じていた事だろうが。

この二航戦を形成する「翔龍」「碧龍」にしたところで、先代は飛龍母艦——洋上で飛龍を運用するために造られた艦だった。防弾装甲など付けたくても付けられない存在である彼らは、それでも火焰放射を用いた航空戦に、爆弾を装備して対艦攻撃と、今日でも見られる戦法を演じていたとか。

英はそうした世界を写真や記録映像でしか知らない。彼女が物心つく頃には、普通に複葉機が空を飛んでいたからだ。航空機の開発とその原材料の変化がうまく組み合わせたり、進化した結果生まれたのが、現在の航空部隊だ。

——初めにボタンの掛け違いが一つあると、意外な形で現れるものだな！

化石燃料と機関の変遷（へんせん）、航空機の発展の歴史、それらを何かを誤魔化すように考え続けていた英は、内心で不意にそう独りごちた。決戦海域を当初の予定通り中部橋道洋にしていれば、開戦が事前予測通り——二月中頃であったのならば、状況はかなり変化したはずなのだ。

それが事態を好転させる材料になり得たかどうかは疑問だが、少なくとも第一艦隊は、あかも容易（たやす）くやられはしなかったのではないか——と英は思う。

どちらを選んでも航空戦力は実際の戦闘よりも充実していたのは確実で、自分たちも蚊帳の外に置かれた挙げ句に敗戦処理を任されるよりか、まだ格好のつく戦が出来たのではないか——との想像を働かせた。

しかし、今更何を言おうとも詮無き事、とも感じた。お前は口よりも先に手が出る騒動師（トラブルメーカー）で司令長官にあんなに嫌われていたではないか。そんな奴が華々しい艦隊決戦の一角を担える訳がない。いや、向こうもわざと負けるつもりなどさらさらなはずで、第一東遣艦隊が当日現場にいたら歓迎してくれたかも知れないが。

「まあいいさ。敗戦の後始末をするのは、今回が初めてじゃない。最善を尽くすまでさ」

今度は内心ではなく口から紡（つむ）がれたものだった。その意を介さぬ者は艦隊司令官は何を言っているのだろうと首を傾げ、彼女と共に歩んできた者は微苦笑を顔に刻んだ。英の軍歴は事実その積み重ねで、彼女は自ら認めるように華々しさとは無縁の軍隊生活を続けてきたのだ。

その事を他の誰よりも知る義弟——神社美御大尉は、さて今回はどうなるのだろうと、彼なりに考えた。義姉上が指揮する限り、無様な敗北を喫する事だけはなさそうだが、相手は名にし負う強敵——聯合帝国軍だ。果たして海賊を相手にした時のように行くかどうか。

美御は彼の中にある砂時計、それをそっと逆転させた。航空母艦の装甲艦橋——防弾硝子（ガラス）を張られたそこから見える青い海は、いつしか生まれ故郷の東府（とうふ）の街並みに姿を変え、記憶の中にある幼き日の英と重なった。

英は明るく朗らかな調子で海軍兵学寮への憧れを語り、笑顔と共に幾度となく聴かされた言葉

で締めた。

「美御、一緒に海に行こう。飛行機や戦艦に乗ってさ」

一〇年以上前の光景に血肉が宿り、熱い息づかいと共に活気づいていくのを、美御は感じた。

## 6

戦船英こと戦船宮呉葉愛児（くれはあいじ）英内親王が生を受けたのは、瑞穂暦一九八三年五月二七日である。この日は祝日であった。瑞穂皇国の建国記念日に当たるのだ。とは言え、他国の独立記念日や王朝の創始者が戴冠式を執り行った日のように、それは明確な歴史的根拠があるものではなかった。初代大皇——天神（てんじん）帝が瑞穂皇国の前身となった八洲（やしま）国の建国を宣言したその日だとされているが、何分それは神話に由来した話であり、実は何月何日どころか年数すら一〇年単位でのずれがあるのではないかとされていた。

だが、瑞穂が惑星地球に於ける最古の国家にして神話時代から続く王朝を持つ国だというのは本当らしく、瑞穂皇室がその日を栄えある国家の起源だと主張しているのも、無理からぬ話だと言えた。

その目出度（めでた）い日に産声を上げた英であるが、彼女が誕生を確認された場所は、皇居どころか戦船宮家の発祥の地にして根拠地（ホームグラウンド）である讚州県ですらなかった。瑞穂本国東部——関八州（かんはっしゅう）と呼ばれている地域の中心部である東府だった。

これは英の母親が下級士族の娘だった事に由来する。持ち前の美貌から英治の寵愛を得た彼女だが、出自や宮廷内を取り巻く事情から外で困（かこ）われ、英治から見れば僻地にある妾宅（しょうたく）で娘を産んだ。

この時代、いや瑞穂という国全体がそうなのだが、権力や金銭を持つ者は、幾人も娶（めと）るのが公式に認められていた。これは直系の子孫を残すのが最大の親孝行であるという民族的な信仰と、一夫多妻制あるいは一妻多夫制を容認する傾向にある国民性が作用していた。

妾腹（しょうふく）の大皇は歴史上数多いし、貴族にしても母親あるいは父親が身分の低い妾だったという者が珍しくないため、こうした措置——本宅に置かない愛人だから疎まれている、との発想は成り立たない。ただ「諸事情」が響いていたのだ。

英治はこの時、五三歳だった。平均寿命が六〇歳前後の頃なので、彼はこれが自分の最後の子供だと感じていたのだろうか、末子——二五子であるにもかかわらず、自分の名前の一字と「護船神の祝福を受けし者」との意を持つ呉葉愛児との名を授けた。その上で貴族ではなく正式な皇族だと内外に届け出を出した。

英が生を受けた頃、後継者問題で揉めないようにと、将来にさしたる関心のない子供に関しては、皇族間では皇族ではなく貴族として扱う、との風潮があった。これは海外の王族にも当てはまる話で、非常識と誹られるような行為ではない。

つまり英治は誕生した瞬間から英に強い関心を抱いていた事になる。もしかしたら美貌を謳われた側室への愛情——老いらくの恋が彼を盲目にしたのかも知れない。ともあれ英は父親から誕生を祝福された。

けれども「美人薄命」と言うように、英の実母は彼女を産んでから僅か一カ月で世を去った。死因は産褥熱（さんじょくねつ）だとされるが、詳しい原因は判らない。権力者の寵愛を巡る戦

いは厳しいものがある。複数人いた英治の愛人たちの誰かが、彼の愛情と関心を一身に集める女に殺意を覚え、刺客を送り込んだとしても何の不思議もない。

若くして死んだ側室、その死を悲しむ間もなく、英治は娘を預ける先を探す必要に迫られた。皇族は昔から我が子を手ずから育てるのではなく、乳母に預けてしまう。親子が過剰な愛情を抱くのが家の滅びに直結した時代の名残と言えばそこまでだが、瑞穂皇室はそれを慣習として続けてきた。「我が手で育てたい」と希望した母親が死んだ以上、その慣習が俄に顔をもたげたのだ。

宮殿は伏魔殿（ふくまでん）だ。幼い子供を遊ばせていると、気づけばいなくなる事がある。死体が見つかる場合はまだましで、大抵はあたかも神隠しにでも遭遇したかのように消えてしまう。ましてや乳飲み子ともなれば――

乳母は直ぐに見つげられた。英の生家の近くにある神家――瑞穂皇国の国教である神道（じんどう）の宗教施設――にいる女性、すなわち神主の妻である。問題の神家は戦船宮家が始祖にして主神として崇めている戦船呉葉を祭る呉葉宗に属していた（神道は多神教なので宗派により崇める神が変わる）。

そして神主の父親は、皇室武装神官隊の長を務めた事もある、神道会の重鎮だった。皇室武装神官隊とは読んで字の如く「武装した神官」を指し、彼らは皇居内にある大皇の祖霊を祭る廟（びょう）を守護するのをその役割としていた。要するに近衛隊の神官版である。

神主自体はそうした権力に絡んだ話を嫌う、妾腹生まれの男で、故に母親の出身地である東府、その一角でそこその広さを持つ神家の主になる道を選んだ。父親が用意した政略婚の話を、「好きな女と一緒にになりたいから」との一言で蹴飛ばした剛毅（ごうき）な人物でもある。

皇室武装神官隊の長と直接的な繋がりを持ち、尚且（なおか）つ権力には興味がない男の妻は、英治からの依頼をあっさりと受けた。彼女自身も権力に代表される世俗の事柄に対する関心は、良人（おっと）と同様にあまり高くなかったが、丁度第二子――長男が生まれたばかりなので、「一人も二人も同じですから」と気楽な感じで。

それが神社神家の夫婦――美御の両親だった。もしかしたら彼らは史上稀な楽天家揃いだったのかも知れない。少なくとも悲観主義とは無縁な間柄にある快活な人たちには違いなかった。

美御は英に遅れる事僅か一日――五月二八日に生を受けていた。一日とは言え後に生まれた事には違いがなく、彼は英の義理の弟――乳兄弟だとされた。二人は身分の違いは生まれつきあれども、同じ女性の乳房から乳を飲んで育てられた。

英は身の安全を心配する父親の意向で、その幼少期、身分を偽って過ごした。すなわち下級士族の娘であった母親の名字を名乗って、庶民に混じり学校に通った。これは世間勉強の意を兼ねていた。外の世界を子供の頃に知るのは、決して無意味ではない――と。

美御はそんな英の背中を追うようにして過ごした。常に何をするのかを決め、手を引いたのは義姉の方だった。彼は飛行機を見るのが好きな義姉と共に飛行場へと通い、戦艦に憧れの眼差しを注ぐ義姉に引き摺られて軍港へ足を運んだ。

女性の軍人が多い瑞穂では、子供の頃から将軍や提督を目指す婦女子が珍しくない。英のそうした反応は、子供じみた夢の表れと捉える事が出来た。周りの大人はそう解釈した。

だが、美御は何故英が飛行機や戦艦を好んだのか、本当の理由を知っていた。実父――戦船宮英治に少しでも近づきたいからだ。親子と言うより祖父と孫娘と言いたくなる程に年齢差のある二人が顔を合わせるの、年に一度か二度だが、英はそんな父親に懐（なつ）いていた。

「お前なら僕に代わり僕の夢を叶えてくれるかもな」

たまにしか会えない事を詫びるように、来た時には多大な土産物を用意してくる英治が、ある時に英に漏らしていた言葉である。美御もその場に居合わせた。彼は第二子が持ちうる勘の鋭さを発揮し、老人の願望を理解した。

英治は「海軍元帥」――瑞穂でただ一人の大元帥である大皇を除く、軍人の最高位――の地位にあるが、実際に敵と戦った事はあまりないらしい。若い時分、まだ戦船宮家の傍流に位置する平皇族――妙な表現だが、主流から外れた宮様など、周囲の扱いもぞんざいになる――だった時には海賊討伐に従事していたそうだが、戦船宮宗家に相次いだ夭折（ようせつ）が英雄願望を持つ青年の未来を変えた。

――この人は本当は他の生き方をしたかったのではないか？　もしかしたら一番なりたくないものが今の立場なのではないか？　義姉さんを手許に置けないのが悔しくてならないのではないか？

美御はそう感じた。両親から英の父親にあまり話しかけるなど言われていたから、直接的な質問をしなかったが、言葉や態度の端々からそれが真実に一番近いのではと思えた。

そんな勘の鋭い子供の存在に、英治も何か思うところがあったのか、彼は年端も行かぬ英の義弟に、

「あの娘（こ）の事を宜（よろ）しく頼む」

そう告げた。大好きな義姉の実父からの言葉。それは美御にとり絶対的な響きを有した。本来の彼は機械いじりが好きな内気な少年であったが、義姉に尽くす――その一点に関しては積極的で、彼は成長するにつれ、誰よりも英に忠実かつ献身的な弟分になっていた。

英と美御にとっての人生の転機、それは一〇歳の時に訪れた。英が英治の意向で海軍兵学寮幼年科――一〇歳の子供に三年間の教育を施し、一二歳で海軍士官に育て上げる制度が瑞穂にはある――に入学を決めた時、義弟を同じ道に進まないかと誘ったのだ。

美御にとりその誘いは否応あるものではなかった。彼は二つ返事で義姉に従う旨を告げ、両親にそれを報告した。そして二人とも反対しなかった。神社神家は彼の姉が相続する事が決められており、長男と言えども跡継ぎではなかったのと、息子が好きな道へ進むのを容認する家風にあったのが大きかったのだろう。

こうして彼らは海軍士官への道を歩き始めた。美御は英と出会わなければ、趣味の機械いじりを職業にしていたかも知れない――彼は壊れた目覚まし時計を見よう見まねで直せるだけの才能を有していた――子供だったが、義姉と同じところを、せめて背中に付き従えるように、との願いから必死の努力を重ねた。

在学中、喧嘩早く理不尽な事柄に対する耐性の低い英を止める役割を担ったのは、大抵は美御だった。海軍兵学寮は英が憧れたような楽園ではなく、門閥貴族や上流市民の子弟を中心とした社会の縮図が描かれており、そこでは中流以下の生まれである者たちが公然とした差別を受け

ており、英はそれに反発したのだ。

「美御、私は間違っただけをしているか？」

喧嘩の後、青タンを拵えた顔で、英は義弟に問いかけるのが常だった。英はこの段階でも下級士族の娘として扱われており、喧嘩に応じる相手も容赦がない。正面決戦で損害を皆無に出来る道理はなく、いつも相手を殴り倒せても彼女もまた手傷を負うのだ。

「いいえ、何も」傷口に薬を塗り込んであげながら、美御は答える。「義姉上、貴女はいつも正しい。ですが酷く不器用ではありますね。理不尽に対し真正面から挑む事だけが正義ではありませんまい」

「そうか」

英にも自覚はあるらしく、傷の手当てをしてくれる義弟に申し訳なさそうな視線を向けるのが定番だった。

一二歳の年に、二人は海軍兵学寮を無事に一一英治の支援が陰に日(ひ)向(なた)にあったのが一一卒業した。英の卒業席次は同期一二五人中六三番で、美御が三八番だった。これは二人とも勉強があまり出来なかったのではなく、喧嘩ばかりしていたので、「素行不良」の烙印を押されたのが大きい。単なる座学や体力なら彼らは同期生の中でも首席(トップ・クラス)に近かったのであるから。

少尉任官を果たした二人は、飛行将校一一士官搭乗員として海賊討伐の最前線に配置された。これは瑞穂皇国の経済を足許から揺さぶる、目の上のたんこぶ一一橋道洋各所に蔓延(はびこ)る海賊組織が、外国勢力の支援を受けて航空機を保有し始めた事による。

当時は軍が保有する航空機でも全金属製のものは絶無に近く、戦闘機ですら複葉機であった。それだけに扱いが容易で、海賊が獲物探しの「眼」として用いたり、あるいは単なる嫌がらせ目的で商船を爆撃してきたりしたので、こうした存在に対抗するため、航空部隊は何処でも引く手あまたと言えた。

そこで英は最初に小隊を率い、最後には大隊を動かすようになっていた。彼女は血気盛んな部分があるが、部隊を動かす時には臆病な程慎重で、通信機を駆使した編隊空戦を常に心がけた。そのおかげで彼女が指揮する戦闘機隊は殆ど損害らしい損害がなく、また担当区域では海賊船にやられる商船がほぼ皆無になった。

それが英が一歳から一四歳の時の話である。彼女は手ずから撃墜した敵機も多く、公認撃墜数は一七機一一本人の申告を額面通り受け取れば、個人撃墜数は五〇機を数え、共同撃墜と合わせれば三桁の大台に達するという一一にも達した。

瑞穂皇国は、この時長らく国外勢力との直接対決をした事がなかった。陸海軍に四半世紀籍を置く者でも、実戦経験が皆無だという者が大勢いた。そんな時代に二桁を超える撃墜数(スコア)を誇る者は少なく、それが彼女に野戦昇進一一少しすると正式昇進となる展開が目立った一一を重ねさせた理由であろう。でなければ、如何に英治の後援があるとは言え、僅か二年程度で少佐にまではなれない。

美御は、そんな駆け足で人生を歩み続ける英の背を、懸命に追った。気を抜くと置いてけぼりにされそうなのを自覚しながら。彼は何かあるろうとも英にとっての「過去」になるつもりはなく

、隣に立つのが無理でも、背後にはありたいと努力を続けた。

活躍を続けた英であるが、一五歳の年に事故を起こして負傷した後は、戦闘機搭乗員としての第一線を退いた。「戦死されると困る」との英治の意向を汲んだ彼女は、基地航空隊の飛行長――航空部隊を指揮する方に回り、「司令官とは何たるか」を学ぶ事にした。

海軍兵学寮に在籍時から、常に英の傍にいた美御は、ここでも彼女に付き従った。皇族附武官兼戦闘機搭乗員として行く先々で辣腕を振るった。義姉が痼癢（かんしゃく）を起こそうとした時にはそれをなだめ、戦闘機隊を実際に動かした。

一〇台前半から軍隊に関わりを有した者の人生とは流転を迎えがちであるが、英と美御の人生を決定的な意味で変えたのは、瑞穂暦一九九八年に迎えた、「催飯防衛戦」である。この時、鞆縄諸島最北部に位置する島――催飯は、海賊の蓑を着た反政府組織の艦隊に包囲された。

旧式とは言え巡洋艦クラスの艦まで装備した敵艦隊に肝を潰した現地司令官は、何とした事が持病の治療を理由に単独脱出を企て、その挙げ句に捕虜となり、民間人――現地先住民や瑞穂人入植者らと共に籠城戦をする覚悟を固めた守備隊に、降伏勧告をするという前代未聞の珍事――後に皇国陸海軍創設以来の一大醜聞に数えられる行為に及んだ。

催飯島に基地航空隊司令として赴き、逃げ出した守備隊司令官の代わりに、催飯防衛の任を預かった英は、この恥知らずな勧告に砲火を以てして答えた。守備隊だけで四〇〇〇名。民間人の数は二万。それだけの命を預かる者として、無法者に降る道理はないと。

この気風のよい言い分に喝采を送った者は多かった。催飯を取り囲んだ反政府組織は評判が悪く、降伏しても女は強姦し、老人や子供を皆殺しにするとまことしやかに囁かれていたからだ。

しかしそれからが大変だった。催飯には一応要塞らしきものが築かれていたのだが、配備されている陸上砲台は全て旧式でしかも数が少ない。守備隊にしても平和な南国の治安維持を目的として編成された部隊なので、装備劣悪かつ兵員は老兵（ロートル）ばかりという悲惨な境遇に置かれた。

たちまち陸上砲台は沈黙に追い込まれ、槓桿式（ボルトアクション）の小銃とそこに装備された銃剣が頼りだという泥沼の戦闘が始まる。何しろ飛行場は防衛不可能との判断から極めて早い段階――敵軍上陸以前に放棄されて航空戦力は零。海上戦力も魚雷がない旧式水雷艇が燃料不足のまま栈橋に繋がられていただけだったので皆無も同然。制海空権を始まる前から喪失し、敵と直に干戈を交えたのだ。戦闘が悲壮を極めたのも無理はない。

老兵と民間人の志願者から結成された守備隊が崩壊を免れつつ戦いを継続できたのも、全ては常に前線で督戦を続けた英のカリスマ性による。彼女は陸戦隊指揮官としても非常に優秀な能力を部類に入り、決して最良の質を持たない麾下将兵を耐え続けさせたのだ。

「援軍は必ず来る。それまで我慢するんだ」

英は日増しに増えていく死傷者、それに頭を痛めながらも、そう主張し続けた。指揮官とは時に自分でも信じられない話を、指揮維持の観点から部下にせねばならない瞬間があるが、この時の英も似たようなものだった。

――海軍上層部が重い腰を上げるかどうか、疑問だ。

単なる海賊騒ぎであるのなら、付近の小部隊が独断で動き、救援を試みる事もあるだろう。しかし海賊の仮面を付けた、大規模な反政府組織の存在を認めてしまうと、本国政府は統治責任を問われる事になる。その重みに耐えきれぬかどうかは、総理大臣の器と人気次第だろう。

籠城戦が一カ月にも及び、各級部隊から小銃弾でさえ底をつき始めた、との報せが届き、いよいよこれまでかなと英が覚悟を固めた時、待ち望んでいた救援が遂に姿を現した。巡洋戦艦や航空母艦を有する本格的な艦隊が来援し、催飯を包囲していた敵艦隊を一掃したのだ。

これは英治が議会や報道機関に強い圧力をかけ、総理大臣の尻を叩いた結果だと裏で噂された。さほど剛胆でも有能でもない現首相にとり、問題を揉み消そうとした挙げ句に報道機関に垂れ込み(リーク)をされ、「二万以上の同胞を見捨てようとした冷血漢」「孤軍奮闘を続ける部隊に救援の手すら差し伸べない殺人者」呼ばわりされるのは耐え難く、その措置に踏み切ったらしい。

玉砕寸前まで追い詰められながらも、どうにか催飯防衛戦を完遂——敵軍の撃退に成功した英を待ち受けていたのは、考えられ得る限りの賞賛の嵐であった。

何しろ海軍からすれば、その存在意義を問われかねない醜態を演じた莫迦者を、国民の記憶から抹消したいし、政府の方も対応の遅れが海賊騒ぎで済んだものを、事変クラスにまで拡大した——との自覚があり、双方の思惑が「若い英雄を造る事により、この場を誤魔化す」事で一致し、英は一躍戦う皇族の代名詞に祭り上げられたのだ。

「上層部(えらいさん)は増援を出すのが遅れた責任を、誰もとる気がないらしい。勲章や感状を乱発する事で事態を收拾させたいようだな。莫迦らしい」

これは英の辛辣な評である。彼女は第一線の冷酷な真実を知る立場にあるから、政府や軍部上層部の思惑が透けて見えた。ちやほやされていい気になる神経を持ち合わせない人間特有の、乾いた悟り。

しかしこの評は共に歩兵部隊を率いた美御にだけ漏らされたもので、他は誰も知らない。彼も同意見だったので義姉をたしなめようと思わなかった。あと半月、いや三日でよいから救援が早ければ死なずに済んだ者も大勢いたろうにと胸を痛めた。

このように英たちは冷めていたが、周囲は違った。それは英が戦死者を上回る昇進——三階級特進し、一気に提督にまで上り詰めた事からも判る。如何に皇族で元帥の後ろ盾があるとは言え、英雄的行動をしたとの認識が周囲になれば、流石に一五歳で少将にはなれなかつただろう。

「提督帽よりも、あの阿呆な総理大臣の横面を殴る権利が欲しいな。あいつは許せん」

昇進後の記念撮影、帽子に赤い羽根飾りの付いた海軍礼装に身を包んだ英は、微苦笑してそう漏らした。ただし満更でもなさそうだなと美御は感じた。戦争好きな人間が持つ権限確保への欲求——嫌な奴に頭を下げたくないとの願望が、義姉には多分に見えたからだ。

戦場に在り戦闘部隊を叱咤激励する事により輝く人間。平時には才覚や血の気を持って余す人種は、確かに存在するのである。義姉を視ていると、美御はその思いが確信へと姿を変えるのを感じた。

曲がりになりにも「提督」と呼ばれる地位にまで上り詰めた英であるが、その後は大規模な叛乱(はんらん)も海賊騒ぎも起きず、彼女自身が瑞穂本国の基地航空隊司令官——陸上に根を下ろした、航空戦隊司令官に転属となったので、暇を持って余す事になった。



とは言え、平和と称してよい時間を英自身はそれなりに楽しんだようだ。大好きな歴史研究に好きなだけ打ち込めたし、周囲からは意外と思われている趣味――墨絵や油絵の作成方法を、きちんとした師匠について学び、皇国首都――一般には皇都の名で知られる皇京の片隅にある美術館で、個展を開いたりもしたのだから。

鉛筆と写生帳（スケッチブック）を手に、写生（スケッチ）に出かける英のお供を、美御は公休日の度にした。場所は近所の公園とか遊園地だのと区々（まちまち）だが、ベレー帽をかぶり美術学生に扮した義姉の姿からは、微笑ましさを感じた。

平穏な毎日でも案外悪くないものだと思いがちだったが、英たちが感じ始めた時、皮肉にも戦雲は再び垂れ込み始めた。聯合帝国との関係が経済関係のこじれから急速に悪化し、本格的な戦争が始まる気配が見え始めたのだ。

既に航空部隊司令官として名を馳せた感のある英は、基地航空隊から海上部隊――翔龍級正規空母二隻により編成される第二航空戦隊司令官への転属を命じられた。大艦巨砲主義が主流の瑞穂では、優秀な航空部隊司令官の数が不足気味で、実戦経験のある者は何処でも歓迎された。

少将に昇進――本国勤務に転じてから出世の機会を喪ったような感じのある英は、転属を命じられると即座にそれを受けた。翔龍級正規空母は建造されてから一〇年程経つが、まだまだ第一線での活躍が期待される艦で、栄転を意味したからだ。

二航戦司令官に転じた英は、早速それを基地航空隊の時と同様に実戦に備えて鍛えた。母艦航空隊は初めから練度が高い。狭い飛行甲板を離発着艦するのだから当然と言えば当然だが、母艦勤務経験は実はこれが初めての英からすれば新鮮に映った。

そして運命の流転はまだ続いた。爬間諸島沖での敵艦隊迎撃を命じられた、第一艦隊を支援するための別働隊――第一東遣艦隊の司令官に、英は就任したのだ。「臨時編成」との但し書きの付く艦隊だが、航空母艦四隻を擁する立派な機動部隊には違いなく、彼女は張り切る。

二〇〇機以上の航空隊を指揮した事のある者など滅多におらず、これは海軍の期待値、その高さの表れかと、英は珍しく喜んだ。零式艦上戦闘機に代表される新鋭機も二航戦に限ってだが装備され、備えは万全かと思われた。

しかし瑞穂本国から爬間諸島へと向かう途中で、支援すべき対象が既に喪われたとの報告を受けたのは、運命の女神が彼女に「調子に乗るな」と嘲罵（ちょうば）したからなのか。何せ英は負け戦の後始末を任されるような展開が多く、戦闘機搭乗員を務めていた頃から、面倒な区域を担当させられる事が珍しくなかった。

だが、英は戦力差から来る悲観にも自棄（じぎ）から来た楽観にも浸る事なく、部隊を進めた。そのおかげか進撃は順調に進み、第一東遣艦隊は爬間諸島北方海域に、十一月二七日の惨劇から二日半後――一月三〇日到達。そして運命への挑戦が開始された。

第一東遣艦隊は無線封止を続けて前進をした。これは波が荒れやすく天候が変わりやすい橋道洋では非常に難しい行為に入る。何しろ急に大雨が降り、霧が周囲に立ち籠める事が珍しくないのだ。そうなれば各艦の位置を確認するのに無線は必須となる。衝突事故を頻発させたりすれば、戦闘以前の問題になるからだ。

しかし、不利を承知で前進を決意した彼らに、勝利の女神が同情してくれたのか、雲一つない晴れの日が続いた。おかげで夜間を除けば発光信号に頼る必要すら生じず、事故も脱落も絶無のまま、一月三〇日を第一東遣艦隊所属艦は爬間諸島北方海域で迎えたのだ。

第一東遣艦隊の主軸となるべき四隻の航空母艦、その飛行甲板では昇降機（エレベーター）から上げられた艦載機の群が並んでいる。いずれも暖機運転を始めており、プロペラの音が響いている。

各機にとりついた整備員らが発動機の調子を確認し、「発艦よし」を出す。如何に搭乗員の技量が優れていようとも、整備不良の機体で戦えば、目標海域到達前に墜落するのがおちだ。彼らの仕事ぶりが言うなれば戦闘の正否そのものに直結するのだ。

現在時刻は〇三三〇——

日が昇る前だ。周辺は闇に包まれている。しかし熱気は隠しようもなく高まり、飛行士たちの身体から立ち籠める闘気が、見えざる霊気（オーラ）を形成している。戦意が充分なのが見て取れた。

「一度に一五〇機以上の攻撃隊を送り出すのは、流石に初めてだな」

英は整備員らが忙しく動き回る姿を「翔龍」の島型装甲艦橋から眺めつつ、そう呟いた。大規模な戦争を最後にしたのが数十年前だという瑞穂では、その頃は航空機がなかったため、彼女の言葉に嘘はない。

「乾坤一擲（けんこんいってき）の勝負です。中途半端はいけません」英の傍らに控えている紅葉が応じた。

「うん。まさにその通りだ」

英は頷いた。偵察機や潜水艦が寄越す情報は、爬間諸島に展開する友軍の情勢、それが確実に悪化している事を伝えていた。敵機動部隊は、親夫島から見て、東に一二〇里の海域にまで進出していた。戦闘機であれば巡航速度で三〇分の距離。基地航空隊が健全ならば、危なくてとても近寄れない場所だ。にもかかわらず敵機動部隊が堂々と布陣しているのは、戦力に余程の自信があるからか、あるいは基地航空隊が壊滅的状况にあるからなのか。

恐らく後者だろう——と英は踏んでいる。頼みの綱の海軍機は、爬間諸島沖海戦の最中に多数を撃墜され、組織的な行動は不可能な状態にある。陸軍機は新型戦闘機——一式戦闘機「燕」を有しているが、如何せん数が少ないし基地機は地面から動けない。機動力を有する艦隊が相手だと分が悪い。

それに何より、親夫島は夜間に艦砲射撃を受けるようになっていた。沿岸砲台の中には戦艦主砲を転用した強力なものも含まれるが、それも昼間だからこそ抑止力たり得る。視界が闇夜により否応なしに悪化する夜間だと、探照灯（サーチライト）の助けを借りても砲撃命中率は低下する。

敵艦隊は吊光弾（ちょうこうだん）――落下傘（パラシュート）付の照明弾――を装備する観測機を飛ばし、それに飛行場を照らさせた上で弾着観測をさせた。相手が動かない地上目標とは言え、夜間での砲撃は命中率を惨憺（さんたん）たるものにしたが、昼間の空襲で弱っているところに榴弾（りゅうだん）や徹甲弾を連続して撃ち込まれれば堪ったものではない。飛行不能状態に陥る航空機が続出し、抵抗力は目に見えて低下した。

英たちが敵艦隊との彼我距離二六〇里――戦闘機の巡航速度で、一時間程の距離にまで接近した時には、爬間諸島に展開する基地航空隊は、彼女の予想通り壊滅に瀕していた。稼働機が全体で五〇機を割り込み、それすらも組織的に運用するのは不可能と来れば、彼らからの支援は望めない。

とは言え、彼らが不甲斐ないのかと言え、そうでもなかった。彼らは港湾施設を敵機から守り抜き、避難民が輸送船に乗り込むために必要な時間を稼いだ。作戦名「忍（しのび）」――民間人と陸海軍守備隊を脱出させるための、一大転進作戦――は成功しつつあるのだ。

二日間の間、近場にいた船に総動員がかけられた結果、半分程は既に危険海域より脱出した。これは敵艦隊が戦闘艦艇以外には興味を示さず、中途で出くわした潜水艦も乗組員の肝を冷やさせただけに終わった事も大きいのだが（海防艦に艦種変更された旧式戦艦が群狼（ぐんろう）宜しく押し寄せた敵潜水艦に集中雷撃を受けたが、潜水艦用の魚雷に欠陥を抱える彼らは、一発も有効弾を送り込めず、地団駄（じだんだ）を踏んだ――との逸話も残されている）。

されども、基地航空隊ももはや限界だ。敵艦隊の攻勢を支えきれず、崩壊の瀬戸際まで追い込まれている。彼らが空の盾としての機能を喪えば、敵も輸送船に目標を変更するかも知れない。ここで輸送船を大量に喪えば、戦争継続に黄信号ならぬ赤信号が灯りかねない。何としても敵を叩き、輸送船団への負担を軽減せねばならない。

そういう意味に於いて、英が敵機動部隊――分けても敵空母を全力攻撃する事を決めたのは当然だった。戦艦が残っても空母程攻撃射程は長くないし、上陸部隊への支援が優先されるから、輸送船団への攻撃は後回しになるだろう。要地の占領――攻略が彼らの主目標だとすれば、逃げる者は追わないとの心理も働くと思われる。

敵信傍受から敵がこちらの存在に気づいていない――警戒しているのは、御道栄から飛来する重爆隊のみである――のは確認されている。ゆえに一度きりの攻撃に持ちうる攻撃力の全てを叩き込めば、一定の戦果は挙げられるはずだ。しかし壊滅に追い込むのは無理だろう。

海軍航空技術廠――通称「空(技)廠（くうぎしょう）」が実験的な意味で開発した特殊機体も手許にあるが、あれが果たして制作者の目論見通りに動くのかどうか、蓋（ふた）を開けてみなければ判らない。

「戦争とは究極の賭博行為」とであると断じた軍事評論家とその昔にいたが、今なら同意できた。確実だと断言できる事柄など何もない。勝利して凱旋するか敗北して骸になるかだけは、誰の目

にも明らかなのだが。

「提督」沈思黙考を続ける英の背後に、航空参謀——鶴賀芳子（つるがよしこ）中佐が背筋を伸ばして立った。

「攻撃隊発進準備が整いました。つきましては攻撃隊員らにお言葉を賜りますようお願いいたします」

瑞穂海軍では、発進する攻撃隊を手漕（てす）きの者や司令官が見送る習慣がある。これは何機かは確実に生還しない事が判っているので、指揮官たる者の義務とまで言い切る者もいる。自らが死へと追いやる人間の顔を、最後ぐらいは確認する、と言う意味で。

「了解した」英は頷いた。「直ぐに向かう」

島型装甲艦橋を後にする英の後ろに、紅葉と鶴賀が従う。美御の姿はない。彼は皇族附武官であるが、「翔龍」戦闘機隊第二中隊長でもあるからだ。今回は攻撃隊の護衛を務める事になっている。手柄を立てて生還できるか、はたまた墜落死するかは、本人の技量と運次第だろう。これもまた断言できない事柄の一つだった。

二航戦はその保有戦闘機を全て零式艦上戦闘機——「紫風」で固めていた。それも試作機である——型ではなく、量産機である二一型だ。実機を制作した時に判明した不具合は全て改良されており、発動機も信頼性の高い光（ひかり）型発動機——出力は一五〇〇馬力を誇る——を搭載している。稼働率は極めて高く、そこも評価すべき部分だろう（発動機に問題を抱え、稼働率が低い機体は、額面の性能(カタログスペック)が如何に高かろうが、実戦に於ける信用度は低い）。

一般には、量産性を無視した試作機の方が金がかけている分、高性能との印象があるが、実際は異なる。電子計算機（コンピューター）がないこの時代では、大型戦闘艦艇ですら実物大の模型を造り出来を確認するのが普通なのだ。ましてや航空機になると、何をか況んや。

「紫風」も当初は発動機故障（エンジントラブル）の頻発を起こし、これなら「清風」の方が確実に動く分、まだまだと酷評された時もあったが、正式採用から一年半という時間は、問題点の改善を推進させ、機体そのものの信頼度を高めていた。

何しろまともに動きさえすれば、最大速度五六三里を誇る高速戦闘機なのだ。二〇ミリ機銃と七・七ミリ機銃を二丁ずつ備えた武装も伊達ではない。

美御はその機体——自身の愛機である「紫風」を手ずから整備していた。整備員の技量に疑問を抱いたからではない。彼は機械好き（メカマニア）的な部分を有しており、光型発動機の整備法を自主学习で習得していた。そこいらの機械工より余程手先が器用なのだ。もっとも、愛機を自ら整備改造する搭乗員は彼だけではなかったが。

その美御が手ずから整備した「紫風」は、「翔龍」の飛翔甲板上で暖機運転をしていた。プロペラから奏でられる爆音が馬の嘶（いなな）きを連想させる。騎兵が馬と共に戦場を駆け抜けるように、艦載機搭乗員も愛機と共に空の戦場を翔（かけ）る訳だから、ある意味で両者は近いのかも知れない。

——機体の調子は良好だ。これならいける！

美御は力強い胎動を続ける愛機を見やりながら、そう思う。海賊討伐で無数の小競り合いを演じてきた彼は、実のところ撃墜機数が英同様に公認数だけで一〇機を超えている。非公認や共同

撃墜を数に含めれば、一〇〇機は行かずとも七、八〇機は叩き落としてきたと言える。

新型戦闘機——「紫風」に機種変更をしたのは、ごく最近なのであるが、「紫風」は扱いやすい機体の割に高性能なので、実戦ではどうなるのだろうと、楽しみにしていた。

聯合帝国との関係が悪化し、開戦の足音が日々近づいてきた時は、「紫風」に乗っての初陣が敵機動部隊との戦闘になるのでは——と考えはした。緊張感とは無縁ではいられなかった。聯合帝国は急速に領土を拡張してきた軍事大国だ。統制のとれていない烏合の衆——辺境にいる海賊とは格が違う。果たして自分の腕前が通じるのだろうか、との懸念（けねん）は拭えなかった。

しかし、いざ実戦を前にすると、胃の調子がおかしくなりそうな緊張感が、俄に姿を消していた。戦闘に必要とされる奇妙な高揚感が全身を満たし、負ける気がしないのだ。

戦場での慢心は死に直結する——そんな事は誰かの口にで言われるまでもなく理解している。海賊討伐をやっていた時も、類例に何度出くわしたか。調子に乗りやすい者程早死にするのである。

だが、不健康な悲壮感に身を浸していれば長生きできるものでもない。起床時に鏡を見た時に、死相らしきものは何も浮かんでいなかった。それだけで今日を生き残る資格を得た気がする。それで充分なのだ。

——出撃の時はまだか？

じりじりと待ちわびていると、「翔龍」飛行長が各自に「戦隊司令官が貴様たちに訓示をくださるそうだ」との達しを出した。皆が弾かれたように駆け出す。同業者の成功者と見なされている英は、戦船宮英治元帥の娘である事を差し引いても、航空兵の注目を浴びやすい。その彼女が海軍伝統の出撃前の見送り、そこに言葉を添えてくれるなら、皆が聴きたいだろう。

「義姉上は何を言うつもりなのかな？」

大体の予想はついてはいるが、やはり気になる美御だった。彼も駆けていく者たちの中に加わった。

飛行甲板上に整列する搭乗員らを前にした英は、姿勢を正して彼らの顔を一瞥した。飛行服に身を固めた一同は、身じろぎもせず、自分たちの司令官の顔を見つめている。この中の何名かは、確実に不帰の人となり、瑞穂皇国の軍人墓地——御霊（みたま）神家に葬られる事になるのだ。訓練と実戦を重ねてきた精鋭と言えども、その世の理（ことわり）からは無縁ではられない。

そんな非情な現実に、英は束の間だが思いを馳せた。艦戦に一名。艦爆に二名。艦攻に三名。一気撃墜される度に、それだけの人間がほぼ確実に戦死してしまう。後年に開発される事になる噴進式（ジェット）戦闘機などとは異なり、レシプロ機は搭乗員の生存率が低い。何しろ被弾時に緊急脱出できる装置など開発されておらず、搭乗員が自主的に風防（キャノピー）を開けて飛び出し、落下傘を慌てて開く必要があるのだ。

それでも、脱出に成功しさえすれば、撃墜されても助かる確率は零ではないだろう。そう問いかける声が素人からならありそうだが、英のように戦闘機搭乗員と航空部隊の指揮官を若いうちに兼任した人間だと、

「海面に不時着したところで、近くに蜻蛉釣りをしてくれる駆逐艦か友軍の潜水艦がない限り、

そのうちに海没するか鮫や鱧（ふか）に喰われるのが落ちだ。陸上での防空戦闘なら撃墜された飛行士の少なからずが生命を拾えるが、艦隊航空戦だと単なる直掩任務ですら、撃墜されると母艦と終（つい）の別れになる確率が高い」

そう結論づけてしまう。知恵の回る者にありがちな、どこか投げやりな発想——粘りがいない者の主張だとも言えるが、技術的な制約は一個人の思いやりでどうにか出来るものではなく、優秀ではあれども十全の神ではない英は、墜落機の搭乗員を救う術が今のところ殆どないのと思うと、胸が痛んでしまう。

「航空部隊の指揮官は、頭のネジを何本か飛ばした奴か、想像力を敢えて鈍らせられる輩でないと務まらない」

これはとある軍事評論家の主張だが、英はこの場合は的中していると思う。航空機搭乗員の顔を見る度に、そいつの親兄弟や妻子の姿を想像してしまう者には、航空部隊司令官は出来ない。戦艦部隊であれば、自らが先頭を切り進む事によって、その罪悪感を幾らかでも軽減できるが、航空部隊だと守備も攻撃も全て部下任せになる。司令官に出来るのは、地下防空壕で爆撃音に怯えながら指揮を執るか、あるいは通信室に詰めたまま攻撃の正否を耳にするかだけとなれば、耐えられない者がいても何ら不思議はない。

英は部下の死に意味を持たせる事に関心を向ける事により精神面での打撃を軽減させた。どのみち誰かが指揮を執らねばならないのだ。それならば自分が、被害を最小限に抑えつつ、成果を最大限に得られるようにするまでだ。

二航戦が送り出す攻撃隊の内訳は、戦闘機・爆撃機・攻撃機が各四〇機ずつ。単純計算で二四〇人。二四〇名の人命は、一億人いる国民の生命財産に比べれば廉価販売品に等しいのか？

それは耳にする者によって意見が異なるだろうな——英は僅かな間、罪悪感と向き合った後、思考を切り替えた。どんな世の中でも他人に死を強要して恥じないどころか、むしろ胸を張る人種がいるものだ。少なくとも私は陣頭で指揮を執る。責任からは逃げない。彼女は徐に口を開いた。

「諸君らの攻撃目標は空母である。友軍の転進及び民間人の退避に際し最も邪魔な存在は空母だからだ！」

叩きつけるような物言い。これは不利な状況を誤魔化す時に、指揮官が屢々（しばしば）用いるものだ。弱気である姿を部下に見せるよりかは、多少過激な言動をして、そちらに注目を寄せる方が好ましいとの判断による。

ただし、英のこの命令に関しては、瑞穂海軍の従来常識からすれば、飛行士たちの動揺を誘うには充分だった。海軍航空隊は戦艦を第一目標に定め、いつか自分たちの手で敵戦艦を海の藻屑に変える日を夢見て訓練に励んできた。

それを今になり目標変更を通達されて、はいそうですかと即座に納得できる訳はない。いきなり自分たちの存在意義を否定されたようなものだからだ。とりわけ艦攻隊の面々は強い衝撃を受けていた。ざわめきが生じる。

「静粛（せいしゆく）に！」

英の傍らに立つ紅葉が、彼らを制した。騒ぎは拡がる前に鎮火する。それを見てから英は続

けた。

「低速な輸送船にとり最大の脅威は、戦艦ではなくむしろ空母である。諸君らも承知の通り、索敵能力及び攻撃射程は空母の方が戦艦よりも遙かに長く優れている。そこを考慮した上で、私は一撃必殺の攻撃を敵空母に仕掛けたい。

日頃、戦艦を最大目標に定めてきた諸君らからすれば不満はあるだろう。私も戦闘機搭乗員として勤務した経験のある身だから、それは重々承知している。だが、今回の作戦目標は『敵艦隊の撃滅』ではない。『友軍の転進及び民間人の退避に必要とされる時間を稼ぐ事』だ。どうか協力して欲しい」

英は飛行士たちの顔を真直ぐ見据えた。彼女は他者、とりわけ多人数への語りかけを行う時、全身から一種独特の雰囲気を出す。人々はそんな彼女と正面から対していると、無茶な事を言われても、多分何とかなるだろう——とか、やらねばならないとの義務感を覚えたりするのだ。

それは大衆扇動を得意とする政治家、あるいは信者を急速に増やした新興宗教の教祖に必要とされる才能なのかも知れない。少なくとも扇動家（アジテーター）を気取る者ならば絶対に必須とされる項目だ。

英はそれを意識せずに、演出に頼らずに出来た。「他人に生命を捨てさせられる人種」とは、天性の素質を必要とするとされるが、彼女はその用例見本なのかも知れない。自分を強く慕い、心から自分のために戦う事を誓った者らから先に死んでいくのは、心苦しき以上の何かがあるのだが。

「空母以外の艦は」誰かが質問した。「極力無視せよと仰るのですか？」

「爆弾や魚雷の数には限りがある。戦艦や巡洋艦を何隻か撃沈破しても作戦目標を達成できそうにない以上、他の艦は可能な限り無視してくれ」

「敵は上陸船団を随伴していると聴きましたが」

「そちらは七航戦が攻撃する」

爬間諸島近海にいる友軍潜水艦が寄越した索敵情報によれば、敵は機動部隊の他に、輸送船団護衛用の艦隊まで用意している。そちらは防空用の護衛空母と旧式戦艦が各四隻ずつのようだが、こちらの手持ち戦艦は零だ。正面から砲戦を挑んでどうにかなる相手ではない。

ただし攻撃は可能だ。二航戦が敵機動部隊を叩き、七航戦所属機が輸送船団護衛艦隊を攻撃する。

戦力の分散は、通常なら戒められるところだ。ただでさえ劣勢な側が二手に分かれて行動するなど、各個撃破される最大要因となりかねない。しかし保有機の性能が思い切り不均衡な第一東遣艦隊としては、全金属製航空機より劣速かつ脆弱な複葉機——九五式艦上攻撃機「烈山」と「紫風」を共に行動させるなど、出来る相談ではない。敵艦隊に到達するまでに時間がかかりすぎる。戦場で必要とされるものの最右翼が時間の節約である事を思えば、待機させるか別用途に用いるしかない。

「清風」をあっさり撃破した敵艦上戦闘機——4号艦上戦闘機と五分に渡り合えるのは、恐らく「紫風」だけだという現実も、こうした措置に大きく作用していた。敵にしても護衛空母に新鋭艦上機を積み込む余裕があるとは思えず、2号艦上戦闘機ならば「清風」で充分に相手取れる

要するに強者に強者を、弱者に弱者をぶつける戦術なのだが、これが計算通り進むという保証はない。空母以外の艦を無視すれば、攻撃隊が対空砲火により受ける被害は増すだろうし、そもそも敵直掩機の網を無事にくぐり抜け、敵艦隊上空に辿り着けるのか、と問われれば、英とて「確実に」とは言えないのである。

「承知しました」

質問者が引き下がったのを視て、英は改めて周囲に問いかけた。「他に質問はないか？」  
疑問があるのなら今のうちに訊ねろ、答えてやる――との意を込めたもの。しかし、もう全員が覚悟を固めたのか、空母を第一攻撃目標とする事を納得したのか、再度の質問はなかった。  
「質問はないようだな。宜しい。では攻撃隊の発艦を開始しよう。諸君、戦争の時間だよ」

## 2

航空母艦は艦載機を発艦させるのに際し、風上に立つ必要がある。正規空母でも二〇〇間程の長さしかない飛行甲板を用いて石単位のを飛ばすのだ。風に逆らえばどうなるかは、改めて説明するまでもない。

第二航空戦隊を形成する二隻の空母――「翔龍」「碧龍」は、その風上を二五航里の速力で直進していた。これにより合成風力が得られ、発艦の準備が整うのだ。

飛行甲板には、発艦士官が青い旗を構えて立っていた。彼が手にしている青旗を振り下ろした時、待望の発艦が開始されるのだ。発艦は身軽な艦載機が最初に行く。飛行甲板の中頃から艦首までを駆け抜けて飛び立つ。

今まさにその瞬間が訪れた。

「翔龍」戦闘機隊隊長――喜連川兼基（きつれがわかねもと）少佐が先陣を切る。彼は愛機を徐々に加速させて前へと進む。

緊張の時。誰もが無事に発艦が済む事を期待している。橋道洋上での発艦は、熟練搭乗員であれば朝飯前の仕事だと言い切れない部分がある。突如高波が飛行甲板に襲いかかり、発艦直前の艦載機が海に呑まれた、との事例は数多い。

果たしてどうなるか――皆が固唾を呑む中、喜連川少佐は危なげなく発艦を成功させた。懸念されていた高波もなく、本人も持ち前の技量を遺憾なく発揮できたようだ。

続いて、彼が直率する部下たち――「翔龍」戦闘機隊第一中隊が発艦を開始する。彼らもまた手練れ揃いだ。これは正規空母に配属される飛行士に共通した項目だが、実戦経験者ばかりだ。単なる訓練の勇者とは違う。

瑞穂海軍は一〇機で一個中隊を編成する。それが三個か四個合わされば大隊となる。英が今回攻撃隊の護衛として付随させる戦闘機は、「翔龍」「碧龍」から二個中隊ずつだ。内訳を言えば「翔龍」戦闘機隊第一～第二中隊、「碧龍」戦闘機隊第三～第四中隊が参加する。

「翔龍」戦闘機隊第一中隊が発艦を終えると、続いて第二中隊の出番となる。美御の隊だ。彼もまた実戦で研磨を続けてきた撃墜王だから手際が良い。九機の部下の先頭に立ち、素早く発艦――空中集合の姿勢をとる。

二〇分程かけて集合空域に出る。高度数千間から見下ろせば、全長が二三〇間近い航空母艦も



燐寸（まっち）箱同然の大きさに見える。そこから続く発艦風景が、まるで指人形を用いた人形劇のようだ。

戦闘機隊が留守番役を残して全機発艦を終えた頃、艦爆隊もまた発進を始めた。「赤星」――固定脚の外見は古めかしいが、瑞穂暦二〇〇一年時に於いては世界最高水準の艦上爆撃機である。最高速度三八〇里。爆弾搭載量は二五〇斤爆弾一発または六〇斤爆弾四発。武装七・七ミリ機首固定機銃二丁に七・七ミリ機尾旋回機銃一丁。

彼らは戦闘機隊とは違い、二五番――二五〇斤徹甲爆弾という大荷物を抱えている。成人男性三人分はある代物だ。それだけに発艦には気を遣う。一步間違えれば爆弾を抱えたまま海面に激突し、そこが墓場になりかねない。

艦爆隊を率いるのは、「碧龍」艦爆隊長の仁科信盛（にしなのぶもり）少佐だ。彼は地上攻撃と対艦攻撃の双方を海賊討伐戦の課程で幾度もこなしてきた熟練搭乗員の一人で、「燐寸箱にでも爆弾を命中させられる男」だと言われていた。

その仁科少佐が先頭を切り進む。千歳飴（ちとせあめ）を連想させる色に塗装された「赤星」が、僅かな明かりに照らされた――派手に探照灯などを使うと、敵潜水艦を呼び寄せる可能性があるため、それは出来ない――飛行甲板を徐々に加速しながら駆けていく。

そして発艦。彼らもまた一機また一機と順調に飛び立つ。波の妨害もなく、風向きの急変もない。順調を絵に描いたような光景が続く。

次は本命――一九七式艦上攻撃機「陣山」の番だ。

彼らは全機が八〇〇斤航空魚雷――戦艦の砲弾に匹敵する重量を持つ代物を装備している。「陣山」もまた最高速度は三八〇里。武装も七・七ミリ機首固定機銃二丁に七・七ミリ機尾旋回機銃一丁。ただし搭載可能兵器に関しては種類が豊富だ。八〇〇斤航空魚雷一本／八〇〇斤徹甲爆弾一発／二五〇斤徹甲爆弾三発／六〇斤爆弾一二発――

対艦／対地攻撃を雷撃あるいは水平爆撃で行える。急降下という独特の攻撃法を要求される艦爆とは異なり、機体はさほど頑丈ではないが、搭乗員が三人いるために偵察や対潜攻撃などにも使用できるため、使用用途の多い、便利な航空機と言える。

攻撃隊の中で最大の重量物を抱える彼らの発艦風景は、搭乗員が飛行時間一〇〇〇時間に達する者でも、一種独特の緊張感を周囲に漂わせる。何しろ「無理矢理発艦している」ものだから、飛行甲板の端から端まで駆け抜けても助走距離が足りないように見えるのだ。

今回もその例に漏れず、攻撃隊総隊長を兼ねる艦攻隊隊長――千歳睦月（ちとせむつき）少佐にしても、一瞬機体を沈み込ませるような感じで発艦。周りが「墜落したか!？」と身を強張らせる中、飛翔を始めた。

魚雷は攻撃力が大きい。駆逐艦は言うに及ばず、巡洋艦ですら一本の命中で大破――当たり所によれば撃沈できる。敵機動部隊の中核をなすブラン・ラパス級正規空母は、満載排水量が三万石を超える、戦艦並みの艦だが、魚雷を当てれば艦速が低下し、母艦としての機能を喪失する。

英の狙いはそこだ。敵空母の飛行甲板を爆撃破壊するか合成風力を造るのを不可能にして母艦機能を奪う。向こうにも優秀な応急修理班がいるだろうが、数日間敵空母を活動不能にすれば、それで目的は達せられる。

戦艦に関しては、新旧合わせて未だ七隻が健在——という敵の事情を鑑みて、無視する他ないと結論づけていた。あれもこれもと欲張ると全てが中途半端になる。今回は敵の航空戦力を封殺して、それでよしとすべきなのだ——との割り切りが求められた。

攻撃隊主力発艦に際し、幸運の女神は英に小さな微笑みを向けたようだった。幸いにして発艦に失敗して喪われた機体や搭乗員はなく、二航戦から一二〇機、七航戦から六八機の艦載機が無事に飛び立った。

改めて説明するまでもないが、発艦直前という図は、航空母艦にとり最も危険な瞬間なのだ。爆弾や魚雷で満艦飾（まんかんしょく）状態の飛行甲板に爆弾の一発でも直撃すれば、たちまち全艦火の海——そのまま轟沈しかねないし、懐にまで忍び寄ってきた敵潜水艦が一撃を見舞ってくれば、やはり結果は同じになる。

四隻の空母から発進した一八八機の攻撃隊は、既にその危険をかいくぐった幸運児ばかりだという事になる。空母を「可燃物の塊」だと称して忌み嫌う者の意見も、発艦に際し生じる、あのどうしようもない緊張感が一時間の長きにわたり続くものだとの実情を聴けば、納得も同意も出来るだろう。

艦攻まで飛び立たせた二航戦の二隻は、さてそれで仕事を全て終えたのかと言えば、そうでもなかった。

昇降機から別の機体が上げられてきた。

直掩機の発艦？

違う。都合三機飛行甲板に並べられた航空機は、戦闘機ではなかった。単なる艦爆や艦攻でもない。

これは五機ある予備機、そのうちの三機を組み立てて準備した特殊航空機なのだ。

二式艦上爆撃機——型。

型番だけを言えばそうなる。来年度から正式採用される事が決定している艦爆だ。「赤星」の後を継いで主力艦上爆撃機となるもので、愛称は「瑞星（ずいせい）」である。惑星海球が所属する恒星系の二番惑星の名前をそのまま頂戴した（『赤星』は四番惑星の名で、古い神話だと戦いの神を指すものだ。『瑞星』は同じ神話の中で美の女神を指す）。

「瑞星」は「紫風」に匹敵する速力——最高時速五四四里——を備え、機首に一二・七ミリ固定機銃二丁を装備する事から、「戦闘機の護衛がいない艦爆」との異名を持つ。これは単なる型録上の数値（カタログスペック）によるものではなく、この「瑞星」——型が高速偵察機として爬間諸島基地航空隊にも何機か配属されており、その搭乗員は何度も4号艦上戦闘機を振り切り、生還してきた。

「事実に勝る説得はなし」

とは、理論に溺（おぼ）れたがる秀才参謀を戒める意味での格言なのだが、開発者の設計理念をこれ程忠実に守ろうとした航空機は少なく、瑞穂暦二〇〇一年時に於いて「最速」を名乗って恥じない艦爆なのだった。

ただし、今回の使用法は爆撃ではない。

どれ程優れた航空機でも、僅か三機では戦局に決定的な影響を与えるのは物理的に不可能で

ある。一発の重量が数石にも及ぶ特殊爆弾でもあれば、また話は変わるのかも知れないが、発動機出力を「赤星」より大幅に増した「瑞星」でも、抱えられる爆弾は五〇〇斤が限度だ。

では何に用いるのかと言えば、空技廠が開発した特殊装置——分身装置の力を発揮するためである。

これは瑞穂に昔からいる異能力者たち——一般には超能力、国によれば魔法とも称されるもの——が持つ力の一つ、「分身作成」に示唆（ヒント）を得て開発された。

分身は盲目の人間でもない限り、やられると必ず戸惑う能力である。目の前にいる人間が突然二人になれば、誰でも驚く。昔語りに出てくる忍者に至ると、二人どころか一度に数十人に分身し、一斉に標的に襲いかかった——との話もある。

一人がいきなり分隊に匹敵する数になるのなら、そいつは最強の暗殺者だ。そんな奴に忍び込まれたら、まず防ぎようがないのではないかと？ そう思う者は多いが、この能力にも欠点がある。

それは術者の体力を実行中は大幅に削るため、長時間使えないのだ。暗殺者が標的を仕留めた途端に、疲労困憊で昏倒していたら、洒落にならない。どんな能力も生還するために用いるべきだ、との常識に従えば、術の乱用は死へと至る麻薬に似ている。

「瑞星」に積まれているのは、その「分身作成」の能力を機械的に再現するものである。早い話、一機を五〇機程度に分裂させ、それで敵の目を引きつけるのだ。分身は幻（まぼろし）ではなく実体を持つから、敵が対空電探を装備していようとも、必ず引っかかる。いや「電子の眼」を持つ分、余計に詐術（トリック）にかかりやすくなるだろう。彼らはまさか、電探にはっきりと映り、見張員が目視確認した航空機を偽物だと一目で見抜ける千里眼を用意していないであろうから。

今回投入される特殊改造機は三機だから、一五〇機の偽物（ダミー）が作れる計算だ。彼らが一般的な艦載機の進入高度——高度六〇〇〇間で敵艦隊めがけて移動すれば、彼らは一定の数の戦闘機を、防御のために残さざるを得ない。場合によればそちらに直掩機の主力を差し向け、機動部隊上空がもぬけの殻になるかも知れない。

ただし、それは理想だ。英は新型機にありがちな問題——整備員が扱いに慣れていない発動機の調整に失敗し、発動機故障による引き返し、あるいは中途での墜落——を想定し、過剰な期待はかけていない。何しろ敵は第一艦隊を屠った後は、ひたすら航空機との戦闘を続けている。空撃に対し過敏になっているだろうし、まさか敵地のど真ん中で警戒態勢を解いているとは思えぬ。

敵機動部隊の周辺には、軍事的常識から考えて、警戒用の駆逐艦が複数配置されているだろう。主力攻撃隊を敵の目を誤魔化すために低空進行させても、恐らく敵空母の姿を拝む前に、彼らに発見されてしまう。

「正規空母がもう一隻、または軽空母が二隻手許にあれば、哨戒（ピケット）艦をまず先に潰させるのだが」

英は奇襲が成功しても、その途中から強襲に移り変わるのを想像して、歯噛みした。もし七航戦の搭載機が二航戦と同じものであれば、彼女は輸送船団護衛艦隊の攻撃を取りやめ、敵機動部

隊一本に絞ったかも知れない。

「戦力を集中させて目標は単一に」

それが軍事の原則なのだから、不足気味な戦力を活用して、無茶な作戦をやらされる事になった彼女の苦悩はどれ程か。指揮する者に最善が見えていても、それが必ず実行に移せる訳ではないのは、軍隊も娑(しゃ)娑(ば)も同じだが。

無い物ねだりをしても始まらない。とにかく賽は投げられたのだ。後は送り出した者たちの奮闘と幸運を祈るしかない。そこは攻撃に際し自らを最も危険な場所に置く戦艦部隊の司令官とは違う。

消えてゆく航空機の後ろ姿を見やりながら帽子を振っていた英は、そのあたりを意識しつつ、「……頼んだぞ」

そうぼつりと呟いた。彼女の意識の中を占めているものが何なのか、知る者はいなかった。

### 3

西部帝家艦隊は機動部隊と戦艦部隊を合流させていた。敵艦隊との砲雷撃戦で戦力の半数を撃沈破された戦艦部隊が、無傷な機動部隊に吸収された形だが、戦艦部隊司令官であるジスカール＝ポール・ド＝デスタン中将は不満らしい不満を抱いていない。あの戦いでは機動部隊が効果的な支援をしてくれたから勝利を収められたのだと彼は認めているからだ。もし単独で交戦を続けていれば、損害は倍になり戦果は半分以下にまで落ち込んだかも知れない。そうなれば自分は後世の歴史に敗将として汚名を残していたのだ。神様、勝たせてくれて有難(ありがと)うございました。

一月三〇日現在、デスタンは三隻にまで数を減じた戦艦群を率い、対空防御陣形——輪形陣の内側にいる。航空母艦の群を直接護る位置なのだが、戦闘機隊と周囲を取り巻く巡洋艦・駆逐艦群に前進を阻まれて撃退される敵機ばかりで、彼らは針鼠(はりねずみ)の如く装備した対空火器を使用する機会に恵まれていない。

「もう何日かすれば、海兵隊(マラン)を上陸させられるだろうか——」

偵察機からの報告によれば、敵は親夫島の西海岸から慌てふためいて脱出しつつあるらしい。大型客船は固より、旧式の戦闘艦艇や個人所有の遊覧船とおぼしきものまで投入されている大脱出劇だ。守備隊や民間人が総出で逃げ出してしまえば、無人の島は我らのものとなる。

西部帝家領内にいる住民の多くがそうであるように、デスタンはガリヤ系の人間だ。先祖の中には爵位持ちやガリヤ騎士(シュヴァリエ)が何人か含まれており、彼も一種の騎士道精神を備えている。それは民間人を標的とした無用な殺戮をしないというもので、この考えは西部帝家艦隊司令長官と共通している。

「瑞穂人が逃げ出したいのであれば、放置しておけ。直にこの島々は我らの新領土となる。住民は移民を募り集めれば済む話だ。我らの開拓者精神(フロンティア・スピリット)が橋道洋にまで及ぶと考えれば良い」

これを人道主義と見るのか、情勢判断の甘さと解釈するかで、評価が分かれるところであろう。聯合帝国の海軍関係者は、一般的に敵国輸送船の攻撃に熱心ではなく、とりわけ大型戦闘艦艇——戦艦や空母を指揮する者になると、

「通商破壊など潜水艦（ドンガメ）の仕事だ。戦艦に代表される主力艦の攻撃目標は、軍艦だけで良い」

そう公言して憚らなかった。これは瑞穂海軍のように、大規模な商船隊を護るために発達した海軍と、敵艦隊を撃滅するためだけに組織された海軍との違いでもあった。

両者の違いとは何か？ それは前者が「輸送船を攻撃してくる海賊や敵艦隊を排除するために必要とされる戦力を整えた」——つまりは経済的な裏付けのある軍事組織なのに対し、後者が「敵艦隊がいるから、その対抗上必要とされた結果生まれたため、護るべき商船隊が実はいない」——経済的な裏付けがない存在だった。

海軍が本来組織されるのは、海上交通線の維持である事を思えば、後者はまさに本末転倒な組織であった。戦のための戦を行う軍隊。愚行の象徴だ。

前者の存在は構わない。海外貿易で喰っている島国が、海洋通商路を維持できず、輸送船を片端から沈められ、自国沿岸部の周辺を常に敵艦隊がうろついているような有様になったら、国が滅びてしまうからだ。海軍の維持や拡大に必要とされる予算は、国民に対しても「安全保障税」と主張できるし、経済的な裏付けがあるのなら、組織を維持するのにも無理がない。

だが、後者になると海軍が「単なる金喰虫（かねくいむし）」になりかねない。「戦艦や空母でも民間造船会社に建造を発注する事があるのだから、海軍の発展拡大は、公共事業の一環である」との言い訳も出来るが、各種戦闘艦艇が資源や加工製品を国に運び込むはずもなく、気がつけば「戦争もしていないのに、国家予算の大半が軍事費に消えている」との莫迦げた事態を引き起こす原因になりかねないのである。

そういう意味に於いて、西部帝家艦隊がしている行動——敵輸送船団の放置は、彼らのいびつな生き立ちを物語るものの一つだと断言して良い。彼らに瑞穂海軍のような性質——行き過ぎた先軍主義が、国家自体を食い潰す可能性を秘めた、危険な遊戯だとの認識——が少しでもあれば、瑞穂側が危惧したように、軍民共に敵の虜となるか、海の藻屑と消えていただろう。

であるならば、英が企図した、「友軍や民間人が脱出するのに必要な時間を、危険を承知で稼ぐ」という行為は、何のために行われるのであろう？ これは瑞穂海軍の見当違い——敵もまた輸送船を積極的に狙い、こちらの人的資源を削りに来るだろう、との思い込みがそうさせたとしか言いようがない。

当たり前の話だが、どの組織にもそれぞれの判断基準——物差（ものさし）がある。敵が用いている物差が判らなければ、仕方がないので自軍のそれを基準にして敵を計る。そしてこのぐらいだろうと見当を付ける。

だが、世の中には「敵が自軍と違う物差を用いている事を考えようともしない輩」が少なからずいるのである。

彼らを一概に莫迦とは言い切れない。なぜなら、彼らが用いている物差の方が正しく、敵の方が明らかに間違っている事が、往々（おうおう）にしてあるからだ。

「こちらの方が正しいのだから、敵もそうするはず」

との認識は、一種の思考放棄とも言えたが、まさか敵の方が非常識で、誰がどう見ても間違った方向に向かい突進する性癖を持つ——などと認めて作戦を組むなど、流石に出来ない。それで

は敵を舐めすぎだ（補給を伝統的に軽視し、現地調達を重視する軍隊は実在し、彼らに対しては焦土戦術を用いるべし——と対策が確立している相手も、ごく稀に存在するが）。

瑞穂海軍総司令部の危惧や、英が立てた作戦にしても、そうした互いの認識の違い——単なる民族性の垣根を越えた、根本的な相違部分——が巻き起こした、一種の喜劇的なものだと、ある意味で言えた。

何しろ敵が攻撃する素振りさえ見せないものの安全を心配し、更なる危険を冒そうというのだから、聯合帝国側が見ればおかしくて吹き出すかも知れない。

しかし戦には相手がある以上、認識の違いは必ず生じるものであり、戦争という巨大な機械が人間という歯車と共に動き出せば、それはより明確に、悲劇を伴って現れる。

機動部隊の周辺を監視する哨戒駆逐艦から悲鳴じみた通報が届いた時、デスタンはそれを味わう事になった。彼は午前五時を迎え、白み始めた空を、座乗艦——戦艦「ブルー・リオン」の第一艦橋で見つめていた際、伝令に事態の急変を報された。

「北方から一五〇機程の敵機が接近中だと？」

伝令から口頭で伝えられた話を、デスタンは鸚鵡返（おうむがえ）しする。俄には信じかねたのだ。爬間諸島の敵基地航空隊は、ほぼ壊滅状態だ。御道栄方面より飛来する重爆隊にしても、空振りをするのが嫌なのか、一度に纏めてくる事はないし、それだけの数の敵機が、何処に潜んでいたのだと思う。

「まさか、敵機動部隊が近海に……？」

参謀長——ピエール・ルブラン中佐が呟いた。近隣の基地航空隊が、今まで戦力を出し惜しみしてきたとは考えられず、その推測は的を射ていると言えた。

「だとすれば面倒になるな」

ルブランの想像を真実のものと受け止めたデスタンは、眉を顰めた。電探射撃の専門家で、名うての大艦巨砲主義者として知られる彼にしても、航空機の大軍に一度に襲いかかれて良い気分はしない。

それに航空機が戦艦を沈められるか、という長年の論争についても、先日に出着がついてしまった。砲雷撃戦の最中で、相手が対空防御陣形を組んでいなかった事を割り引いても、航空機が装備可能な爆弾や魚雷で、戦艦は沈められるのだ。

デスタンは自国の戦艦の防御力を信じているが、何かの拍子に舵を破壊されたら行動不能になるのは間違いがなく、相手が機動部隊所属機——純然たる艦載機乗りだとすれば、彼らの練度も相応なものだろうから、接近されると厄介（やっかい）だ。

「ユリーシア陛下——総司令官は何と？」

「予定していた対地攻撃を中止し、取り敢えず防御に徹するとの事です」伝令は答えた。「各艦に対空警戒をするようにとの命令が出ております」

「妥当な線だな」

航空母艦は飛行甲板に爆弾や魚雷を抱えた航空機を並べている時が、一番脆い。もしそこに一発でも爆弾が命中すれば——敵戦闘機が機銃掃射でも仕掛けてくれば、たちまちそこは火の海だ。爆弾・魚雷庫や航空機用油など、可燃物を満載しているだけに、一度火がつけばそのまま爆沈

しかねない。

それに敵機の群を迎撃するとなれば、どうしても戦闘機が必要になる。対空戦闘の戦果――敵機撃墜は、その殆どが直掩機の迎撃によるものだとの実情を思えば、尚更に。

敵機の邀撃に戦闘機を使えば、当然ながら攻撃隊の護衛に使える艦戦は減少する。爬間諸島の基地航空隊は壊滅状態にあるため、艦爆や艦攻を裸で出撃させても大丈夫かも知れないが、戦場に絶対はない。僅か数機の戦闘機のせいで攻撃側が大損害を被ったとの事例も少なからずある。ユリーシアが攻撃を取りやめて防御に専念するとの判断を下したのも、そうした展開になるのを嫌ったからだろう。

三日前の海戦と対地攻撃で艦載機隊は消耗を重ねている。本国には交代制（ローテーション）を組んで出番を待つ搭乗員が多数いるが、彼らを航空機と共に直ぐに呼び寄せられる魔法の壺（つぼ）など誰も持ち合わせていない以上、現有戦力は大事にせねばならない。遠征先で人的資源の消耗に気を向けず、異境の地を墓場にした者は、古代から多いのだ。

「それにしても一五〇機か」デスタンは脳内で素早く計算した。ブラン・ラパス級正規空母に搭載可能な航空機は、機種により上下するが、九〇機から一〇〇機まで載せられる。瑞穂人が保有する航空母艦の性能も似たようなものだとなれば、直掩機を除く全機を、一度に投入してきたと見るべきだろう。

「数は多いですが、所詮はヤープ共の航空機です。戦闘機か対空砲火で始末できるでしょう」「ヤープ」とは聯合帝国人が用いる瑞穂人の蔑称（べっしょう）である。意味合いは「小鬼（ゴブリン）」か「チビで狡賢（ずるがしこ）い奴」というものだ。これは瑞穂人の平均身長が彼らより一五センチ程低い事に起因する。

もっとも、聯合帝国人はヴリタニヤ人を「戦争機械（ウォー・マシン）」と呼ぶし、雑食家のガリヤ人を「蛙喰い（フロッキー）」と莫迦にしてもいるので、瑞穂人を特別に差別している訳ではないが。

「参謀長」デスタンは、能力は評価しているが、人種的偏見を有するルブランの人的資質は問題ありと見ている。ゆえに注意を促した。

「敵を『ヤープ』と呼ぶのはやめ給え。水兵たちが気軽に口にする罵詈雑言（スラング）なら構わんが、我々が人種的偏見を持ちだして、戦術眼を曇らせる訳にはいかん。つい先日の海戦でも無視できぬ損害を被った以上、彼らを侮るのは極めて危険な行為だよ」

「了解しました」不承不承との感じで、ルブランは頷いた。あれだけ数字に大差がついたのだから、敵はもう二度と立ち上がれないだろうと、彼は信じているから、司令官の言葉を慎重に過ぎると思っている。

そんな参謀長に一瞥を向けてから、デスタンは天道の光を浴びて黄金色に輝いている海面に視線を転じる。同時に、彼は違和感を覚えた。敵機動部隊は今更何をしに来たのだろうか？ 敵主力戦艦群は壊滅し、爬間諸島から叩き出された以上、彼らの役割――主力艦隊の支援は、もう果たす事の出来ない任務のはずだ。負けた戦場で更なる戦力を段階的につぎ込むなど、真実な戦略・戦術家のすることではあるまいに――

デスタンは敵の意図を掴みかねた。その彼の心理的状況とは関係なく事態は動く。各空母の艦

上で爆装した航空機が昇降機を用いて慌ただしく格納され、代わりに艦戦隊が飛び立ち始め、三隻にまで減じた戦艦群の上空を飛び越えていった。

4

「瑞星」一一型特殊改造機版とでも称すべき機体を操縦しているのは、「翔龍」予備機隊の三機だ。彼らは実験や訓練で何度も繰り返してきたように、「分身発生装置」を起動させ、周囲に一五〇機程の「分身」を造り上げていた。

「本当にこれで敵の目を欺(あざむ)けるんですかね？」

特殊部隊隊長機一一鏃(やじり)型編隊の先頭に位置する「瑞星」の後部座席に乗っている、姫寺明子(ひめでらあきこ)少尉が、操縦席にいる隊長一一岩淵紋蔵(いわぶちもんぞう)大尉に問いかけた。

「不安か？」部下の言葉に岩淵は応じた。彼は線の細い相方とは異なり、全身を筋肉の鎧に包んでおり、顔の半分を髭で覆われている熊のような男だ。航空部隊というハイカラなところにいるよりか、辺境の山奥で旅人相手に追い剥ぎでもしている方が似合いの強面(こわもて)一一と言えば、判り易からうか。

「はい。我々の任務は罔(おとり)一一本命の攻撃隊が、敵艦隊に到達できる確率を少しでも上げるための、ある種の捨石(すていし)だと理解はしておりますが」

「実験では、分身は電探にも映ったと聞いたぞ」

電探は水上艦隊よりも航空部隊の方で評価されていた。敵機の進入方向や高度が、彼我距離一〇〇里程の時に判明すれば、迎撃する時にかなり楽になるからだ。限られた戦力、その柔軟な活用は、どこの軍隊でも求められるものだ。

英が指揮する部隊一一二航戦の空母二隻と第三〇巡洋戦隊の防空重巡四隻にも、対空電探が装備されている。このため、防空能力は額面上よりも高い、との評価を受けている。

それだけに、岩淵は自分たちの機体が、機械の眼からも分身して見えるという事実を、頼もしく感じていた。電子の眼を欺く方法には、その他に欺瞞紙(チャフ)一一空鉄を薄く引き延ばしたものを空中に散布するという方法が考え出されたが、それだと確かに電探は真白になるが、複数の機体が高速で移動中のように見えず、「敵に誤った情報を与える」という意味では、彼らが操る機体の方が上だ。

もっとも、そのためだけに特殊改造機を制作・使用するというのは、明らかに費用対効果(コストパフォーマンス)が悪すぎる。空技廠という組織は、「技術の追求が前線部隊にもたらす悪夢を考慮しない部署」との顔を持つ事で知られるが、「技術追求のための実験。実戦試験をしてから量産するかどうかを決める」と言われてしまえば、反論できる者は少ない。何しろ軍隊も「お役所」一一官僚組織の一つなのだから。他所の部署が与えられた予算の中で何をしようが口を挟めないのだ。

「実験と実戦は文字に直すと一字違いですが、内容は大分異なりますよ」姫寺は抗議するように言った。「実験では事故以外で死ぬ奴はおりませんから」

「実戦なら戦死一一か。結構な話だ」

まるで他人事のように、岩淵は評した。科学的知識や技術を要求される航空部隊の面々は、己



の死でさえ自然現象の一つのように言う者が多い。それはいざ実戦となれば消耗率が高いために生まれた「乾いた悟り」なのか否か。

「敵艦へ急降下して死ぬのならまだしも」姫寺は元は艦爆の後部機銃員を務めていた。

「囧として敵機に追いかけて回されて撃墜されるなんて御免ですよ。それは本当に戦死なんですか？」

「囧もまた任務だ」岩淵は素気ない。年下の部下の泣き言に付き合うつもりはない――と態度や言葉で表す。

「そんな殺生な」

「……………」

文句を言う姫寺に、岩淵はそれ以上は応じず、前を見つめ続ける。実のところ、彼にしても自分に与えられた役割を全面的に納得して引き受けた訳ではない。

どのみち誰かが新型機の試験をやらねばならないし、空技廠の言う事が全て事実なら、戦史上に特筆されるべき存在になるから――と自分に言い聞かせている。

また、言い聞かせなければ、流石に隊長を引き受ける気にはなれなかったろう。戦闘機搭乗員出身の、艦隊司令官兼第二航空戦隊司令官――戦船英少将は、自分たちを無碍（むげ）には扱わなかったが。

――発動機が途中で止まらなければよいがな……。

岩淵は内心で呟いた。この「瑞星」が抱える問題は、特殊改造機である事だけではない。新型機にありがちな発動機の不調もまた、彼の悩みの種だ。

分身発生装置が何かの拍子に壊れても、発動機を全開にすれば敵機を振り切り生還できる確率は高い。何しろ「瑞星」はそこいらの戦闘機より速いのだ。しかし発動機がイカれてしまえば、そこまでだ。事故で喪われる機体が年間に直すとそれなりの数になる事を思えば、これは杞憂（きゆう）ではない。

仮に墜落前に落下傘で脱出できても、誰かが助けてくれるかどうかは判らない。近隣を哨戒活動中の味方潜水艦でもない限り、海没するか鮫の餌にされるのがおちだ。漂流生活を長らく続ける訳ではないから、苦しみが長引く心配がないのは、僅かな救いだが。

元から無茶を承知で始められた作戦である。後ろ向き（ネガティブ）な考えをし始めれば切りがない。航空部隊は常に死と隣り合わせであるから、勝つ事だけを考えるぐらいで丁度良いとの見方がある。岩淵は、普段はそれに賛成しているし、自分でもそうあるように心がけているのだが、はてさて今回はどうなるか――疑問を感じた。

そんな岩淵の眼に胡麻塩（ごましお）の如きものがちらほらと視え始めたのは、緊張感がもたらす幻影ではなかった。

「うん？」と呟いてから眼を凝らす。何度か瞬（しばたた）く。消えない。どうやら空技廠の連中は、おかしい我儘を通したが、彼らが求める理想――分身により敵を欺き、敵直掩機を引きつける――を叶えるのには成功したらしい。

――奴らもの見事に引っかかったようだな。だとすれば、攻撃隊が敵機の妨害を受ける事なく敵艦隊上空に到達したかも知れない。やったぞ！

岩淵は内心で快哉を叫んだ。囧役を命じられたとは言え、任務達成の高揚感とは無縁ではいられぬ。

だが、次の瞬間に現実に立ち向かう必要が生じた。敵はこちらを艦載機の大軍だと疑いなく信じている。つまり敵機は全力で来る。襲いかかってくる！

「姫寺！ 母艦に打電！」

「はい！」緊張に身を正した姫寺が顔を引き攣（つ）らせながら応じる。「内容は何と!？」

「『我、敵機ノ攻撃ヲ受ク!』」

戦場での情報の遣り取りは短い。伝える内容も単純明快な方が相手も悩まずに済む。長く複雑な命令や状況報告など、混乱の原因、その一つになるだけだ。

姫寺もそこは心得ている。彼女は言われた通り素早く母艦に現在状況を報せた。悲痛なる勝利の宣言——と言えば、自己陶醉が混じり気味な感じに聴こえるが、大嘘でもない。彼らは本来の自分たちの数、その数十倍の敵機を相手にせねばならないのだ。

「奴らに『瑞星』が単なる艦爆でないのを教えてやる」操縦桿を握る岩淵の顔には、悲壮感など欠片もない。戦闘が始まる前はあれこれ考えてしまったが、実際に敵と干戈を交える時は、妙に冷静になれた。

「気絶するなよ、姫寺！」

相方の返事も聴かずに、岩淵は愛機を加速させた。囧が自分たちの役割である以上、敵の目を引く行動をとらねばならない。何しろ分身発生装置は、機体とその搭乗員——つまりは自分たちの分身——は出せるが、武装や弾薬は無理だ。分身はつまり丸腰で、敵がそれにやがて気づくとしても、時間をかけさせねばならない。

愛機の急加速に姫寺は小さな悲鳴を上げたが、抗議も気絶もしなかった。操縦桿を握るのが隊長だからだけが理由ではない。結局のところ航空機の防御、その最大のものは速度だと認めているからだ。

どんな対空砲火も戦闘機も、当たらなければ恐ろしくはない。時速一〇〇〇里——音の速度に迫れる航空機を開発できれば、この時点であれば撃墜できるものなど皆無であろう。

接近しつつある敵機——4号艦上戦闘機の姿を意識しつつ、岩淵は同時に奇妙な事に気づいている。周りを飛んでいる俺の分身も、俺と同じような顔をしているのだろうか？ それとも個性があるのだろうか？

疑問は、僅かな間、脳裏を掠めただけだった。立ち向かわなければならない現実が、意識するよりも先に手を動かした。戦闘機を超える速度を出す愛機が、敵機の銃撃により形成される火(か)箭(せん)をくぐり抜けた時、彼は呵々大笑していた。

かつてない高揚と共に彼は叫んだ。

「我に追いつく敵機なしだ！」

一五〇機の敵機が急速接近中との報告を受けた機動部隊司令部の反応は迅速だった。彼らは手持ち戦闘機の過半を即座に差し向け、敵が自艦隊上空に到達する前に撃滅する事を目論んだのだ。一問でも離れた場所で敵を墜とした方が艦隊の安全を保てる——との理屈は正しいが、五〇機

を超える戦闘機を一度に送り出したために、艦隊上空の直接的な防御力が低下するという別の問題を引き起こしていた。しかしそれも予備機の投入で穴を埋められるとの試算が出ていた。だが、世の中は計算だけでは回らない。

「あれとは別に敵機の群がいるだろ!？」

新たなる凶報――それを受けた機動部隊司令部の面々は、仰け反らんばかりに驚いた。敵が負け戦の最中に、戦力を逐次投入してきただけで、その正気を疑ったのに、さらに一〇〇機以上の艦載機が忍び寄りつつあると言われたら、何と返してよいのか判らなくなる。

「哨戒行動中の駆逐艦からの報せです」通信参謀――ルイ・オーギュスト・ポワソンシャー中佐が告げた。「一〇〇機前後の戦爆聯合が、当方に向かいつつあるようです。彼らは高度をギリギリまで下げていたようで、肉眼で確認するまで位置を掴めませんでした」

「それは間違いがない話か？」

「爆音高らかに接近中の敵機を何故に見間違えましょうか。翼と胴体に瑞穂軍機である印――赤丸をつけていたそうですし」ポワソンシャーは最後通達をするように告げた。「彼らは来ます」

場の空気が凍り付いた。一体奴らは何隻の航空母艦を前線投入してきたのだ？ 敵の戦力集結を警戒し、早期開戦に踏み切ったのに、その努力が水泡に帰しそうな感じがしてきた。

「諸君、狼狽えるな。動じても始まん」ユリーシアが動揺しがちな部下に対し告げた。もはや残敵掃討レベルの戦闘が数日続くだけだろうと考えていたのは彼女も同じだが、総司令官が周章狼狽（しゅうしょうろうばい）する訳にはゆかぬ。

「手許に残っている戦闘機を、即座に迎撃に向かわせるんだ。一〇〇機以上の敵機に突入されると、何が起きるか判らん。直掩隊には何があろうとも敵の前進を止めとの通達を出すんだ」

「何があろうとも――ですか？」ポワソンシャーが訊いた。彼の姓はガリヤ語で「鯰（なまず）」を意味するものだが、その鯰が地震を感知した時のような顔つきになっている。

「そうだ。爆装を解除した艦爆や艦攻も飛ばす。相手が同じ艦爆艦攻であれば、充分迎撃できるはずだ」

「しかし姫、無茶です」アドラーが異論を挟んだ。「彼らは雷爆撃の訓練は受けていますが、邀撃機（インターセプター）の真似事は、訓練ですら経験した事がないかと」

「無茶は承知だ」ユリーシアはアドラーが立場上反論しなければならなかったのを理解している。

「だが、やるんだ。もう我々の手許には、戦闘機は三〇機程しかない。一機が三機を相手取るなど、机上の空論でも難しい。撃墜できなくても構わない。銃撃で相手を怯ませ、射点をずらす事ぐらいは可能なはずだ」

「やむを得ませんか」

「体当たりで撃墜しろと言っているのではない」

生還できる確率が絶望的に低い任務は、一般的に「決死作戦」と呼ばれる。志願者のみで構成された特殊部隊が活躍する様は、活動写真の制作者に格好の題材を与えてきた。

しかし、初めから作戦参加者の生還を前提にしていないものは、「必死作戦」という。文字に直せば僅かに一字違うだけだが、九死に一生を得られる「決死」と十死零生である「必死」では

従事せねばならない者らの心構えが変わる。

艦爆で艦爆を撃墜しろと言うユリーシアの命令——命じた側でさえ厳しいかと思うものは、そういう視点に立てば、「必死」の部類に入るだろう。来襲する敵攻撃隊には、当然ながら多数の護衛戦闘機が付随しているだろうが、彼らは当方の直掩機との戦闘に忙しいはずで、まさか「艦爆対艦爆の空戦」に参与している暇はあるまい。

艦爆搭乗員が慣れぬ空戦に興奮し、味方艦の対空射撃領域にまで入り、同士討（どうしうち）で撃墜される危険はあるが、そちらは「自己責任」だろう。軍隊である以上、全員の身の安全、その保証は出来ないし、陸戦でも伝達の間違いや砲兵隊司令官の錯誤などで、味方の砲弾で吹き飛ばされる者が少なくない事を思えば、海空戦で今更何を言えようか。

「出撃命令を出すんだ。敵は直ぐに来るぞ」

総司令官が犠牲を承知で命令している以上、参謀陣がいつまでも反対意見を述べられる道理はない。隊内無線や艦内電話を通じて、彼女の機転——結果如何（いかん）で狂気の沙汰と言われかねない——が通達された。

周囲の人間が忙しそうに動き回る中で、ユリーシアは装甲艦橋の防弾硝子越しに映る光景——やがては砲煙により黒く汚れるはずの蒼空（そうくう）を見つめた。彼女は思う。敵はそこら中から空母を掻き集めてきたのか？ それが実は近海にまで接近していたとは……！

唇を小さく噛んだ。一度敗北が決定した戦場に赴いてきた敵将を思う。瑞穂人がまさか残りの戦艦を全て引き連れてきたとは思えないし、そいつは航空母艦だけで海戦を行うつもりなのか？

何たる無茶な。いや、一度に二五〇機程の攻撃隊を送り込めば、我々を撃滅できないまでも、行動不能にはさせられるはず。それが狙いなのか？

疑問はつきなかった。帆船——戦列艦が現役の時代であれば、小銃弾が海戦の最中に飛び交うのは、珍しい話ではなかった。艦載砲の射程距離が短く、どうしても互いに接近する必要があったからだ。そうしたタイプの戦いであれば、もしかしたら敵将の顔を拝めたかも知れないが、戦艦同士の戦いでさえ、二万間は離れた状態で行われるようになった現在、敵の顔を肉眼で確認する術はない。

「敵将はどんな奴なのだろう……？」

今度は口に出して呟いたユリーシア落雷にも似た音が聴こえてきたのは、程なくしてからだった。

天道が昇る様は新しい一日の訪れを想起させる。月並みな感想だが、それを嘘だと思う者はまずおるまい。自分たちを祝福していると感じるかどうかはまた別問題であるが、千歳睦月少佐に率いられた、美御がその一角を成す攻撃隊が、敵機の迎撃を受ける事なく敵機動部隊を視界の範囲に収めた時、「俺たちには幸運の女神が微笑んでくれた」と感じた者は多かった。

「奇襲成功か？」

仁科信盛少佐が呟いた。四部隊の勝報——多数の敵機が自分たちに向かっている——は既に届いていたが、まさか敵機動部隊の上空に敵らしい敵がいらないとは想像の外の話で、彼が訝しんだのも無理がない。

「いや、慌てて上げてきたぞ」

呟きは隊内無線を通じて千歳に伝わっていたようだ。彼女の指摘を受け、仁科が眼を凝らすと、成程確かに敵機の群がこちらに向かい前進しつつあるではないか。

「そう甘くはいかんか」

「それでも数は少ない」千歳は三〇機程しかない敵機を視て、口許を綻ばせた。「喜連川さんがどうかしてくれるよ。我々は敵空母の横面を叩く事だけ考えればよいさ」

「俺の部隊は脳天を打ち砕く事だけだな」

「両方同時に撃ち込めば、正規空母でも沈められるさ。うん？ 空戦が始まるぞ」

制空隊が加速を始めた。彼らの役割は敵戦闘機の排除だ。半数がその任を宛がわれている。艦爆や艦攻の周囲にいる護衛機は不測の事態に備えてまだ動いていない。空戦は二〇機対三〇機で開始された形だ。

「訓練通り二機一組（ツーマンセル）で戦いなさい！」

戦闘機隊隊長——喜連川兼基少佐が指示を出す。彼は部下に対しても丁寧な言葉遣いをしており、人格者として知られる。ただし空戦時には阿修羅の如く戦うという、闘将としての顔も持つ。

「紫風」と4号艦上戦闘機が真正面からぶつかり合う。敵機は初対面——「紫風」は爬間諸島の基地航空隊には一機も配属されておらず、あちらは零式艦上戦闘機を視るのは、初めてなのだ——の艦戦に面食らう。

何だ、この戦闘機は？ そんな疑問を発した者も幾人かいただろうか。しかし彼らは初見の敵機、その恐ろしさを外観から感じ取った訳ではない。彼らは実力で思い知らされた。

二〇ミリ機銃が彼らの装備する一二・七ミリ機銃の銃撃可能圏外から一斉射撃される。彼我距離はおよそ二〇〇〇間。大口径機銃は弾丸が真直ぐ進まないからと採用を見送った彼らは、その光景を見て、最初は慌てて撃ってきたな——と高を括った。だが、直後に被弾墜落する機体が複数出たのを認めると、彼らの方が慌てた。

「この距離で初手から命中弾を送り込んできただと!？」

通常、大口径機銃は威力がある代わりに射程距離や命中率に問題を抱える。だから艦上戦闘機のように汎用性を求められるものには採用されない。「敵戦闘機に当たらない機銃」を装備した「制空権を取れない戦闘機」など悪夢以外の何物でもない。

しかし瑞穂海軍は、そうした常識を無視したかのような艦上戦闘機を開発し、前線投入してきた。既に爬間諸島の陸軍基地航空隊所属機——「燕」が二〇ミリ機銃を加軍機に見舞っているが、あちらは一発あたりの威力を優先し、爆裂弾頭——敵機に命中すると爆発するように造られている銃弾——が使用されている。そのため威力はともかく射程は短く、敵機を撃墜したのは、皮肉にも副武装(サブ・ウェポン)に位置づけられていた一二・七ミリ機銃の方だったとの記録が残されている。

それに対し「紫風」は、曳光弾(えいこうだん)以外は徹甲弾を使用していた。これは初速を速くして射程を伸ばすための措置だが、そうすると威力が低下する。しかし重爆撃機ですら撃墜可能との判定を受けている二〇ミリ機銃だから、艦載機相手に使用する分には、それで充分なのだ。

4号艦上戦闘機との初戦闘にも、その読みの正しさが表れていた。片翼を吹き飛ばされて錐揉(きりも)み状態になりながら落下するものはまだ温和(おとな)しめで、操縦席に直撃弾を受けたある機体は、飛行士そのものが壁にぶつけられた洋茄(トマト)の如き有様に成り果てて落下爆発し、胴体の燃料タンクを撃ち抜かれたものは、機体全体が火葬場に放り込まれた棺(ひつぎ)の如く燃え盛り、飛行士は生きながらにして火葬に付された。

「敵も新型戦闘機を投入してきたのか!？」

絶叫に近いものが、異口同音で、無線を通じて飛び交う。「燕」相手に苦戦した後だから、瑞穂軍機が弱いとの気分を抱いている者は少ないが、それでも皆が強い衝撃を受けたのだ。

「総員突撃！」

敵機の動揺を見て取った喜連川は、間髪入れずに叫んだ。装備機銃の射程距離、その違いを活かした攻撃も結構なのだが、及び腰の攻撃は敵に立ち直る時間を与えてしまう。敵が恐慌を来しつつあるのなら、一気に勝負を付けてしまうべきだ——彼はそう考えたのである。

突撃を開始した「紫風」の群は、初手から衝撃を受けた4号艦上戦闘機隊からすれば、戦闘機の形をした災厄に他ならなかった。彼らは死神が手にする鎌に命を狩られる子羊のように、背後や側面から銃撃を浴び、一機また一機と黒煙を棚引かせながら落下していく。

速度と格闘戦能力に勝る「紫風」は、その搭乗員が練達の腕前を持つ者ばかりで占められている事もあり、期待されている役割を見事に果たしている。敵機の群を、一撃を加える度に、空鉄の破片に変えている。

「制空隊に負けるな！ 我らも行くぞ！」

千歳が突撃を命じた。制空隊の他に護衛機もいるから、敵が予備戦力を繰り出してきても問題はないと判断したのだ。いや、そもそもここまで来て引き返すなど論外なのであるが。

秒単位で迫る敵艦隊との距離を強烈に意識させるのは、やはり対空砲火である。輪形陣の外輪部を構成する駆逐艦群が両用砲——主砲と高角砲を兼ねる、一二・七センチ砲を派手に打ち上げてくる。航空機には搭載できない、艦船用の大型対空機銃——四〇ミリ機関砲が形成する弾幕も

また脅威だ。

「駆逐艦の対空射撃でもきついな！」

仁科がぼやいた。彼の愛機の下では、対空砲弾が連続して爆発している。足許からビリビリと何かが響き、座席の下から高角砲弾が不意に顔を覗かせるのではないか――との妄想が頭をもたげてくる。

「敵は機動部隊用の対空駆逐艦を多数用意してきたのかも知れん」千歳も似たような事を考えている。

これは推測ではなく事実だった。西部帝家艦隊が機動部隊直衛用駆逐艦として多数建造させたジャック級駆逐艦は、一二・七センチ両用砲を五門と魚雷発射管一〇門を装備し、三七航里の快速を誇る。

電探の装備状況は艦により差があるのだが、機動部隊の外周部を護る、門番役を務めている艦は、少なくとも全艦が対空用電探を有しており、その対空火力は旧式巡洋艦のそれを軽く凌駕していた（対空機銃を装備しすぎた結果、いわゆる重心が高い状態（トップ・ヘヴィ）になり、復元性を悪化させているものもあるが）。

駆逐艦の上空は楽に通過（フライパス）、損害を零で切り抜けたと考えた千歳の期待は外れた。対空砲弾の突き上げを受けたある艦爆は、機体そのものが炎の塊と化し、搭乗員の未帰還はその段階で確定した。

「いかん！」

だが、その搭乗員は最期になり意地を示した。燃え盛る愛機を敵艦に向けて指向し、突入したのである。

この段階で二年前に採用された固定脚機一一九九式艦上爆撃機「赤星」は、自らに致命傷を負わせた、その駆逐艦――「ピーター」の艦上に突っ込むと、対空機銃座を片端から薙ぎ倒し、両用砲塔に激突してから爆発した。

乗組員らの絶叫が甲板上に響き渡り、小爆発が連鎖した後に起きた惨劇である。砲塔内に収められていた砲弾が「赤星」激突爆発の衝撃により誘爆した時、それにまともに対処できる者は皆無であった。

何が起きたのか判らぬうちに焰に吞まれる者が続出した。瑞穂軍機の「自殺攻撃」を目の当たりにした者の動揺が激しかったのと、艦長に代表される高級乗組員が、「赤星」突撃時の衝撃で戦死するか重傷を負い指揮不能になっていたのが響いた。

爆発が爆発を呼び、何もかもが吹き飛ばされて消えていく。そこには人間の尊厳など皆無で、あるのは瞬時に息絶えていく者らの恨み節ばかりだ。

そして「ピーター」の艦体が限界を迎えた時、彼女は真ん中から二つに折れた。艦首と艦尾がVの字を描くような形で、彼女は海面に沈降していく。沈没前に少しでもそこから離れようと藻掻く乗組員らの姿が、さながら恐慌（パニック）を題材にした活動写真の一面（ワンシーン）のようだった。

千歳と仁科は唇を強く噛んだ。内心で舌打ちする。まさか最初の戦果が自爆攻撃によるものになろうとは。

僅か二名の犠牲で駆逐艦一隻を沈め、数十人の敵を葬ったのであるから、単なる数字の遣り取りとしてみれば、決して悪いものではない。しかし艦載機搭乗員の育成に必要とされる時間や費用を思えば、何度でも無傷で生還して出撃して欲しかった。

されども、現実には机上演習とは違い、結果が気に入らないからとやり直す訳にはゆかぬ。犠牲はあれども戦果は挙げたと前向きに考え、その後の事に対処せねばならぬ。

「目標は空母だ！ 怯まず進め！」

そう言うしかなかった。陸戦であれば斃（たお）れた仲間の死体を踏み越えて進まねばならない局面があれば、嫌でも死を意識させられるが、航空部隊の場合、互いが高速で移動しているため、友軍機の墜落爆発を確認する暇がなく、士気の低下や動揺は瞬間的には広まらない場合がある。千歳はそれを期待した。

巡洋艦群の対空砲撃は、駆逐艦群以上に激しい。何しろ二〇・三センチ砲を三連装砲三基備えている重巡――リナレス級と、一五・五センチ三連装砲五基を持つ軽巡――コーラル級が各三隻ずついたからである。

彼女らは活火山かと思ふような火力を発揮した。投弾前の魚雷や爆弾を射貫かれて粉碎された機体が、艦爆で一機、艦攻で二機現出してしまう。大馬力の発動機で重量のかさんだ機体――防弾硝子の張られた操縦席、ゴムが使用された防弾タンクなどに重量が必要とされた結果そうになった――を飛ばしている感のある両機種だが、航空機である以上、無敵の存在ではない。

僚機を続け様に撃墜された攻撃隊は、怒りから標的を変更する者も現れた。中隊長をその直率小隊ごとやられた「翔龍」艦爆中隊が、残された七機――二個小隊にまで数を減じた形で、重巡「アリウス」に呐喊（とっかん）する。

「あの莫迦共！」

仁科は命令違反を犯した部下たちに対し舌打ちしたが、艦爆は一度急降下をかけると、もう止まれない。爆弾を当てても外しても、突き進むしかない。

高度三〇〇〇間から五〇〇間までを逆落としに進んだ「赤星」の一団は、周囲に炸裂する高角砲弾に怯む事なく投弾――引き起こしをかけた。翼を翻して離脱する最中に更に一機が機銃弾に胴体を貫かれて墜落するが、彼らの犠牲は無駄にはならなかった。

三基ある主砲塔――前甲板から中甲板にあるA B砲塔、艦橋を挟んで後甲板にC砲塔と、いずれも艦の中心線上に配されている――の半分が機能を止めたのだ。具体的に言えば、A砲塔が天蓋に爆弾の直撃を受けて爆砕され、B砲塔の近くに落ちた爆弾がその基部を歪め、旋回を不可能にさせたのである。

爆撃だけで重巡を撃沈した事例は、未だ存在しない。ある程度の大きさと防御力を持つ戦闘艦艇を魚雷なしで沈めるのは、やはり難しいのだ（それなら『敷島』と『穂先』は何なのだよと言えば、不運から順番が逆になった、と評すべきか）。

前甲板から中甲板にかけて、爆撃破壊された「アリウス」は、屑鉄運搬船かと思ふ姿に成り果て、その動きを止めた。弾薬庫への緊急注水が間に合ったのか、誘爆を起こす気配はないが、彼女が大破して行動不能になったのは、もう誰の目にも明らかだった。

四機の犠牲で重巡一隻を撃破したのは、割に合う取引なのか否か――当事者ですら考える余裕



はなかった。爆弾を使った艦爆に、戦場に居残る理由はない。急ぎ母艦に戻らねばならない。そんな彼らの行く手を遮る者がある。何とした事か相手は同じ艦爆——「メテオ」で、彼らは機体後部にある旋回機銃まで用いて、攻撃を仕掛けてきた。

——敵も必死だな。

そう感心する暇などない。艦爆が装備する七・七ミリ機銃で同じ艦爆が撃墜できるのかと言えば、大いなる疑問なのだが、航空機は尾翼が壊れただけで墜落する危険性を孕む。何かに攻撃されれば撃墜される危険が常にある訳で、油断は出来なかった。

「敵機の相手などするな！ 母艦を目指せ！」

中隊長代理を務めている小隊長が、残っている部下たち——自分も含めて都合六機に向かい、叫ぶ。

事実、艦爆同士の銃撃戦など、何の意味もなかった。「戦争とは無意味な浪費の極地」だと評した歴史家がある昔にいたが、互いに相手を仕留める決定打を有さぬ者たちが、兵器の本来の意図から脱線しきった戦闘を行うなど、まさにその用例見本だろう。

だが、互いに憎しみに駆られている艦爆搭乗員たちは、殺しあいの無意味さについて考えない。ただ憎むべき相手——本来なら一生出会う事もなく過ごしたはずの、異境の人——との戦いを続ける。

敵機を撃墜するため、と言うよりも、護身用——敵戦闘機を牽制するためだけに装備されたはずの機銃、そこから飛び出す銃弾が、奇妙な戦いを彩っている頃、輪形陣内輪部にまで突入していた攻撃隊は、その佳境を迎えていた。

「敵戦艦は無視しろ」

艦隊司令官からそう通達を受けていた。だが、重軽巡が打ち上げてきた、あの激しい対空砲火、それが兎戯あるいは祭りの花火を思わせる程の出迎えを受ければ、その命令を恨みたくもなる。

「空母だ！ 空母を狙え！」

唯一と言える隙は、戦艦群が己を護るために対空射撃をしている事であろう。彼らは自分たちの航空部隊がそうであるように、瑞穂軍機もまた戦艦を第一目標にして攻撃しに来たに違いないと考えていた。ゆえに航空母艦の直上は比較的弾幕が薄かった。横腹も然り。

三個中隊二八機にまで数を減じていた艦爆隊は、それぞれに目標を定めた。標的が排水量三万石にも達する大型戦闘艦艇ともなると、一〇機以下で攻撃しても命中は望めぬ。一定の数を投入する必要がある。

機体が唸り声を上げながら降下（ダイヴ）する。どんな艦でも構造上、真上には対空射撃が出来ない。仰角が九〇度などという高角砲を作成したという話など、ついで聴かれた例しがない。

艦爆の降下角度は四五度であるが、人体には垂直に突っ込んでいくようにしか思えない。引き起こしに失敗すれば、敵艦の甲板、もしくは海面がそのまま墓所になる。瑞穂海軍の演習海域——波が穏やかな事で知られる内海、橋架（はしかけ）内海にしても、訓練中にそうした形で事故死した者は年間に何人もいる。

果たして、彼らの攻撃はどうなるか——

最初に被弾したのは、ブラン・ラパス級正規空母三番艦「フォーコン」だった。このガリヤ語で「隼(はやぶさ)」を意味する名を付けられた航空母艦は、飛行甲板の中央部に一発、その近くにもう一発を喰らい、艦のど真ん中に大穴を穿かれた格好になる。

空母の飛行甲板に装甲版を張り、爆撃に対する耐性を持たせるべきだ、との主張は、昔から何度か繰り返されてきた。実際、爆弾一発で軍艦としての価値をなくすような艦を預けられても困るのだ。「当たらなければ平気だ」は現場に無茶を押しつける莫迦者の主張だろう。

されども、その欠点は何処の国の海軍でも、是正されなかった。技術者の怠慢ではない。空母の飛行甲板に装甲を張り巡らすと、重心が高い状態になり、転覆しやすくなるのが、主たる理由だった。

かつて小型の艦体に重武装を施すのが流行った時期がある。これは用兵側の主張と、軍艦の運用費を抑制した側の願望が一致し、技術者も限られた条件の中で努力し、うまくいったかに見えた。

ところが、三〇〇〇石の艦体に五五〇〇石級軽巡並の武装を施した艦だとか、駆逐艦並の武装を持つ水雷艇などを演習に参加させたら、あまりの復元性の悪さに、乗組員一度が音を上げ、海軍上層部からも「平時の訓練で海軍が壊滅する」とまで言わしめた結果を生んだ。

「防御力を高めたら、転覆しやすい艦になった」と言ったら、それはもう莫迦のする事だろう。瑞穂海軍の軍艦設計部門――艦政本部が、機動部隊関係者の要求する重装甲空母を建造するとしたら、搭載機を正規空母でありながら軽空母並にするしかない、との結論を導き出したのも、無理からぬ話と言える。

そうした事情は、当然ながら西部帝家艦隊も同様で、彼らは「搭載機の数こそ空母の力だ。一〇〇機艦載機を載せられる正規空母の方が、五〇機しか載せられない装甲空母より優れている」との判断から、ブラン・ラパス級正規空母の飛行甲板に装甲を張り巡らすのを断念した。

その技術的限界と妥協が全てではないが、「フォーコン」は一撃で空母としての価値を喪失していた。被弾力所から噴き出す焰が、周囲を赤く焦がし、洋袴(スカート)の如く捲(めく)れ上がった木製甲板が、応急修理でどうにかなるものではない事を、無言で物語る。

次に被弾したのは、四番艦「ブラン・ブルー」だった。この瑞穂語に直訳すると「白鶴」を意味する航空母艦は、姉とは違い、艦首右舷側と艦尾左舷側にそれぞれ一発、二発被弾した。爆弾に挟まれたような感じだ。

前者は艦首を破壊し、そこから夥しい量の海水を、艦内に流入させた。応急修理班が素早く動いたので、隔壁閉鎖は間に合い、被害拡大は防げたのであるが、後者が機関部に深刻な損害を与えた結果、行き足が止まってしまう。本国へ回航しなければ修理不能――との判定を受けた。

敵空母六隻中二隻を撃破。これだけでも大戦果であるが、次に被弾した「メール・イロンドル」――「海燕」の名を冠された空母は、その仕上げのような感じになった。

「何としてでも一隻は沈めておきたい」

そう考えた千歳が、無理になるのを承知で、雷爆同時攻撃になるように部隊を進めた結果、艦攻隊による挟撃と急降下爆撃がほぼ同時に行われるという、やられた方からすれば躲しようがない状態が現出した。

千歳は直率する中隊の各機に対し、彼我距離が八〇〇間になるまで攻撃を禁止する旨を通達した。千載一遇の好機なのだ。命を惜しんで中途半端な戦果にしたくなかった。

「一四〇〇……一二〇〇……一〇〇〇……！」

視界の中で敵艦の姿が膨らんでいく。操縦席から覗ける光景は、自分たち目掛けて氷菓(アイスクャンデー)の渾名のあるもの——対空砲火が放たれているのを、否応なしに教えてくれる。

瑞穂軍機は頑丈である。敵戦闘機に攻撃されても、簡単には墜落しない事からもそれは窺える。しかし、四〇ミリ機銃弾が操縦席に直撃したり、高角砲弾の着発——直接命中などが起きたら、木端微塵だ。死とは常に隣り合わせなのだ。

だが、死ぬのが怖くて艦載機搭乗員は務まらない。身に迫る火の粉でさえ、人生を味付けする香辛料(スパイス)だと思えるぐらいでなければ。千歳は自らにそう言い聞かせている。

そんな彼女の耳朶を、観測員兼後部機銃員の声が打つ。

「少佐、敵機が——艦攻が我らに向かい銃撃を！」

艦爆の時と一緒に——千歳は唇を噛んだ。連中は戦闘機がもう手許にない。使えそうな航空機は根こそぎ動員して、我々の攻撃を阻止するつもりなのだ。しかし、ここまで来て回避行動など取れない。

「無視しろ！」千歳は怒鳴った。「雷撃、行くぞ！」

敵艦との距離は、既に雷撃予定のそれに達していた。攻撃隊総隊長を兼ねる千歳は、自分の後に皆が続くのだと、物語の主人公じみた気分を少しの間だけ味わい、魚雷投下桿を引いた。

「発射(テーッ)！」

高度五間。文字通りの低高度。少しでも気を抜けば高波に浚われそうなところを飛んでいた「陣山」は、八〇〇斤の重量物を切り離れた反動から、急速に浮き上がる。その直後から敵弾が翼や胴体の近くを掠め飛ぶ感覚が伝わり、心臓に悪い事この上ない。

千歳は機銃掃射を敵艦に対し敢行しながら駆け抜けた。とにかくここを抜けなければ——との本能が、そうさせたのだ。訳の判らない絶叫を上げ続けているとの自覚すら、今の彼女にはない。一秒一秒が泥沼に足を突っ込んだ時のように重く、そして長く感じられた。

同じ感覚を味わったのは、千歳機と同乗者ばかりではなかった。交差するような形で「メール・イロन्दル」の直ぐ上を飛び抜けた者たちもそうだった。翼や胴体にめり込んだ機銃弾や高角砲の破片が、彼らの寿命をそのまま削り取ったかのような感じがした。死を強く意識させられ、心臓が爆発しそうになっている者が大半だ。

どうにか致命傷を負わずに済んだ千歳機は、戦果を確認した。艦爆の爆撃がほぼ同時で、林立している水柱が、魚雷命中によるものなのか、単に外れた爆弾が立てたものなのか瞬間的には判然としない。しかし敵艦が連続して爆発し、焰を随所から噴き出し、傾斜を増しているのを見る限りでは、かなりの損害を与えているのだと判定できた。

——空母の半分が手つかずだ。だが、この数と敵の防御火箭の激しさを思えば、これが限界だろう！

千歳はそう思った。自爆突入した機体と勝手に目標変更をした連中が別の戦果を上げているが、それが全体に与えた影響はさほどない。しかし空母の半数を潰したとなれば、敵の航空戦力は

確実に半減するはずだ。

今回の作戦目標が、敵艦隊の撃滅ではなく、転進作戦中の友軍部隊の支援と、脱出中の民間人の護衛——直接的な支援は物理的に無理だから、間接救助とでも言えばよいのか——なのだから、これで目的は果たせるかと思われた。

「投弾を終えた者は、長居は無用だ。直ぐに母艦に戻れ。再出撃に備えよ！」

そう命じながら、千歳機自体も戦場離脱を計る。艦攻隊が総出で殴りかかった、あの空母は果たして沈むのだろうか？ それだけを気がかりにしながら。

千歳の疑問は、戦場にありがちな情報錯誤と航空攻撃の特殊性に起因した。当事者にしても時速数百里で動き回っている最中に、一瞬の出来事をきちんと把握できる道理はない。大抵が撃墜したのか撃沈したのか確証を持ってない。

彼女自身が雷撃に参加し、艦爆隊までもが強烈な一撃を見舞った「メール・イロンデル」は、実のところ、魚雷を五本、爆弾を四発喰らい、たちまちのうちに全艦炎上——手が付けられなくなり、総員退艦命令が下された。

だが、艦体そのものは非常に頑丈である彼女は、直ぐに沈没する事を拒んだ。攻撃を受けてからも暫くは海上を漂流していた。機関部は活動を停止しているが、曳航（えいこう）は可能なのではないか——と思われた。

しかし敵地のど真ん中で大型戦闘艦艇を曳航——後方に送り返そうとすれば、どうしても無理が生じる。僅か数航里で本国目指して後退すれば、途中で潜水艦の餌食になるだけではないのか——との声が上がり、ユリーシアも回航しても修理できる見込みがないのならと、結局は雷撃処分させた（機関部まで丸焦げとなると、場合によれば——から建造し直した方が速い）。

自沈処理が施されたとは言え、沈没に追い込んだのは間違いがない。千歳はこの事から、「世界で最初に正規空母を沈めた部隊の指揮官」と歴史書に記される事になる。

だが、千歳は「世界で初めて敵空母を航空攻撃で撃沈した人物」という栄光は掴み損ねた。

何故か。実は彼女が加機動部隊を攻撃していた時、別働隊——七航戦所属機が、輸送船団護衛艦隊をこれまた全力で叩いていたからである。彼らが沈めた艦の中に、護衛空母も含まれており、それが「世界初の、外敵からの攻撃により沈没した空母」になったからだ。

英は旧式機が中心の七航戦所属機にさほどの期待をかけてはいなかった。遊ばせておくよりはましだと考えて送り出した。されどもそんな彼らが意地を見せた。快拳を成し遂げた。そして本命の攻撃隊が独占するはずであった栄誉を掴んだ。

戦場とは裏切りと幻滅が支配する魔空間であるが、良い意味で期待を裏切られた時は、何と評せばよいのであろうか。何とも皮肉な成り行きであった。

## 7

最前線にありながら「蚊帳の外」に置かれる部隊は、いつの時代にも存在する。大は総司令部直轄の予備隊から、小は前線部隊への補給を担当する輜重隊（しちょうたい）までその役割は様々だが、上陸直前の海兵隊員を満載した輸送船団の護衛となると、また複雑なものがある。

「早いうちに上陸許可を出してくれないだろうか」

戦艦「トルナード」——ガリヤ語で「竜巻」を意味する艦に司令部を置く、護衛艦隊司令官——

一ワルター・フォン＝ノイハウス中将は、双眼鏡を片手に独りごちる。

彼が指揮する艦艇は、艦隊旗艦を含めていずれも旧式だ。「トルナード」とその同型艦である「ティフォン」――こちらは「台風」の名を冠されている――はまだ良い。瑞穂海軍の敷島級戦艦と同じく三六センチ砲を連装六基――都合一二門備えている。単純な火力だけを見れば、なかなかのものがある。

敷島級戦艦とは設計思想が幾らか異なり、速力ではなく防御力を優先した結果、速度が二一航里とかなり遅いが、補助戦力――上陸直前に行われる地上砲撃や、彼女たちよりも低速な輸送船の護衛としてならば、まだまだ充分に通じる。

だが、三二センチ砲搭載艦「ラファル」と三〇センチ砲搭載艦「ウラガン」――前者が「突風」で後者が「大嵐」との意を持つ――に至ると、速度が一九航里、一六航里と極めて遅く、艦体の老朽化も著しい事から、外洋での運用は困難とさえ言われていた。

そんな艦でさえ動員しなければならないところに、西部帝家艦隊――ひいては聯合帝国そのものが抱える「無理」が垣間見えた。主力艦隊の他に、万が一に備えられる第二部隊を用意できなかったのである。

――軍を急速に拡張したツケが、こんなところに出ている。敵がもし突っ込んできたら、ひとたまりもないぞ……！

ノイハウスはそれを危惧している。彼はガリヤ系とブリタニヤ系が幅を利かす西部帝家領内では、少数派に位置するゲルマニヤ系であるが、それを理由に厄介事を押しつけられた訳ではない。

聯合帝国は先帝――オトフリート3世の死後に、大規模な内戦が勃発し、その後に再統一を見た。

漁色家（ぎょしょくか）として知られる先帝が数多く残した庶子――その一人であったジークフリートが、天から恵まれた軍事的才能と抜群の政治力を行使して至高の冠を戴いてから一〇年弱。

その間、聯合帝国は内紛時に喪失した領土の奪還と経済再建を標語（スローガン）に、急速な軍備拡大を推し進めた。具体的に言えば、戦時に軍用道路として使用できる高速道路の整備、そして軍需産業に惜しみのない投資を行い、失業者の激減とそれに伴う経済成長を成し遂げた。

荒れ果てた国土を、膝を抱えて眺めなければいけなかった国民は、強力な指導者を待望していた。新帝ジークフリートは、その期待に大いに応えた。内戦前は世界的に見てもかなり劣悪だった労働環境は劇的に改善され、農奴がその過半を占めた国民が、専制主義の軛に苦しめられていた者たちが、中産階級を多数派とした有産階級に生まれ変わった。

世界的に見ても類例が殆どない経済成長を達成した聯合帝国国民は、ジークフリートを熱狂的に称えた。それまでは出身地から一步も動かずに生涯を過ごす者ばかりだったのに、彼の新帝は労働者倶楽部（くらぶ）の発足と合わせて団体旅行などを企画し、安価で供給される国民車と合わせて、積極的な国内旅行――と言っても、北加大陸そのものなので、一生かけても巡りきれぬものではなかったが――を進めたのも彼が一般人から支持される要因となった。

だが、急速な経済発展と機械化は、当然ながら社会に歪みを生んだ。高速道路はまだ良い。戦

時使用云々は、政治勢力としての背景を持つ軍部への建前だ。実際は公共投資——失業者に仕事を与えるための救済事業だった。完成した大陸道路の大半が、自家用車（マイカー）をようやく手に入れたばかりの一般労働者の国内旅行に使用されているのだから、そこは文句を付ける筋合いはない。しかし軍需産業はそれ自体が仕事の提供にはなるが、国民の生活水準、それを改善する道具にはなり得ない。こちらはジークフリートのもう一つの公約——失地奪還に使用された。すなわち対外戦争に、である。

軍閥同士の争いは、国境線の大幅な後退をもたらした。全ては火事場泥棒的な態度に終始した南加大陸諸国の策動によるものだが、聯合帝国人からすれば、それは屈辱以外の何物でもなかった。

ジークフリートは、経済再建が成功を収め、国内の基盤を固めると、圧倒的な生産力を背景に、これまた急速再建された陸海軍を用いて、恫喝（どうかつ）外交を開始した。

「内戦時に貴国が不当占拠した我国（わがくに）の領土を返還せよ。拒否するのであれば、我々は剣と大砲と共に先祖伝来の土地に赴くだけだ」

内戦が終結したばかりの国が何を言うか——恫喝された国の多くは、ジークフリートがまだ三〇代の青年指導者である事と合わせて、それを脅威として受け止めず、「無謀なる挑戦」だと嘲笑した。

しかし彼は本気だった。自らの軍事的才能に恃（たの）み、自国再統一を成し遂げた、という自負のある若き皇帝は、失地の奪還に軍事力で着手——それにほぼ成功したのである。

元から軍事力に難を抱える南加大陸諸国であれば、まあ当然の結果なのではないか——と列強も考えた。内戦という嵐が過ぎたばかりとは言え、聯合帝国は世界有数の軍事大国には違いないのだから。

そうした空気に変化したのは、ジークフリートが南加大陸諸国を後押ししている旧宗主国——フィスパニヤとの戦端を、西平洋に於いて開いた時だ。流石にこれは無茶なのではないかと皆が考えたのだが、ジークフリートの手になる軍事力の強化は、海軍部隊にまで及んでおり、かつて無敵艦隊（アルマダ）を擁し世界に覇を唱えた国の艦隊は、大敗を喫して西平洋から駆逐された。

その余勢を駆り、北ヤフリカ大陸にまで聯合帝国軍が進出した時、「大海を跨いだ、現代のラティウム帝国」が——かつて世界で最初に生まれた大帝が、時と場所を変えて蘇ったかのような喧噪が地球中を包んだ。

国民は連戦連勝を喜び、かつてない版図の拡張を祝福した。だが、聯合帝国も十全の存在ではない。急速な軍備拡張は、必然的に兵員の不足を招いた。飛行機や戦車は工場に量産を命じれば直ぐに出来るが、軍艦は駆逐艦ですら数十人を必要とし、戦艦に至ると一〇〇〇名単位の間人が息を合わせないと思い通りには動かない。

帝室の分家——西部帝家が治める領域は、橋道洋に面している。橋道洋は瑞穂がその全域を掌中に収めているが、彼らは軍隊が海主陸従なので、仮に戦争が始まって問題はない——瑞穂陸軍に北加大陸全域を占領できるだけの兵力がない——とされた。そのため、西部帝家艦隊は比較的規模が小さく、沿岸部を防衛するための艦隊がいるだけだった（そちらの方が軍事的かつ経済

的に健全だというのが皮肉だ)。

その沿岸警備隊(コースト・ガード)に毛が生えたような西部帝家艦隊が大幅に強化されたのは、ジークフリートの軍拡宣言とそれに伴う海軍軍縮条約——列強各国の戦艦や空母の保有数、巡洋艦の等級などを定めた、ラティウム条約からの脱退、完全破棄が実行に移されてからだ。

内戦により壊滅同然の様相を呈した海軍は、対外進出を熱望する皇帝の手により、以前よりも強大化して蘇った。幾ら陸軍を強化しても、渡洋侵攻作戦は海軍の存在なくして成立しない——と信じる皇帝は、戦艦だけはいわゆる「ファナマの軛」から四〇センチ砲搭載艦で妥協したが、その他の戦闘艦艇——航空母艦や巡洋艦に関しては、質と数の双方を揃えるという大盤振舞(おぼんぶるまい)に興じた。

西部帝家艦隊が爬間諸島沖に展開した新型艦船の数々——ブラン・ラパス級正規空母やメール・リオン級戦艦、リナレス級重巡、コーラル級軽巡などは、全て皇帝の強烈な後押しによる。

その結果、確かに第一線戦力は充実を見た。しかし補助戦力の整備は後回しにされた。いきなり何もかも揃えるのは無理があるし、主力艦隊が敵艦隊を撃破すれば、その他の戦力は別段必要ない——との決戦至上主義もそこに響いていた。

結局のところ、聯合帝国海軍は、「輸送船の護衛には旧式艦か戦時急増艦艇を宛がえば良い。それで事は足りるはずだ」との思想が染みついた状態になってしまった。

後方支援(バックアップ)体制の欠如は、そのまま前線部隊の戦闘能力の低下になり現れる。補給や修理のためにいちいち本国に戻っていたら、時間の消費(ロス)が激しすぎる。手間暇がかかりすぎる。

しかし「我に不可能なし」と信じる皇帝は、南加大陸諸国やフィスパニヤとの戦争を継続しながら、新たに瑞穂との戦端を開くという離れ業に挑んだ。

古来より二正面作戦は軍事では特に戒められている。百万単位の軍勢がいようと、東西や南北に——二分割して展開しなければならなくなると、補給体制の構築だけでも手間だし、分割に伴う前線兵力の減少から、各個撃破されたりするからだ。

聯合帝国には北加大陸全体に眠る、膨大な地下資源がある。二億近い人口と豊富な労働力もまた大いなる強みだ。皇帝に忠誠を誓う、陸海軍に帝国親衛隊六〇〇万の兵力は言わずもがな。

だが、皇帝がとめどなく戦線を拡大する事に関しては、不安を感じる者が少なくない。ノイハウスにしてもその一人だ。二正面作戦どころか現状は三正面作戦なのだ。西平洋・南加大陸周辺・橋道洋の各戦線にいる部隊は、相互支援は疎か、互いがいる場所に行く事すら難しい。何しろ何処に行くにしても、一度本国に戻るか、ファナマ海峡を通るしかないのだ。その様子は、直通線路がなく、首都経由でないと地方に行けない田舎国家の鉄道を思わせる。

そんな、戦争指導の問題点——敵に対する過小評価が最悪の形で噴き出したのは、西部帝家艦隊主力が、大規模な敵機の攻撃を受けつつある——との報せが、ノイハウスの許に舞い込んだ時だった。

「機動部隊司令部から支援要請が来ているだと!？」

ノイハウスは我が耳を疑った。彼の艦隊は戦艦や航空母艦を確かに有し、無力な部隊ではないが、いずれも旧式艦か商船改造艦などで、有力とは言いかねた。小規模な水上艦隊、潜水艦、

散発的な空撃ならば対処できたが、主力部隊に正面から殴りかかってくるような敵と戦えるのかと言えば、大いなる疑問だった。

何かの間違ひではないのか——と言いたげなノイハウスに、通信参謀は真剣な顔で告げた。「敵機数は概算で二五〇機。機動部隊も用意できる限りの直掩機を上げるそうですが、防ぎきれぬかどうか自信がないようです。艦爆や艦攻ならば2号艦上戦闘機でも充分対処できるはずだ——と」

「ううむ」ノイハウスは唸った。

機動部隊司令部の言いたい事は判る。彼らは艦隊決戦時の戦艦部隊への支援と、その後の基地航空隊を相手にした戦闘で保有機数を大幅に減じ、手駒が不足しているのだろう。だからこそ無理を承知で、二線級部隊である輸送船団護衛艦隊にまで支援を頼んでいるのだ。

しかし——

「今から向かわせて、間に合うのだろうか？」

2号艦上戦闘機は旧式機である。巡航速度は時速一五〇里に過ぎない。そして輸送船団は機動部隊から東に一〇〇里程離れた海域にいる。大雑把（おおざっぱ）に計算して、移動だけで四〇分はかかる。敵がもう間近だとすれば、戦闘の終盤に駆けつけられるかどうかだろう。引き上げにかかる敵機の尻に劣速な旧式機が追い縋れるかどうかは、やらずとも判る。まず逃げられる。飛ばすだけ燃料の無駄になる可能性が高い。

だが、「支援要請を無視する」という選択肢は、ノイハウスにはない。四隻の空母には、三五機ずつ2号艦上戦闘機が搭載されている。あたかも在庫整理が狙いであるかのように、数だけは揃えられている。全部合わせれば正規空母一隻分以上の航空機数だ。戦力不足とは口が裂けても言えない。

それに何より、機動部隊を指揮しているのは、西部帝家艦隊司令長官を務める西部王——ユリーシア＝テレーズ・ド＝ボナパルト元帥だ。帝室の一員である彼女の要請を拒めば、これ以上の出世が止まる以前に、聯合帝国内で生きていける場所がなくなる。

戦意不足や敵前逃亡を理由としての銃殺刑も可能性としてはある訳で、物理的に無理——彼我距離が五〇〇里以上離れていて、艦上機の航続距離的に見て、到達不可能とでも言うのでなければ、支援は出す必要がある。

軍事的な必要性よりも、保身の方に天秤の秤（はかり）を傾けたノイハウスは、空母部隊の戦隊司令官に命じた。

「機動部隊支援のために、可能な限り戦闘機を回せ」

反対意見は出なかった。先に記した理由を脳裏に浮かべた者は多かつたし、既に敵基地航空隊は壊滅状態にあり、輸送船団を攻撃するような敵勢など、もはやこの近海にはいない——と皆が考えていたからだ。

「ルート」「ポン」「バリエール」「キャナリ」——それぞれが「道」「橋」「関所」「運河」を意味する名を冠されている——四隻の商船改造空母から、2号艦上戦闘機が飛び立っていく。その様は勇壮さよりも危険を感じさせる。一線級の飛行士や整備員が機動部隊に集められた結果、彼らは新兵（ルーキー）と老兵（ロートル）が過半を占めていたからだ（流石に編隊長はまとも



だが)。

「こいつらでどうにかなるのかな？」

命じた側も直接敵と干戈を交える者も、疑問を感じた。友軍支援の必要性は認めているが、効力は不明だからだ。

相手が精鋭揃いの空母艦載機隊――機動部隊所属機ともなれば、単に撃墜機数を提供するだけに終わる可能性は高い。ともあれ命令は命令なのだ。「人助け」という大義もある。日頃自分たちの事を格下だと考えている連中を見返す好機でもある。

一〇〇機程の2号艦上戦闘機の群が、三〇分程かけて全機発艦し、東の空を――友軍に襲いかかる敵機を求めて前進する。いきなり保有全機とは流石に出来ない。二割程度は予備隊として手許に残された。

果たしてどうなるか――友軍機が消えた空を、ノイハウスは眺めていたが、対潜哨戒を続けていた艦上攻撃機――複葉機「槍魚(ランスフィッシュ)」がとんでもない情報を送りつけてきた時、彼らもまた喧噪の当事者となった。

「当方にも敵機が接近しつつあるだと!？」

「はい。複葉機を含むそうですが、七〇機程が」

通信参謀が顔面から血の気を引かせてそう告げた時、ノイハウスは敵の意図を悟った。

「奴らは初めから機動部隊に第一線戦力をぶつけ、旧式機を我々に向かわせる腹でいたんだ。だから時間差をつけてきたに違いない。そうでなければ、この自機(タイミング)に都合良く現れるはずがない」

2号艦上戦闘機を送り出してから、既に三〇分は経過している。彼らは間もなく機動部隊上空に辿り着くだろう。つまり、今すぐ引き返せと命じても、また同じだけの時間がかかる。そして恐らく間に合わない。搭乗員も疲労をためているし、戦場空域を右往左往ただけで終わる可能性が高くなる。戦闘中に最も戒められる行為である、「有力な戦力を遊兵化する」という悪夢を現出させかねない。彼らはそのまま進ませねばなるまい。

ノイハウスの思考が万華鏡(カレイドスコープ)の如く回転し、場末の酒場(バー)の電光看板(ネオン)のようにチカチカと明滅する間にも、事態は動く。瑞穂側の行動(アクション)を俄には信じ難い――とは言えなかった。彼が護衛している船団には、上陸後直ちに戦闘を開始する予定の、海兵隊員たちと、彼らを戦わせるのに必要な、武器弾薬食料を満載した輸送船が多数含まれている。

一度上陸さえしてしまえば、一〇〇機程度の空撃では壊滅する心配はないが、輸送船に乗っている状態で襲撃を受けたら、どれだけの被害が出るか判らない。上陸直前だからと、装備に身を固めている兵士が、乗っている船を撃沈され、海に放り出されたら、まず助からない。

何しろ用意できる輸送船に限度があったため、どの船も寿司詰(すしづめ)状態なのだ。全員の救命胴衣を万が一のために用意する――との案も出されたのだが、七万人分ものそれを準備するとなると、作戦開始予定日に到底間に合わず、海軍が制海空権を絶対に確保する、との前提で話が進められてしまった。

だが、現実はこうだ。爆弾魚雷を一発一本でも喰らえば、たちまち轟沈しかねない輸送船の

群に、有力な敵機が襲撃をかけつつある。敵軍の目的が爬間諸島の防衛や維持――上陸阻止であるのなら、輸送船団が叩かれても、何ら不思議はない。主力戦艦同士の戦いに敗れ、もうまともな方法で抗戦を継続する術のない彼らからすれば、それは自然の帰結だと言えた。

「如何なさいますか？」

参謀陣は異口同音に、ノイハウスに問いかける。機動部隊支援に向かわせた2号艦上戦闘機を、今からでも引き返させるのか否かを、彼らは訊きたいのだ。

「現有戦力で迎撃する」ノイハウスは現実に意識を戻すと、明確な口調で告げた。「今更呼び戻しても間に合うまい。手持ちの戦闘機でも、被害を減らすぐらいは出来るはずだ」

三〇機程の2号艦上戦闘機は、確かに無力な存在ではない。敵機数が二倍でも、向こうが複葉機を含む以上、完全撃退は無理でも、被害軽減は可能なはずだ――司令官にそう言われると、反論は出来なかった。

「予備隊を直ぐに投入します」

「急がせろ。敵は近くまで来ている」

命令が下されると、各空母の飛行甲板上を、再び喧噪が包む。昇降機を通じて格納庫から出された戦闘機に、搭乗員が慌てて乗り込み、準備が出来た機体から飛び立っていく。その様子は押(おっ)取(とり)刀(がたな)の典型例だと言えた。

飛行甲板の上に艦載機が並べられている時の、あのどうしようもない、ジリジリと心身が灼かれているような感じが、終わるか終わらないかの時――九六式艦上戦闘機「清風」と九五式艦上攻撃機「烈山」により構成されている、瑞穂軍機の群が現れた。

「畜生！ あと少しで全機発艦が終わるのに――」

発艦風景を見送りに来ていた整備員が、間の悪さを呪い、握り拳を震わせた瞬間、直掩隊と攻撃隊の戦闘が開始された。既に戦闘態勢を整えていた直掩隊は僅か一〇機。戦闘に加入しようと上昇を続けている者が同数。発艦しかけて止められた者も然り。

攻撃隊には、二八機の「清風」が随伴していた。彼らは愛機の基準からすれば、長距離攻撃になる距離を飛んでいたが、待ちわびた出番だからと大いに張り切り、同世代の艦上戦闘機と正面から渡り合った。

格闘戦性能を第一に造られた「清風」と2号艦上戦闘機との戦いは、必然的に格闘戦(ドッグ・ファイト)となる。旋回し合い、両者共に互いの背後をとろうと必死になる。

複葉機時代から見られた、古き良き空戦の風景。

軍配は、機数と搭乗員の練度に優る瑞穂側に上がった。直接戦闘加入している機体は、瑞穂側の方が多く、飛行士の力量にも隔たりがあるのだから、まず順当な結果が導き出されたと言ってよい。

機体性能と数的優勢を背景に、4号艦上戦闘機が暴れ回った事を思えば、劣勢を承知で瑞穂側に立ち向かった、2号艦上戦闘機の搭乗員たちを哀れとは言えぬ。一種の因果応報(いんがおうほう)であろう。彼らには一切の責任はないが。

短いが壮烈な戦闘が終わりを告げた時、輸送船団護衛艦隊の本当の意味での受難は始まった。彼らは正式編成の機動部隊とは異なり、とにかく使える艦を――と掻き集められた雑軍であり、

各艦の性能だけでなく、共同訓練もまた不足している。輪形陣など下手に組もうとすると、衝突事故が多発しかねない。

ゆえに陣形は同列の戦闘艦に単縦陣をとらせ、それが幾つも並んでいる——という、素人目から見ても明らかな雑然ぶりを露にしていた。先頭を進む戦隊旗艦に追従するぐらいは出来るのだが、部隊全体で動くとなると怪しくなる。そんなどうしようもない有様だ。

ノイハウスは、自身を護るのに精一杯で、他の艦の護衛——とりわけ無防備な輸送船の護衛に手が回りそうにない事から、そちらに大損害が出るのではないかと警戒していた。

それは拠点防衛を念頭に置いている側の攻勢防御と見れば、正しかった。だが、瑞穂側は艦隊決戦に敗北を喫した段階で、爬間諸島防衛に見切りを付け、だからこそ守備隊や民間人が彼の地から脱出するのに必要な時間を、第一東遣艦隊に稼ぐように命じた。ゆえに彼らは艦隊司令官が命じた単純明快な行為——「敵空母を集中的に狙え！」を躊躇なく実行に移した。

輸送船の乗組員が、一発の爆弾に、一本の魚雷に、全員戦死の悪夢を想像しているのを横目に、「烈山」は商船改造空母群への突撃を敢行。艦隊将兵が「何故!?!」と呆気にとられている——戦闘艦艇を狙うにしても、戦艦の方が叩かれると皆が思っていた——のを無視し、この段階で六年前に採用された、複葉機の群は、航空魚雷を次々と投下した。

敵の妨害がさほど激しくない場合、航空攻撃は機体の速度が遅い方が当てやすい。これは誰にでも判る理屈だろう。狙いをつけられる時間が長ければ長い程、命中率は上がる傾向にある。

「烈山」隊が標的とした空母の群は、自らが装備する火力が少なく、連携の不備から対空支援も碌(ろく)に受けていない。ゆえに撃墜されたものでも、その殆どがやられる前に投雷していた。

航空雷撃の命中率は一般に低い、彼らは敵のお粗末さにも助けられ、各中隊は標的に最低一本は命中させた。具体的に言えば、「ルート」の右舷中央部に三本命中、「ポン」の艦首左舷に二本命中、「バリエール」の艦尾右舷に四本命中、「キャナリ」の艦首に一本命中となる。

「烈山」隊が使用した航空魚雷は、威力に難があるとされている旧式——八九式航空魚雷、その在庫品だった。元からさほどの戦果を期待されていない旧式機に装備させるものだから、それで問題はあるまいとされた。その想定——彼らがそもそも敵艦隊を攻撃する機会があるのか否か——は部分的に見て、搭乗員の努力を無にするような事態を引き起こした。信管が作動せず、折角命中させた魚雷が、敵艦に穴を開けただけ——水上艦に致命傷を与える事になる爆発を起こさなかった——という悲喜劇的な状態を生んだ。

では、旧式艦上攻撃機を命懸けで敵艦に突撃させた者たちの努力は、無駄だったのかと言えば、そうでもなかった。彼らが攻撃した航空母艦は、商船を改造したものばかりだったからだ。装甲版は薄く、乗組員の練度も低く、応急修理能力は戦艦や正規空母のように「主力」と見做されている艦に比べれば格段に低い。要するに魚雷一本の命中——信管作動で、全艦火達磨(ひだるま)になるような代物ばかりだったのだ。

「ルート」は被雷の直後、右舷そのものを破壊分断された。その様は鮫に脾腹を食い千切られた者が、瞬間的に絶命する図を思わせた。爆発と海水の浸透が同時に進み、艦長が被害対策を命じる暇もなく、残った艦体が海面に没していく。

「ポン」は艦首から大爆発を起こし、前のめりの姿勢で沈降を始めた。期間停止命令を出すのが

遅れ、被雷力所から大量の海水を飲み込んだのが、彼女の寿命を縮める最大の原因となった。

「バリエール」は舵と機関部をほぼ同時に喪失した。それから間もなくして艦尾部分が剥離し、そこが先に沈んでいく。推進力と艦体の三割を奪われた艦に生きる道などあるはずもなく、残りの部分も沈みだす。艦首を振り上げた形で没していく様は、文字通り「矢尽き刃折れ」た者の最後——その見本だった。

最後に残された「キャナリ」は強運だった。彼女はそもそも一本しか被雷していないし、その被雷した魚雷すらも信管不良——整備員の調整ミスなのか、在庫品が劣化していたのかは不明——で爆発しなかった。同じ戦隊を組んだ僚艦が次々と没していく中で、彼女は彼女は艦首に小さな穴を穿かされただけで生き残った。

攻撃は空母群に集中していた。だから他の艦への被害はない。しかし護衛艦隊司令官であるノイハウスは、絶望に顔を歪めざるを得なかった。彼の艦隊とその護衛対象に制空権をもたらすはずの艦が、ただ一度の攻撃で壊滅状態に陥ったからだ。

出撃させた一〇〇機以上の戦闘機は、生き残った「キャナリ」一隻に収容できるはずもないから、載せられない分は全て捨てるしかない。如何に期待されていなかった部隊とは言え、損害を受けすぎだ。これではユリーシアの叱責は避けられまい。

ノイハウスは、自身の経歴に大きすぎる傷を付けられたと思い、堪らずに天を仰いだ。神様に祈りを捧げれば今日という日をやり直せるなら、何度でもお祈りをしたい——そんな気分になった。

実のところ、ノイハウスが被った不名誉は、単なる戦術的敗北に留まらなかった。彼は戦艦を旗艦に定め、そこに艦隊司令部を置いていたから、商船改造空母群の事を単なる護衛艦の一つだと考え、自身が率いている艦隊を機動部隊だと思っていなかった。彼だけでなく、西部帝家艦隊司令長官やその参謀たちもそうだった。しかし「純粋な航空攻撃のみで最初に空母を撃沈された」という事実は残る。何しろ二航戦所属が撃沈した航空母艦は、「曳航不可能」との判断から雷撃処分されたもので、爆雷撃だけで沈没に追い込んだのではないからだ（時間的に見ても、三空母撃沈の方が早い）。

つまりノイハウスは、後年の戦史に「最初の機動部隊決戦で、一方的な敗北を喫した艦隊司令官」として名を残すと同時に、九五式艦上攻撃機「烈山」に、「史上初めて航空母艦を撃沈した艦載機」という不滅の名誉を進呈する役割を果たしたのだ。

これは戦争が開始された段階で、既に旧式化し、本来なら出番も活躍の機会もないままに退役する予定であった航空機に、最初で最後の花道を与えるという、望まぬ道化（ピエロ）を演じる敵方になった事を意味する（誰でも間抜けあるいは不運な人物の代名詞になるのは、嫌なはずだ）。

だが、当事者にその全てを見渡す力がないのは、いつの世でも変わらない。眼前の現実に対処せねばならない者は、否応なしに視野狭窄（しやきょうさく）になる。ノイハウスは海面に放り出された者たちの救助と、還るべき母艦をなくした艦載機隊の収容に当面は目を向けねばならず、それらの記述——自身を悪し様に罵った、または嘲笑・憐憫の対象として捉えた戦史研究書を読むのは、後年の事になる。

名誉と幸運の裏には、不名誉と不運がある。それを現す典型的な例だった。

8

敵空母撃沈を果たした二航戦所属機は、対空砲火にやられたものを除けば、全機が無事に帰還し、賞賛の嵐に包まれたのであろうか？ 皇族の艦隊司令官から「よくぞやってくれた！」と直にお褒めの言葉に預かる栄誉を体験し得たのであろうか？

そうではなかった。彼らは「分身発生装置」により仕掛けられた巧みな詐術（トリック）に気づき、慌てて反転してきた4号艦上戦闘機との戦闘を開始していた。全体機数で言えば、まだ瑞穂側の方が多いが、被弾した艦爆や艦攻もそこには含まれ、傷ついた友軍機を護りながらの戦いとなると、いささかどころではなく難しかった。

「紫風」の二〇ミリ機銃は、威力は絶大であるが、携帯弾数は少ない。気軽に連射していると直ぐなくなる。勿論航空兵装であるから、「一撃必殺！」を念頭に置いて使用しなければならない程、莫迦な仕様ではないが、余裕がないのは確かだ。

その「余裕」は、敵機動部隊攻撃の際に尽きていた。敵直掩機を攻撃する時に手加減は出来ぬ。最初に痛烈な一撃を浴びせ、怯ませる必要があった。事実その作戦は成功し、制空隊は圧勝した。艦爆艦攻が攻撃を成功させるその一助となった。

しかし帰路には「成功」が余力をなくす「悪夢」へと姿を変えていた。七・七ミリ機銃でも4号艦上戦闘機を撃墜出来なくはないが、至近距離にまで迫り、操縦席に纏めて機銃弾を叩き込まねばならないとなると、もう至難の業だ。

「紫風」も4号艦上戦闘機と同じく、高速重防御を売りにした戦闘機だが、搭乗員が既に疲労し、持ち味の何割かが損なわれているとなると、やはり戦闘は厳しい。撃墜された機体が発する黒煙が次第に増え始めた。

――敵もしつこい！

美御は敵機――4号艦上戦闘機の背後をとると、右翼に機銃弾を連続して撃ち込んだ。初めは小さな穴がぼつぼつと開く程度だが、やがてそこは洪水を前にして決壊した堤のように砕け、吹き飛んだ。均衡を崩したその機体は、錐揉み状態となり落下を始める。撃墜確実。あれでは搭乗員が落下傘で脱出する暇も余裕もあるまい。

この日、彼は愛機に記すべき撃墜印を三つ増やしていた。海賊討伐の時は複葉機ばかりを相手にしてきたが、全金属製の最新鋭戦闘機でも彼は五分以上に渡り合えるのを実力で証明していた。戦場では練度と同時に場数を必要とされるが、そちらの方に不足がなかったのが大きいのかも知れない。

しかし美御はその事を素直に喜ぶ気にはなれなかった。互いに命を懸けた戦いを演じている最中に、個人の技量と数字を自慢して何になるろう。航空戦も昔とは異なり無線が装備されて集団戦の様相を呈している今、大切なのは僚機との連携であり味方の被害を減らす事であった。

空母に必殺の雷爆撃を敢行した「赤星」や「陣山」が一・七ミリ機銃の掃射を受けて爆裂四散する様は、美御の怒りと焦りを呼び起こしている。

――この調子だと帰路の方が損害が大きくなる。どうにかならないか！

艦爆や艦攻にも防御用の機銃が装備されているが、それは敵機を牽制するためのもので、确实

に撃墜を狙えるものではない。彼らを護衛するために戦闘機隊が随伴してきたのだと思うと、情けない限りだった。

英が戦果拡大の好機だと第二次攻撃をするにしても、爆雷装が出来る航空機がなければ、成果は望めない。「紫風」にも三〇斤爆弾二発を装備できるが、そんなものは地上攻撃に用いるのが限界だ。「赤星」や「陣山」がいなければ、残っている敵空母に止めが刺せなくなる。

美御は英を勝たせたかった。同じ女性の乳房から乳を授かり成長した義兄弟だから一一との意識ばかりが理由ではない。彼は英を恋い慕っていた。人前では英の立場を慮って「義姉上」と呼ぶが、心の内では生涯唯一の愛情を捧げる相手だと決めていた。

愛した女性のために戦う話と言え、洋風の冒険譚（ぼうけんたん）を思わせる。銀色に光る甲冑（かっちゅう）に身を包んだ騎士（ナイト）が、姫君のために命を賭して戦場に赴く一一というあれだ。時代は移り変わり、騎士道精神（ロマンス）が戦場に見られるような事はなくなりつつあるが、その精神を有する者は未だにいる。いや、もしかしたら空鉄で形成された航空機こそが、この時代の甲冑なのかも知れない。

「焦りは禁物ですよ」

ふと無線を通じて、そんなどこか呑気さを感じさせる声が響いてきた。一体誰だと美御は考えて、声音から気づいた。喜連川少佐一一「翔龍」戦闘機隊隊長を務める人物だ。物腰の柔らかな接しやすい人で、艦内でも人気がある。

「少佐」美御は応じながら機体を蛇行させている。

射撃時以外は機体を直線的に飛ばすな一一それは戦闘空域で遵守されるべき事柄だからだ。判り易い一一言い方を変えれば未来位置を読まれやすい飛び方をしていれば、どんな機体でも簡単に撃墜されてしまうのは、ある程度の経験を持つ飛行士ならば皆が理解できた。

「敵にしても母艦の半分を潰されています。戻った後の方が面倒なはず。無理に撃墜を狙う必要はありません」

敵機動部隊直掩隊との戦闘は、瑞穂側の圧勝に終わっていた。だから戦果確認をきちんと行う余裕があった。敵は空母の六隻中三隻を撃破されていた。何隻が沈没に至るかどうかは判らないが、敵の海上航空戦力が半減したのは確かだ。戻った後の方が面倒になる一一着艦できなくて海上投棄される機体もそれなりの数になる一一のはまず間違いないと思われた。

「はい」美御は頷いた。友軍機最大の脅威である敵戦闘機を撃墜する事が、味方のためになるのは確かだが、そのために護衛そのものが疎かになったら意味がない。戦慣れしているとは言え、彼にも若さがある。頭に血を上らせてそれを失念していたようだ。

そんな会話を交わしている間にも、4号艦上戦闘機と「紫風」隊の戦闘は続く。機動部隊が攻撃を受けた際に、「幻の艦載機隊」一一彼らからすれば、そう解釈するしかない一一を追いかけ回し、その挙げ句に母艦を攻撃されて、恥をかかされた者たちと、今は何を置いても母艦へと戻り、状況の変化に対応できるようにしたい一一と考えている者らとでは、自ずから気迫が違う。

勝ち戦にある者は、勝利の美酒に酔いたいのために、生命を惜しむ。一方、負け戦でここで何としても勝たねばならぬと、我が身を捨てて戦いを挑む者らは、文字通りの死兵だから、無茶をやる。その無茶が勝ちつつある者を怯ませ、死へと追いやる材料になるのだ。

これは個人的な資質とか兵の練度に関係のない、戦が持つ法則の一つである。指揮官にしても、自分の命令に従って勝利を収めた兵たちを無事に故郷に帰してやりたいとの心理が働くものだから、損害が出やすい戦法を帰路に使いたくない――との心境になる。生命を惜しむ事こそが、時として一で済んだ損害を二にも三にもしてしまう原因になるのが、心のどこかで判っていないながら。

今の瑞穂側がそれに近かった。同時に出発した七航戦所属機もまた、空母四隻に雷撃成功――との報せを発していたから、何としても生きて還り、勝利者の側に身を置きたかった。それが戦争という巨大な機械、その歯車にもならぬくだらない事だと判っていても。

いや、くだらないからこそ価値があるのかも知れない。いつの世にも世間的な名誉、自身が自身であるための誇りを護るために、命を投げ捨てる者は多い。

戦闘機隊にしても、ただ自分が生き残れば良いのなら、弾薬や燃料の不足を理由に、翼を翻せば済む。航空機は万全の整備をしても、途中で発動機不調（エンジントラブル）を起こし、墜落するというのは、よくある事。まともに動けもしない状況で戦闘継続など出来るはずもない。航空部隊に敵前逃亡が認定されにくい由縁（ゆえん）である。

しかし艦載機搭乗員は、皆が勇者足る事を希望して志願する。卑怯未練と思われる振舞を生理的に嫌悪し、臆病者と罵られるぐらいなら、戦って死んだ方がましだとばかりに、猛然と殺し合う。勇敢な精鋭程早く死ぬ。

その悲しむべき伝統が、ようやく4号艦上戦闘機隊を蹴散らし、帰路につこうとした「紫風」隊にも当てはめられる時が来た。無理を承知で彼らを追撃してきた2号艦上戦闘機隊が追いついてきたのである。

激戦は戦場で戒められるべき時間の浪費を招く。もし4号艦上戦闘機隊の数がもう少し少なければ――邂逅があと僅かでも遅れていれば、別の展開を迎えられただろう。しかし現実都合が悪いからと即座にやり直せる机上演習とは違う。最悪と思われる展開を迎えても、それと正面から向き合わねばならぬ。

――如何に旧式機ばかりとは言え、これは……！

美御は歯噛みした。航空機は機体性能も確かに大切だが、必要な時に必要とされる数を揃える事もまた重要視されている。「航空機とは数である」との極言を口にする者までいる程だ。

こちらは二度にわたる4号艦上戦闘機隊との戦闘で、弾薬を消費し、疲労をため込んでもいる。そんな時に一〇〇機近い敵戦闘機と戦えと言われても、どうにもならない。否が応でも死を意識させられる。

とにかく、「紫風」で足止めをして艦爆や艦攻を――と美御は勇気を奮い起こして戦闘を決意する。そんな彼の心情を知ってから知らずか、喜連川がそれを遮るように命令を発した。

「『翔龍』戦闘機隊第一中隊はこの場に残り殿軍（しんがり）を務めよ。その他の者は友軍機の護衛をしながら後退すべし」

何だって――美御は罵りに近い呻きを、喉奥から発した。僅か一〇機の一――いや、戦闘による消耗を計算に入れば、それすら定数を満たしていない部隊が、殿軍を務めるなど、全滅するために戦うようなものだ。

「少佐、自分たちも――」

美御は間髪入れずに叫んでいた。護衛対象さえ無事ならば、自らの身命はどうなっても構わない――彼は戦場に於ける興奮、戦う者に必要とされる、ある種の崇高な理念に基づいた行動を、反射的に求めている。

それは絶望感が周囲を包んだ戦場では、何よりも尊い心理反応であったのかも知れない。

だが――

「駄目だ。他の部隊が残るのは許さん」

喜連川は美御の申し出をきっぱりと拒絶した。日頃は彼自身が強圧的にならぬようにと心がけている丁寧語は、この時ばかりは吹き飛んでいる。彼は愕然としているであろう後輩相手に続けた。

「君は『赤星』や『陣山』に乗っている連中の面倒を見てやれ。帰り道とは言え、裸では彼らも不安だろう。それが君の役割だ」喜連川は優しさすら感じさせる微笑みを浮かべていた。

「少佐」美御はもう一度何かを言おうとした。

「敵が追いついてきた。さよならだ」喜連川は通信機に手を伸ばした。「君の幸運を祈る(グッドラック)」

通信が切断された。会話が途切れた。「翔龍」戦闘機隊第一中隊が、追い縋ろうとする2号艦上戦闘機目掛けて突進を開始した。それに合わせて、残っている戦闘機隊の面々が、最先任である美御に対し、少佐の犠牲を無駄にはなりません。急ぎましょう――と撤退を促した。

美御にも、何が大事なのか、損得とは何なのかは理解できている。このまま戦闘機隊が全滅するまで戦って、自己満足の果てに散るよりも、一部を貪欲な神への供物として捧げ、残りが母艦に帰り着いた方が、遙かに好ましいのは承知している。

しかし、誰かの犠牲の果てに自らが生を拾うのは気に入らなかった。彼は英と親しい間柄にあるが、最悪の貴族的思考法――他人が自分のために奉仕するのは当然で、相手が生命を捨ててさえ、それに心を震わせる事がない――とは無縁の人物だからだ。

訳の判らない叫び声を上げて、敵機の群に突入したい衝動に駆られたが、それは無責任程度では言い表せない行為だ。乳飲み子を道端に置き捨てて、何処へか逐電（ちくでん）する莫迦親とどう違うのか？

戦闘機隊がちゃんと護ってくれるのか、不安だ――と言いたげな艦爆・艦攻搭乗員らの顔が脳裏に浮かんだ。彼らとて同じ部隊に所属する仲間。見知っている顔も多い。彼らの家族に自らの我儘を通した結果、死なせてしまいましたと、僕は言えるのか？ 畜生！

「了解した」美御はあらゆる感情を押し殺した声で応じた。「友軍機を護衛しつつ、我々は撤退する」

既に4号艦上戦闘機は組織的な抵抗力をなくしていた。彼らにしても連日の戦闘で疲れ果てているのだ。包囲網は形成される前に突き破られ、翼や胴体に瑞穂軍機である事を示す赤丸を付けた航空機の群は、それぞれの母艦へと無事に撤退無事に撤退した。

彼らの耳に、一機また一機と撃墜される度に、無線機から響く雑音（ノイズ）が強く残り、戦場から撤退して尚、その無念を告げるかのような機械音は消える事はなかった。



敵艦隊への攻撃を終えた艦載機の群が、傷つき疲れ果てた身体をいたわる小鳥のように、一機ずつ母艦に降りていく。翼や胴体に弾痕（だんこん）がある機体が圧倒的に目立つ。激戦を経た後なのが一目瞭然だ。

英は通信参謀——美星から各航空部隊が発した通信内容の一部始終（あらまし）を受け取り、帰還してきた各編隊長から戦果と損害に関する報告を受け、難しい顔をした。状況を一言で言い表せないのである。

「七航戦が攻撃した分と合わせて、敵空母を七隻撃沈破したが、攻撃隊も無視できぬ損害を被った——か」

二航戦所属機は、戦闘機一七機、艦爆一二機、艦攻八機を撃墜された。送り出した数は一二〇機だから、実に三割を超える消耗率であり、敵機撃墜五〇機以上——という数字を鵜呑みにしても、手放しで褒められたものではない。

生還機にしても、被弾機が大半だ。一般に戦闘は戦死者一に対し負傷者が一から三出ると言われる。つまり全体の三割が戦死となると、その部隊はもう組織として成り立たない。三の二倍は六。全体の九割が死傷者で、一割だけが無傷と来たら、まともな指揮官であれば、自分の部隊がもう書類の上でしか存在しない事を、素直に認めるだろう（全滅を命じられた者たちであれば、また別の感想を抱くかも知れないが）。

「七航戦の損害も似たようなものです」鶴賀が告げた。口振りは患者に重病である事を宣告する医者のような。「出撃機数六八機中生還機は五四機——二割がやられています」

敵直掩機による妨害を殆ど受けず、帰路にも立ち塞がるものがなかったにもかかわらず彼らの損害もまた大きいのは、旧式機ばかりで編成されていた事による。瑞穂海軍が初めて採用した全金属製戦闘機である「清風」と複葉機である「烈山」では、一発の被弾が命取りとなりかねないのだ。

「直ぐに動かせる機体の数に関しては——訊くまでもないのだろうな」英が嘆息混じりに言った。

五四機の半分だとすれば、二七機。直掩任務に就いていた者を全機投入すれば、五五機になるが、魚雷か爆弾がなければ、敵艦隊への打撃力は皆無に等しい。輸送船ですらも銃撃だけでは沈むまい。

「しかし敵も相当な打撃を被ったのは、搭乗員の報告や敵信傍受から見ても間違いありません」美星が言った。彼女は第二次攻撃を促している。「残った機体をとにかく掻き集めれば」

「攻撃隊は喜連川少佐を含む、編隊長級の搭乗員を何人もなくしている」英は即答を避けた。

これは事実だった。「翔龍」戦闘機隊隊長である喜連川兼基少佐を筆頭に、二航戦は中隊長を四人も戦死させている。歯抜け状態の中隊を誰に指揮させるのか。

勿論、軍隊は人員の消耗を前提に造られている。正規任命の指揮官が戦場で斃れば、次席指揮官が引き継ぎ、それもまた斃れば次の者がとばかりに、連鎖は続く。

しかし育成に最低半年は必要とされる航空機搭乗員を消耗品代わりにしていたら、人的資源の枯渇を招く。素人が素人を教育、または指揮するような状態に陥ったら、もはや挽回は不可能であろう。

「敵空母さえ潰せば、制空権を喪失した敵は、侵攻作戦そのものを断念するかも知れません」

今度は参謀長が告げた。英はその言葉に眉根をぴくりと動かした。それは悪魔の誘いだった。劣勢を承知で戦闘を始めたのに、気がつけば単独で逆転の可能性を掴んだ指揮官が夢見る話。だが、欲をかいた時、大抵の者は地獄の底へと続く釜の蓋を開けてしまう。程々で満足しておけば無事で済んだのに、無茶をした結果、全てを喪失した者は多い。

「相討（あいうち）覚悟ならば仕留められるかも知れません」鶴賀が畳み掛けるように告げた。

「提督、ご決断を」

周囲から一斉に視線が注がれた。英は腕組みをして瞑目した。投入機数一八八機中五一機喪失。これは全体の三割に近い損耗率だ。もし攻撃を続行して次に似たような被害を被れば、二航戦と七航戦は丸裸――航空戦力なき航空戦隊となる。

――参謀たちは攻撃の続行を希望しているが、この損害では厳しすぎやしないか……？

それに気になる事もある。航空攻撃は歩兵が軸となる陸戦とは異なり、展開が早い。時速数百里で行動中に目にしたものが、果たして真実なのか？ 願望が入り交じったものを捉えたとしても不思議はない。

自身が戦闘機搭乗員出身の英は、戦果確認の難しさを肌で知っている。複葉機ですらも時速に直すと二〇〇里を超える速度で動く。一瞬見えただけの光景から全てを察するのは不可能だ。敵空母七隻撃沈破、この戦果は半分ほど割り引く必要があるのではないか？

英は自分の部下たちが虚偽報告を重ねる虚言家（うそつき）だとは考えていない。ただ、一般的な軍事原則から、戦果過大を疑ったのだ。制空権確保に成功し、戦果確認をきちんと行う余裕があったようだが、煙突から立ち上る煙を火災によるものだと見誤る者は多いので、頭から信じるのは危険だ。

どうにも決めかねていると、砲声が響いてきた。怪訝に思い音がした方角に顔を向けると、輪形陣外輪部を形成する駆逐艦群が、近づいてきた敵偵察機に対し発砲したのが確認できた。どうやら、対空電探の眼をかいくぐり、雲に潜んでいた奴がいたらしい。

次いで、駆逐艦と軽巡が、慌てて走り回り、周辺海域に爆雷を投げ込み始めた。見張員が「雷跡接近！」を遅ればせながら告げる。魚雷は見当外れな方角を進んでいた。あれなら空母群――「翔龍」「碧龍」「飛燕」「隼燕」に直撃する心配はない。重巡部隊も無事であろう。

だが、この二つの出来事は、好ましからぬものと言えた。英は苦虫を噛み潰したような顔をして呟いた。

「敵に位置を知られたか……」

一方的に攻撃できたのも、全ては敵に接近を察知されずに済んでいた事による。自軍の居場所を敵に知られたからには、以降は攻撃するにしても、敵からの報復を覚悟する必要がある。

「飛燕」「隼燕」は元が客船であるから、艦速が遅い。敵が本気になり追撃をかけてきたら、巡洋戦艦や重軽巡に迫られたら、そのうちに追いつかれる。彼女らを置き捨てて逃げるなど論外

だし、敵空母が半分は健在だとすれば、やはり航空戦力的にも不利だ。

「やむを得んか」英は諦めたように告げた。「撤退しよう。今が潮時だ」

「そんな！」参謀陣が異口同音に叫んだ。

「損害が酷すぎる。敵機動部隊と正面から殴り合える戦力は、もう残されていない。それに――」

海軍総司令部からの命令は、あくまで友軍の転進支援と民間人の脱出支援であった。「敵艦隊の撃滅」あるいは「好機あらば損害を顧みず攻撃を続行せよ」というものではなかった。

英の言わんとしている事を理解した参謀たちは、複雑な表情を浮かべた。血気に逸る若い司令官を諫める予定のはずが、気がつけばあべこべになっていた。戦果拡大――歴史上に名を残す好機だと、気が逸っていた。

「やはり、無理ですか？」未練だ――とばかりに、楠が参謀を代表して訊いた。

「仮に空母を全部潰せても、戦艦が残る。第一艦隊が参戦機は撃沈破したようだが、残り七隻を我々だけでどうにかするのは不可能だよ。巡洋艦五隻と駆逐艦八隻では手に余る。敵には無数の補助艦艇もいる事だし」

全ては数の差だと言われてしまうと、誰も反論できなかった。精神力で物理的なさを覆すのにも限界はあるし、初めから無理な作戦だと承知の上で話を進めたのだ。

がくりと肩を落とした参謀陣に、英は慰めるように、

「敵は戦力再編の必要が生じるだろうから、輸送船団の安全は多分これで確保できるよ。我々は任務を完遂したんだ。何を恥じる事がある？ 後は内地にまで艦隊を無事に戻せば良いだけだ。胸を張って凱旋しようではないか。我々は負けはしなかったのだから」

そう告げた。それは的を射ていた。第一東遣艦隊は確かに負けなかった。損失は艦艇に限れば皆無で、搭乗員の戦死者数にしても、一〇〇名に満たない。戦争がこの先も続くのであれば、復仇の機会はある。

「攻撃隊の收容が完全に終わった後、艦隊進路を内地へ向けろ」英は参謀陣が努力して気分を変えたのを認めると、峻厳（しゅんげん）さすら感じさせる声音で告げた。「当艦隊は任務遂行を確認。内地へ戻り後事に備える！ 第一東遣艦隊の爬間諸島防衛作戦は――」彼女は一瞬口籠もる。唾を呑み込んだ。叩きつけるように叫んだ。「これを以て終了とす！」

第一東遣艦隊の諸艦艇は、来た時と同様に一隻も欠ける事なく、帰路についていた。その周囲を夕闇が包み込んでいる。機動部隊にとり最大の脅威である空撃——敵機の襲撃を受ける可能性は激減している。敵味方共にまともな夜間対艦攻撃装備を持たないから、敵機の襲撃は「可能性は絶無ではないが、実害に乏しい行い」だと解釈されている。

しかし美御はその事——自分たちの安全が確保された事を、手放しで喜ぶ気にはなれない。卑怯未練な振舞をしたのではないか——との思いが、昼間にした行為を脳裏の中で再現すると、溢れてくるのだ。

美御は「翔龍」の飛行甲板にいた。本当は航空機格納庫で愛機の補修（メンテナンス）をしたかったのだが、整備員たちから止められた。「こんな穴だらけの機体を、素人に直させる訳には行かない」——彼らの口調や態度は丁寧だったが、搔い摘んで言えばそうなる。

もっとも、彼らの主張も頷ける面を有していた。美御が乗っていた「紫風」は、翼や胴体に無数の弾痕が刻まれていた。激戦を経た後なのは誰の目にも明らかで、専門家でない限り、手に余るような損傷を受けていたのだ。

恐らく、「紫風」以前の機体——「清風」などであれば、途中で分解し、母艦には帰り着けなかったろう、整備員らはそう評した。彼らは美御の腕前を莫迦にしているのではない。一〇〇機以上の敵戦闘機と出くわしておきながら、多数の敵機を撃墜して、無事に生還して見せた技量と強運を褒めていた。

「大尉、貴男は昼間の戦闘でお疲れでしょう。こいつを直すのは俺たちの仕事です。貴男は早く休んで英気を養ってください」

最後にはそう言われて、退場を余儀なくされた。彼らの周囲には、似たような有様の「紫風」や「赤星」がたむろしていた。敵に肉薄して攻撃する機体は消耗が激しい。「陣山」は敵戦闘機に近づく必要はないし、敵艦目掛けて急降下もしなかったのも、被害が比較的少なかったようだが。

そうした訳で、美御は「翔龍」の飛行甲板上にいる。士官室（ガブルーム）に行くのはどうにも気が進まず、何か気分を変えられる場所はないかと考えて行き着いたのがここだった。

昼間、どうにか母艦に帰り着けた時には、卒倒しそうなほどの安堵感を覚えたはずなのに、今は強烈な疎外感がある。誰かに邪険にされた訳ではない。最小限の損害で撤収に成功した彼を褒める者すらいた。

だが、最小限とは何を指して言うのか？

攻撃隊の護衛として随伴した「紫風」は、その四割以上が未帰還だった。残存機にしても無傷なものは数える程しかなく、負傷した者は多い。手や足を吹き飛ばされた者は、どうなるのだろうか？ 廃兵になるのではなく、機械式の義手義足を軍から支給されて軍務に復帰するのだろうか？ だとしても生まれながら持っていた身体の一部は二度と戻ってこないのだ。

美御は幸いにして無傷だった。戦慣れしているおかげもあるのだろうが、機体性能に助けられた面も多分にある。敵機――4号艦上戦闘機の銃撃を何度も浴びたが、防弾硝子に覆われた操縦席、防御版を張り巡らせたタンクはそれに耐え抜き、彼は掠り傷一つ追わずに済んだ。

――指の一つでも飛ばしていれば、こんな気分にならずに済んだのだろうか……？

歯噛みしながら、美御は自信の右手を視た。と同時に忘れたいが忘れてはならない記憶が蘇ってきた。寝台に寝かされている英の姿。彼女の右眼部分は包帯をグルグルと巻かれていた。彼女は左眼で彼の姿を認めると、手術後の体力の戻らぬ身体で呟いた。美御が気にする必要はないさ。全ては私の不注意だ。

どうしようもない自己嫌悪の念に美御が包まれかけた時、不意に彼の背に声をかける者がいた。

「大尉、何をしてるんだ？」

振り返ると仁科少佐が立っていた。暗がりだがもう眼が慣れているのと、同じ艦載機搭乗員だから、彼が身に纏うている独特の気配を感じられた。彼が本来籍を置いているのは「碧龍」なのだが、愛機の損傷が思いの外激しく、とにかく着艦を急ぐ必要が生じ、降りた場所がこの「翔龍」なのだった（艦載機隊の収容作業は慌ただしく進められ、その逆――『翔龍』所属機が『碧龍』に降りてそのまま、という事例も見られた）。

「仁科少佐――」美御は視線を暗闇越しに仁科に向けた。その際に相手に気分を悟られぬよう、表情を消した。

「どうにも寝付かれませんか」

誤魔化すように付け加えられた言葉。顔には言い訳のように微苦笑が刻まれた。無表情を装ってから急に笑顔を作ったので、顔に引き攣りがいいのか気になる。

「俺もだ」仁科は笑い返した。「愛機の整備でもしようかと考えたが、整備員の連中に追い出された。『これは自分たちの仕事です』と言われてな。まあ、穴だらけにされた直後だったから、俺の手にはどのみち余ったかもしれんのだが」

「少佐もですか」美御は同族を見つけた安堵感を覚えた。「自分も愛機を整備しようとしたら、仕事を取るなど叱られました。まあ発動機の整備ならともかく、穴だらけの機体の修復作業となると、彼らに任せた方が早いのでしょうかけれど」

「今日は激戦だったからな」仁科は懐から煙草（たばこ）を取り出した。紙巻煙草（シガレット）の『栄（さかえ）』だ。瑞穂陸海軍の間で広く愛煙されている。彼は燐寸で火を点けてそれを銜えた。娯楽の乏しい軍隊では、喫煙はその貴重な遊興に値する。心肺機能云々を重視される航空兵でもそれは変わらない。

上役が煙草を吸おうとしている時、それに火を点けるのは、娑婆も軍隊も変わらない。美御は煙草を吸わないが、燐寸は持っている。そうしようとしたのだが、仁科は素早く自分で済ませてしまった。

手持ち無沙汰の感のある美御は、懐に差し入れた手を引き抜くと、何とも言えぬ顔をした。

そんな彼に、仁科は何食わぬ顔で問いかけた。

「何か思うところがあるのか？」

その質問に、美御は表情を強張らせた。気にしている事の核心にいきなり触れられると、大抵の人間がこうなる。勇敢ではあるが、人生経験が不足気味な彼もまたその例外に漏れない。

戸惑っている美御に、仁科は続けた。

「言いたくないのなら、それでも構わないが、誰かにぶちまけた方が気楽になる事もあるぜ」  
そう促されると、黙っている事を耐えられなくなる。

美御はぽつりと――感情を迸（ほとばし）らせぬように、細心の注意を払いながら、考えていた事を漏らした。

「今日の戦闘――もう少し別のやり方があったのではないか、と考えていました」

「英殿下――戦船提督の命令に疑問が？」

「そうではなくて」僕自身は、あの人に死んでくれと直に言われても、それが望みであるのなら、喜んで従うだけだ――と胸中で叫びながら続けた。「空戦。攻撃隊の護衛について『紫風』隊は、半分以上が母艦に帰れませんでした。何か別の方法を用いれば、もう少し被害を減らせたのではないかと――と」

「仮定の問題には答えられないな」仁科は煙草を吹かした。紫煙が闇の中を立ち上る。

「実戦は演習とは違う。気に入らない結果が出たからと、失敗した分を抹殺したり、うまくいくまでやり直す、という気紛れは許されない。出撃させた味方機全てが叩き落とされようとも、受け入れられなくても、結果は曲げられない」

「それは僕も判っています。でも――」

自分でも説明のつかない激情に、美御は包まれかけた。自分に後事を託して敵機の群に突っ込んでいった喜連川とその部下たち。誰かの自己犠牲の上に築かれた、自分の生還と任務完遂の名誉。今日一日の出来事が、脳裏で渦を巻いて、頭を搔き回す。

「大尉は任務を遂行しただけだ」仁科は銜えていた煙草を海に投げ捨てた。「喜連川の最後の命令に従い、艦爆や艦攻の護衛をしながら無事に生還した。それに何の問題がある？ 命令とは命じた者が全責任を負うのだ。命じられた者では決してない」

命令の善悪を自身で判断し、従うかどうかを考えさせる軍隊も中には存在する。しかし瑞穂陸海軍の間では、仁科が口にした考えをする者の方が圧倒的に多かった。陸海軍の服務規程にもその旨が記されている。多くの者からすれば、一般常識と法律を照らし合わせて自らの行いを律すると言うのは、小難しい話だとの印象を抱くが、皆がそうだと考えて国もそうしろと言っているのならば、理解や同意は難しくないだろう。

「ですが……！」

「誰かが殿軍を務めなければ、被害はもっと増えていただろうさ。そうでなくても、戦闘機隊が全滅するまで戦った方が良かったと思っている奴なんて、うちの部隊にはいない。幾ら直掩隊が別に控えていると言っても、艦隊の傘がなくなるのは怖いからな」

「……………」

極端な割り切りは、生きている上で、必ず求められる事柄だ。一〇の被害を出さないために一を切り捨てる。無秩序な惨劇を避けるために、計算された損害を生み出し、それで損失を抑える

そうした話は、軍隊では別段珍しくない。いやむしろ日常の範疇だろう。誰それが足をくじいたから、進軍は停止——などと言い出したら、どんな部隊でも一日に一里も進めないだろう。弱った者を切り離す、あるいは弱っている者を逃がすために、元気な者が無理をするのは当然なのだ。

「坊主、大人にはいろいろあるんだよ」仁科は沈黙した美御の頭に手を置いた。「喜連川が帰ってこなかったのは、確かに俺も衝撃だったさ。でもな、お前さんが残った連中をきちんと護衛したからこそ、生きて帰れた奴も多いんだ。そんなに気に病むなよ」

ぽんぽんと、子供をあやすような感じに、仁科は美御の頭を撫でた。どこか乱暴な感じもするが、不快な感じがしなかった。「兄」と呼べる存在がいたとしたら、こんな感じなのだろうか——と漠然と思う。

「判っています」

「だったら気分を変えろ。お前さんがしけた顔のままだと周りも不安がる。将校は胃がよじれている時でも、平然としなければならん。兵学寮でそれはお互いに叩き込まれたはずだ」仁科は美御の頭から手を離した。踵を返す。

「俺は酒でも呑んで寝る。戦場海域から離れたのなら、艦爆の用事はもうなさそうだからな」

遠ざかる仁科の足音を聴きながら、あの人なりに気を遣ってくれたのだろうな——と美御は思った。艦爆隊は基本的に悲惨な部隊だからだ。急降下という独特の攻撃法は、必然的に敵に肉薄する必要があり、激しい対空砲火に晒される。味方機が絶対の制空権を提供してくれて尚、損害が酷いのは、そうした理由による。

だが、それだけに艦爆搭乗員は勇敢だ。戦闘機隊よりも肝が太い者は大勢いる。仁科もその一人だ。昼間に死にそうになりながらも、他人を気遣えるだけの余裕がある。

辺境での海賊討伐は、飛行時間の増大を招き、美御の練度を大幅に向上させたが、今日のような悲惨な消耗戦が起きる事はついぞなかった。戦争が続くにしても、聯合帝国軍の力量を思えば、航空部隊は激しい損耗に幾度も直面するだろう。それに耐えられるだけの精神的な逞しさもこれからは要求される。

しかし今すぐに鋼鉄のような精神を持つのは無理だ。何か気分を変えられるもの——縋れるものはないか？ ある。一つだけ思いついた。自己嫌悪の念が再び込み上げてくるが、他にどうしようもなかった。

何かを振り払うかのように、天を仰いだ後に、彼もまた飛行甲板を後にした。行き先は一つだけだった。

## 2

軍艦には私的に用いられる空間は殆どない。機関部が艦体の半分程を占める駆逐艦は言うまでもなく、戦艦や正規空母のような大型戦闘艦艇でも、艦長クラスの高級乗組員でない限り、自分の部屋（プライベート・ルーム）など持たない。

その貴重な例外は、艦隊司令官も含まれる。第一東遣艦隊司令官と二航戦司令官を兼ねる英は、長官室にいた。従兵の姿はない。「疲れたから休む」と言い、退がらせている。

正規空母ともなると、艦隊司令長官クラスが使用する事を前提にして、長官室を造らせている

。国外からの賓客を招く事も可能性としてはあるため、調度品にも気を遣われている（海球の軍艦は、ラティウム条約以前から開放的な事で知られ、海外を表敬訪問する際は、現地の報道機関（マスコミ）関係者や一般人を招き、御馳走（ごちそう）を振る舞う光景も度々見られた）。

名のある画家が描いた油絵、水晶（クリスタル）のような輝きを放つ姿見、黒光りする海外製の洋卓（テーブル）、踏めば脚が沈み込みそうになる緋色の絨毯（じゅうたん）――そこは高級ホテルの貴賓室（スイートルーム）を連想させる。だが部屋の主はそれらに快適さを感じているようには見えない。

彼女の関心は洋卓の上に載せられている葡萄酒瓶（ワインボトル）と緋色の液体に満たされた酒杯（ワイングラス）に注がれていた。

葡萄酒は讚州県に永住権を得た異民族部隊――瑞穂軍の外人部隊に相当する――出身の将校が、退役後に始めた農場で造られたものだった。讚州県は沿岸部では海軍を相手にした商売――工業が盛んなのだが、内陸部に行くと山が多いため、農耕が営まれている。彼ら――退役軍人が生産したものは、縁深い軍が殆ど購入する。鉄をいじるか土をいじるかだけで、水が流れ込む先は同じ、とも言えたが。

英は酒精（アルコール）の度合いが高いその液体を、既に瓶の半分程干していた。酒に格別強いのではない。吞まずにはいられなかった――それだけの話だ。酒は現実逃避あるいは飲み上げてくる何かを抑えるために必要とされる。

もう一杯吞もうか――と瓶に手を伸ばした時、扉を遠慮がちに叩く音が聴こえた。艦隊の指揮は参謀長が代行している。敵襲以外は呼びに来るなと命じていた。敵が来たのなら周りも騒々しくなるはずだし、扉を叩く音ももう少し慌ただしくなるはずだ。誰が来たのかは直ぐに想像がついた。

「美御か。入れ。鍵はかけていない」

短く告げた。「失礼します」の声と共に、美御が入室してきた。英が何をしていたのかを彼は確認すると、その端正な顔を僅かに顰めた。酒臭い――と言外に述べている。

「吞んでおられたのですか？」

「うん。見ての通りだ」英は酒精に喉と頭を灼かれた者特有の態度を示した。「美御も付き合いよ」

促されるままに、椅子を引いて、洋卓を挟んで向かい合う形で座る。瓶に張られている商標（ラベル）を視た。美呉鎮守府のある讚州県で生産された葡萄酒――その中でも特別に酒精度数が高い十万十（とまん）産のものだと気づく。酒に強い者でも一本を丸ごと開けると引っ繰り返る事も珍しくないと言われる一品だ。

「身体に毒です」と言いかけて、やめた。英は酒精中毒ではない。普段はあまり吞まない。そんな彼女がわざわざきつい酒を用意した心情を察する。別の言葉が唇から紡がれた。

「悔しいのですか？」

「何が？」英はとろんとした眼で睨んでくる。

迫りに欠けたその視線、艦隊を叱咤激励する時の姿からは想像も出来ないそれを真正面から見返しながら、美御は続けた。



「完全に勝てなかった事が」

核心を突いたその一言は、英を沈黙させた。眼を瞬く。

暫しの無言。それを破ったのは英からだった。

「何を莫迦な」彼女は誤魔化すように笑う。「あれ以上どうできたというのだ。艦載機隊は大打撃を受けていた。へたに長居をしていたら、敵の逆襲を受けて、今頃は海水浴を余儀なくされていただろう」

「僕は参謀方とは違います」美御は英の乾いた笑いを遮った。「貴女に立てた忠誠の誓いは戦船宮家との繋がりによるものではなく、僕個人が望んで立てたものです」

「美御……」

美御は英の酒精たゆたう眼を強く光を宿した眼で視た。

「僕の前で飾る必要はありません」

そう彼が諭すように告げると、英の中で何かの糸が切れたのであろうか、押さえ込まれていた感情が俄に顔をもたげ、活火山のように爆発した。彼女は吼えた。

「悔しいに決まっているだろう！ あと空母二隻分の航空戦力さえあれば、敵空母を一撃で綺麗に一扫できた！ 攻撃隊に随伴させる『紫風』をあと五〇機も増やせば、艦載機隊があれ程の損害を被る事もなかった！ もし事の初めから動かさせたのなら、かくも無残な敗北を第一艦隊に喫させる事もなかったんだ！」

それは第二次攻撃中止を命じて以来――いや、第一艦隊が凶上演習上で壊滅してからずっと考え続けていた事なのかも知れなかった。英は艦隊司令官として行動するのは今回が初めてだが、修羅場でも決して挫けない精神を持つ。本当に最初から彼女が指揮を執っていれば、勝てなくても、ああも悲惨な敗北はせずに済んだのではあるまいか？

「……僕の立場からはそうだと言いかねますが、可能性としてはありえたかと思います」

美御は単純な追従は避けた。巧言令色（こうげんれいしょく）の類いを英は嫌う質であるし、荒れ模様な彼女に無意味な慰めの弁を向けても、怒りを余計に煽るだけだと、長年の付き合いから理解している。

「可能性――可能性か。成程。全てが終わった後ならば、どんな話もそう言うしかないな！」

英は洋卓を叩いた。その拍子に瓶が傾く。「いかん」「いけない」の言葉がかぶる。伸ばした手が重なり合った。英は左手。美御は右手。咄嗟に反応できた部分が二人の絆を分かつ壁のように感じられた美御は、気まずさを覚えた。

そんな美御の心情を、英は酒に酔っていながらも気づいた。いや酔いがきついからこそ気づいたのかも知れない。彼女は義弟の右手の甲を撫でると、甘く囁くような声で彼の来訪目的について触れた。

「……美御、晩酌（ばんしゃく）のお相伴（しょうばん）に預かるためだけに、ここに来たのではないのだろう？」

「いえ、そんな事は――」自身の浅ましき、そこについて触れたがらない潔癖さを持つ美御は、ただ話をしに来たのだと否定しようとした。だが、その前に英が英からこう告げられた。

「美御も私の前で飾るなよ」

その率直な言葉は、美御のうちに眠る獣を揺り動かす効果を生んだ。確かに言われた通りなのだ。この場には他に誰もいない。何をしようとも口外される心配はない。彼はその事に気づいた。いや、夜中に女の部屋に一人で足を運んだ段階で、気づいて然るべきなのだ。

「僕は――」

右手の甲から英の左手は離された。直後に手首を掴まれる。ぐいと引き寄せられた。強引に口唇（くちびる）が重ねられる。酒の香りと共に舌が差し込まれる。絡められた。唾液が送り込まれて、反射的に呑み込んだ。

一〇秒程それが続いた後に、英の方から唇を離した。酒精以外の理由で真赤（まっか）になっている義弟の顔を、いたずらに成功した子供のような表情で見やる。「奇襲成功」と楽しげに口にした。

「義姉上――」

「酒に酔っているからではないぞ。まだ素面（しらふ）の部分がある。義姉（あね）として落ち込んでいる義弟（おとうと）の気分を変えてやろうとしているんだ」そう言いながら英は上着を脱いだ。

衣擦れの音が、呆然としている美御の前で響く。肌着がはだけられ、革帯（ベルト）の留金が外される。緋色の軍袴が、途端に音立てて床に落ちた。すると英の抜けるように白い肌が、外気に晒された。上下共に純白の女性用下着（ランジェリー）より扇情的なもの。

美御は椅子に腰掛けたまま、それを視た。英の豊かな胸の膨らみ、くびれのある腰、脂肪分が程良くついた滑らかな太腿（ふともも）――子供時分に一緒に入浴していた事を思えば、眼にした経験は幾度もあるのだが、少女の成長した肢体は、強烈に過ぎた。

自分の一部分が急激に膨張するのを、美御は自覚した。このままではいけない――とは今更思えない。かと言って即座に行動に移れない。迷いが心を焦がしているうちに、英が両膝をついて、彼の前に座っていた。軍袴の前留に手をかける。

遅しく起立したものが、女の手により引きずり出された。それは天を目指す勢いでピンと立ち、その内部には熱い血潮が行き来していた。

英に触れられた瞬間に、美御は声にならない声を上げた。自失しそうになる。どうにか堪えた。幾ら何でも触られた途端にぶちまけたのでは情けなさ過ぎる。笑われても仕方がない。

しかし英は、そんな余裕のない義弟にあざけりを込めた笑みを向けない。むしろ慈愛を込めた顔で言うのだ。

「無理をせずに自然に任せたらどうだ？ 辛いだろう」

義姉に――本来なら同席する事でさえ憚られる高貴な女性に、卑猥な真似をさせているとの自覚のある美御は、「幾ら何でも失礼です。義姉上、貴女の顔に思い切りかけてしまいます」と辛そうに答えた。

「私は別に構わんぞ」英はビクビクと震えるそれを握り締めながら、きょとんとした。「美御が私の口内に出したり顔にかけたのは、一度や二度ではあるまい。今更何を言うのか？」

「それは……」

「ただ出すだけではつまらんのか？ なら――」英は胸と胸の間に桃色をした突起物を挟んだ。

「紅葉合わせなら良からう。これなら私の身体を感じながらゆけるな」

英の柔らかな胸の感触を感じた美御は、反射的に呻いた。直接的な刺激は、口唇愛撫を受けた時の方が強いのだが、敬愛する義姉に、女性らしい部分を使って奉仕させている――との背徳感が、彼を燃え上がらせた。

美御の反応を楽しげに視た英は、突起物の先端、そこに唾液を垂らした。桃色の唇からつう――と伝い落ちるそれは淫らな粘液という感じがする。先程直接口内にそれを送り込まれた美御からすれば、成程甘露な液体に違いないのだ。

「化粧水(ローション)を使う方が滑りが良くなるのだが――別にいらなそうだな」刺激を受ける度に細かな痙(けい)攣(れん)を繰り返す肉茎の感触を楽しみながら、英は微笑した。

一般に生命の危機を覚えた後に、人は性欲が強く刺激されるという。絞首刑(こうしゅけい)に処された者が、死の瞬間に最大級の恍惚感(エクスタシー)を覚えているのではないか――との俗説は、彼が射精をしていることが多い事による。

美御にしても、昼間の戦闘で死の危険に直面したのは、一度や二度ではない。その瞬間は恐怖を感じた。だがそれを指揮官としての責任感でねじ伏せた。恥すべき行為――敵前逃亡をせずに済んだ。もしそんな真似をしていたら、英に合わせる顔がない。彼からすれば、義姉から軽蔑の対象として見られる事こそが、最も恐ろしい話なのかも知れない。

「それ以上されたら……僕は……」

美御は端正な顔を歪めた。苦痛によるものではないのは、彼の唇から漏れる吐息と喘ぎ声から察せられた。短時間のうちに達する気恥ずかしさが吐精を思い止まらせているだけだ。

「だから気にするな」英は女の唾液にまみれた男性生殖器に刺激を加え続けながら言う。「私の身体で感じてくれたのなら嬉しい。美御を他の女に渡したくはないからな」

「僕もです」美御は頬を朱色に染めながら同意した。「義姉上、僕は貴女を他の誰にも渡したくはない。僕以外の男とこんな真似を貴女がすると考えただけで、嫉妬で気が狂いそうだ」

「うん。義弟の性欲処理は義姉の務めだ」

そんな訳の判らない理屈を英が持ち出した時、美御は身体のうちから込み上げてくる怒濤に抗しきれず、遂に屈服した。甲高い声を上げながら、亀の頭部を連想させる部分から、白濁液を勢い良く迸らせたのである。

事前に予想されていた通り、それは英の顔面を白く、そしてまだらに穢(けが)した。見目麗しい美少女の顔に、最も男性的だと思われる液体が、淫らな、そして生々しい化粧を施したのである。牡(おす)の肉体は、一度の噴射では満足せず、二度三度とそれを繰り返し、彼女の顔をべとべとにした。

「……溜め込みすぎ」

「も、申し訳ありません……でも気持ち良かった……」

互いに荒い息を吐きながら、感想を漏らし合う。

これで済んだのかと言えば、そうでもないのは、勃起を続けている美御のそれが証明していた。

「やはり、このくらいでは満足せんか」

「済みません」

「口は詫びてばかりだが身体は正直だな」英は女性に刃物を突きつけた盗賊のような口振りだった。

「まあいいさ。今度は私も気持ち良くしておくれ」

そう言いながら、英は美御から少し離れると、下着の上下を脱いだ。文字通りの一糸纏わぬ姿となる。

英は瑞穂海軍の伝統——性別や階級を問わず、衛生のために股間部を剃毛（ていもう）する——に従い、脚の付け根とそこに続く部分には一筋の毛もない。覆い隠すもののないそこは、鮮やかさを感じさせる桃色をした峡谷（きょうこく）が刻まれていた。

「はい。義姉上」

ふらふらと夢遊病者のような足取りで、美御は英の方へと行く。義姉を他人に渡したくない義弟として始めた行為——酒の勢いを借りた上に土下座までしたら、英も同じ気分であったのか、案外簡単に同意してもらえた——であるためか、主導権はここでも英にある。だがそれは決して不快ではなかった。義姉も承知の上で疑似性交を楽しめるのであれば、何の問題もない。

英を組み敷いた美御は、既にぬるぬるとしている割れ目に逸物の先端を這わせた。陰核を刺激する。間違っって挿入してしまわないように、細心の注意を払いながら。

一度噴射しているので理性は残されている。彼はまだ後先考えない生き様が似合う——七歳だが、超えてはならない線があるのをわきまえていた。如何に互いが同意の上で沈黙を守っても、何が原因で問題が起きるのかは判らない。

今の関係を壊したくない——死が二人を分かつ瞬間が訪れようとも、決定的な破局を避けたいとの観念が、英と美御の間では成立していた。それは女性皇族とその乳兄弟と言うよりか、精神的な近親相姦者である事の後ろめたさがそうさせているのかも知れなかった。

「美御……御免ね、最後までさせてあげられなくて」

誰にも聴こえない小さな声で呟きながら、英は最も敏感な部分を卑猥な棒で強くこすられながら達し、小さく啼いた。そんな義姉の姿を見やりながら、義弟は本日に留めの絶頂を迎えた。

今夜も、結局最後の一線を越える事はなかった。

### 3

第一東遣艦隊が瑞穂本国を目指し撤退を続けていた頃、爬問諸島守備隊はその最後の時を迎えていた。陸海軍の総意が彼の地からの撤退にあるとは言え、最低限の時間稼ぎをする者は必要であり、その「運の悪い連中」が、西部帝家艦隊再編後に上陸してきた海兵隊との戦闘を敢行し、弾薬と食料切れを理由に降伏を申し出たのである。

ユリーシアはその降伏宣言を鷹揚（おうよう）と受け止めた。瑞穂艦隊の思わぬ反撃を受け、保有空母の半数以上を一気に撃沈破されるという苦汁を舐めた彼女だが、三〇〇〇からいた部隊が降伏時には一〇〇〇を割り込んでいたとの話を聴き、その敢闘精神を敵ながら天晴れだと褒め称えた程だ。

それは民草を統べる者としての慈愛の精神、その発露であったのかも知れない。彼女は指揮官として勇猛果敢であったが、それは殺人を愛する事と同義ではない。矢尽き刃折れるまで戦い抜

いた敵に対し敬意を抱けぬのであれば、そもそも戦争などすべきでないと感じていたからかも知れない。

だが、内心では忸怩たる思いがある。

爬間諸島沖海戦——世界海戦名は「親夫島沖海戦」である——の第一戦目は、苦戦しながらも勝利した。だが、第二戦目は敵に「勝ち逃げされた」との意識が強い。

こちらは僅か一撃で空母一〇隻中六隻をやられ、そのうちの四隻が沈没に追い込まれるという甚大な被害を受けたのに、相手は艦載機隊を除けば損害は皆無で、一撃を加えただけで風を受けたように姿をくらませた。

この時代、航空母艦は巡洋艦と同等の扱いを受けている。決戦時に使用される主力艦には違いないのだが、その喪失が大問題になる程注目されない——そんな存在だ。

しかしユリーシアは、弾着観測機を飛ばせなければ、砲雷撃戦に臨むにしても不利になると考え、航空戦力の充実に心を砕いてきた。直率する正規空母群に最新鋭機——4号艦上戦闘機「サラマンダー」や「メテオ」「イーター」を搭載したのも、そのためだ。

手塩にかけて育てた艦載機隊も、撃墜されたり母艦ごと粉碎された——飛行甲板を爆撃破壊されて、格納庫内で粉微塵（こなみじん）にされたり、母艦諸共沈没を余儀なくされた艦爆や艦攻——ものが多数あり、その辺の損害も無視できない。

瑞穂側が投入してきた新型艦上戦闘機は、搭乗員の技量にもよるのだろうが、極めて強力で、あれがこれからの主力艦戦になると考えると、制空権を確実に確保できるという目処は立たないのではないかとさえ思えた。

相手は一体誰だったのか——とユリーシアの関心はそこに注がれた。降伏した連中の武装解除と占領地の治安回復——瑞穂人は総出で逃げたが、現地先住民は多数取り残されていた——が進められる中、それは判明した。

「——月三〇日に我々を攻撃してきた艦隊の司令官が判明しました。彼らの皇族——内親王です」アドラーが報告書を捲りながら告げた。「名はハナブサ・イクサブネ。催飯防衛戦などで彼らの間では広く知られた人物だそうです」

「確か二万の叛乱軍相手に三〇〇〇の雑軍と共に籠城して耐え抜いた奴だな」

ユリーシアもその話は耳にしていた。瑞穂人の間で人気のある「戦う皇族（ファイティング・インペリアル・ファミリー）」の話は、国外にも広く知られ、注目を集めていたのである。

「元戦闘機搭乗員だそうでして、陸戦だけでなく航空戦の指揮能力にも長けた人物だそうです」

「だろうな」ユリーシアは同意した。「我々に対する鮮やかな戦術奇襲、電探にも反応する分身発生装置搭載機を用いた囮戦術、一撃の後に素早く引き上げた手際の良さ——瑞穂人は贅沢慣れして弱い奴ばかりだと聴いていたが、なかなか歯応えのある女将がいるではないか」

「戦は娯楽ではありません」アドラーは楽しげなユリーシアをたしなめた。「今回の戦闘で我が艦隊も無視できぬ損害を被り、消耗から回復するのに時間を必要とします。彼女がより強力な艦隊を率いてきた場合、苦戦は必至なのではないかと」

「皇帝陛下（カイゼラー・ジーク）は短期間のうちに決着がつくと信じているようだがな。私も簡単に勝てるとは考えていない」

「姫、それは……」

聴きようによれば不敬罪に問われかねない発言に、アドラーは眉を顰めた。瞳に叱るような色が宿る。

「陛下と私はいとこだ。別に構うまい」

「頼みますよ、姫」アドラーは幼い頃から世話をしてきた姫君を気遣う。「段階的に帝国本土軍も橋道洋戦線に参加する予定です。彼らは我々の落ち度を探すのに躍起になるは必定。姫に災いを及ぼす原因になりかねません。不用意な発言は控えてください」

「判っている。でも、私は私の横面に一撃を加えた後で姿をくらませた敵ともう一度戦いたい。今度は正面から。航空決戦でなくてもいい。戦艦同士で古式奥ゆかしい海戦をするのでも構わない。とにかく私の勝利に拭えぬシミを付けた相手を倒したい」

「……………」

アドラーは渋い顔をした。ユリーシアは一度こうだと言い出したら他人の言葉に耳を傾けない性質がある。それは気の強い女性特有の我儘なのか、持って生まれた性格なのか、彼にも掴みかねているところがある。

一つだけ確かなのは、戦争が続く限り、あの敢闘精神の塊のような軍勢と戦い続けねばならない事で、勝利の暁にはどれだけの人的損害を払わねばならないのか——そう考えると、彼は頭痛を覚えた。勝利したところでこちらが立ち上がれぬ程の傷を受けたら意味がないのである。元々が領土拡張欲に突き動かされた、ジークフリート皇帝に引き摺られた形で始めた戦争なのであるから。

進まねばならない道は、目的地より遙かに遠く、そして陰しく感じられた。

#### 4

爬間諸島から瑞穂本国を直線的に目指しても、一二日程度の時間が必要になる。これは高速発揮可能な大型戦闘艦艇ばかりでなく、常に燃料補給を必要とする駆逐艦を随伴しているためだ。機動部隊と行動を共に出来る油槽船の数は限られているし、もどかしいが仕方がない事柄だと言えた。そしてその六割程度を経た時、第一東遣艦隊は、瑞穂本国で起きた政変を電波（ラジオ）放送を通じて確認した。

「秋月（あきづき）内閣が解散しただと？」

英は流石に驚いた。海軍に迎撃先を中部橋道洋から東橋道洋に変更するように圧力をかけたのは政府筋の人間だが、その頭目が開戦してから一〇日も経たないうちに失脚とは、内地で何が起きたのか。

「第一艦隊の壊滅と爬間諸島の失陥が内閣総辞職の理由だそうです」

報告に来た美星も戸惑いの色を隠せないでいる。大敗の原因を造り上げた人物が早くも退場したので、何と評すべきか判らないのだ。

「勝ち目が消えたから早めに逃げを打ったのでは？」

紅葉がきつい言葉をぶつける。同じ事を言おうとした英は、副官に先手を打たれて眼を白黒させた。

「私も同意見だがね。しかしよいのか？」

秋月実松（さねまつ）首相は、名門貴族出身である。そうした人間は横の繋がりが強い。紅葉の生家――五十旗家も彼と何らかの形で繋がりがあったのではないかと英は記憶している。

「構いません。無理難題を海軍に押しつけて逃げ出した卑怯者ですから」

英の副官を務めている事からも判るように、紅葉は名門出身の貴族で、尚且つ気が強い。無能だと思われる人間には容赦がなく、英から見ても敵を作りやすい性格だと思われた。しかし海軍兵学寮を首席で卒業した彼女は頭脳明晰で、その進言や判断には間違いはなかった。

「後任は決定したのか？」

「議会でも揉めているそうです」美星は放送係（アナウンサー）のうわずった声を思い出しながら答えた。

「主力戦艦の半数が撃沈破された後ですので――」

「宰相（さいしょう）の席でも喜んで座る奴は絶無、か」英は嘆息した。「敗北した事を沈黙により誤魔化せば無用の混乱は避けられたのかな？」腕組みをしてから考え直す。「いや、隠し通せる訳がないか。戦死と捕虜だけで一万を超える損害が出ているからな」

「何にせよ立て直しは必要です」紅葉が告げた。彼女は美御では判らない戦略的な視点からものを言えた。「撃沈された戦艦は四隻。どうにか脱出できた艦々（ふねぶね）にしても、当面は入渠（にゅうきょ）となれば、皇国聯合艦隊も再編をせねばなりませんまい」

「第一艦隊は当面使い物にならん。となると、航空機を主力とした迎撃計画を立てるしかあるまい。幸い、航空母艦に損害はない。海軍拡充計画に従い、内地で建造中の新型艦も多いし、時間を稼がねば」

「つまり、我々が戦艦に代わり主力に？」

「敵も爬間諸島沖で無視できない損害を受けたはずだから、暫くは温和しくしているだろう。爬間諸島を基地化――瑞穂本土侵攻用の拠点とするのには、彼らも多大な物資を必要とするはずだから、通商破壊戦を潜水艦隊と共に行うのが、最良の選択だと思う」

「敵主力艦隊との戦闘を避ける？」

「誰が秋月総理の後を継ごうと、再度このような損害を受けるのは御免だろう。温存艦隊戦略が採用され、敵に我々が健在である事を背景とした圧力を加える――という展開になるのではないかと？ 幸い、瑞穂本国には第二艦隊がそのまま残されているし」

「温存艦隊戦略」とは、読んで字の如く保有する艦隊を温存し、敵に無言の圧力を――有力な艦隊が健在なのだから、それを用いて何をしでかすか判らない、と思わせる戦略を指す。

海上戦力が劣勢、あるいは時間を稼げば援軍が駆けつけてくる可能性がある場合、そうした展開を迎える事が間々ある。消極的な行いだが、大型戦闘艦艇は建造に時間がかかる。乗組員の訓練に必要とされる時間も然り。敵が海上で行動する限り、「敵襲」という幻影に怯える必要がある――と思わせる事は、決して損にはならない。圧力皆無（ノーストレス）で海上を行き来されるのとそれでは、展開がかなり変わる（輸送船に付随させる護衛艦艇の数は、そのまま燃料問題に直結する）。

「全ては帰還してからですか」

「そうなるな。今度はもう少しましな奴に指導者になってもらいたいものだがね」

催飯防衛戦や今回の戦闘で苦労させられた後だけに、英の言葉には皮肉以上の何かが潜んでいた。いつの時代も無能な指導者の犠牲になるのは、無辜（むこ）の一般人や前線部隊の将兵なのだ。彼女はそんな現実を見過ぎていた。

一二月六日――

瑞穂皇国首都――皇都・皇京は霧賀崎（きりがさき）は前日から大いに揺れていた。各省庁や首相官邸及び国会があるこの区画は、橋道洋全域を支配する国家の中枢なのだが、爬間諸島沖での大敗北は、そこに住まう者どもの脳髓を激しく揺るがしたのである。

瑞穂の国会――皇国議会は、貴族院と皇民院とに分かれている。これは立憲君主制が採用され、「一君万民平等宣言」――人種差別を完全撤廃し、尚且つ民間人に全ての公職を開放するという、瑞穂史に残る宣言――が発布されて以来の制度だ。

前者は貴族がその構成員の九割を占める。貴族が選挙権を持ち、また候補者を擁立する権限を持つからだ。瑞穂の一般国民に当たる皇民はそれに関わらない。残りの一割も高級神官かそうした人間の親類である上流市民だけと言え、支配階層の縮図と言えた。

一方後者は、普通選挙により選ばれた議員により構成される。瑞穂では男女ともに一五歳から投票権を持つ。貴族や士族にしても、内閣に席を占めようとすれば、貴族院ではなく皇民院に籍を置く必要がある。そのためか皇民院は一般皇民の他に地方に根を下ろした有力貴族や士族などが散見され、瑞穂という国の縮図という感を呈している。

貴族院と皇民院の仲は、普段はじっくり言っているとは言い難かった。伝統的支配階級により構成される貴族院議員は、皇民院議員を「大衆に迎合する事で地位を得た成り上がり者」だと考えて莫迦にし、皇民院議員は貴族院議員の事を、「血統により地位を得た無為徒食（むいとしょく）の輩」だと嫌悪していた。

両者の間にかろうじて橋を架けていたのは、自分たちは瑞穂という国の利益を計るために存在しているという自負だったのかも知れない。彼らは日頃は反発しているが、共通の敵が出現すると、普段の蟠（わだかま）りを捨てて、一致団結して事に臨んできた。

そんな彼らの起爆剤――今回の共通の敵は、外国勢力ではなく身内だった。海軍に無体な要求を突きつけた挙げ句に、主力戦艦の半数を撃沈破されるという無残な敗北を喫させた張本人――秋月実松首相である。

貴族的な風貌と線の細さを持つ彼は、事態の隠蔽は不可能との判断から、損害をできうる限り正直に発表していた。これは開放的（オープン）な情報開示こそが、国民の信頼を繋ぎ止めるために必要な行為だと考えたためでもあるのだが、皇国議会の喧噪を見る限り、それは完全に裏目に出ていた。

「総理、貴男は海軍に無理難題を押しつけ、主力戦艦の半数を撃沈乃至大破させられるという大損害を受けた。この責任をどう取られるおつもりなのですか!？」

「皇国の青年は次代を担う国の宝だ。陛下の赤子（せきし）だ。それを一万人以上戦死させるとは！」

「戦死者の遺族は皆が貴男を恨んでおりますぞ！」

怒号と野次が国会内で飛び交う。雄弁家の集まりだから、一度火が点くと誰に求められない感



じがする。

浴びせられる悪意の塊に、秋月はたじろぐ。元々、彼は軍事には疎い。商売上の繋がりのある者たちや後援組織からの要望で爬間諸島確保を決意したものの、まさか海軍がその結成以来最大の損害を被るなど想像の外だった。

「守備隊や民間人の転進には成功しました」

か細い声での反論も、万里の長城（グレート・ウォール）に小石をぶつける程の抵抗でしかない。直ぐに一〇〇倍にして返された。

「貴男は父母が血を流して手に入れた領土を反故のように捨てたのだぞ！」

「港湾施設を破壊する暇がなく、敵にそのまま進呈したそうではないか！ 奴らは爬間諸島を足がかりにして、直ぐにここまで来るぞ！ その備えはあるのか!？」

「転進とは『放棄撤退』を言い換えたただけだろう！ 爬間諸島を奪還できる見込みなどとてもあるまい！」

彼らの主張には嘘はない。爬間諸島は聯合帝国に併合されるのを嫌った現地先住民が、住民投票で瑞穂に帰属する事を決めた、との経緯はあるが、それに納得しなかった聯合帝国との小競り合いが発生し、「戦死」――事変や紛争では、死者が出てても法的規則から事故死あるいは殉職扱いとなる――した者が出ている。小規模ながら戦争をして得た土地には違いない。

そして港湾施設の破壊云々は、民間人を脱出させるのに忙しく、またそれを早い段階で爆破処理してしまうと、迅速な移動が不可能になるので後回しにされ、結局混乱から誰が最終的な処理をするのか判らないまま放置され、敵の手に落ちたのだ（最後の『転進』に関しては、今更何を言うか、との感がある）。

「総理、辞任しろ！」

「責任を取れ！」

魔女狩裁判もかくや――と思われる連呼が始まる。皆がやり場のない怒りを、無謀な防衛作戦を強行させた総理にぶつけている。誰かを怒鳴りつければ海底に沈んだ軍艦が蘇る訳でもないのに、そうせざるを得ないのだ。

「……………」

予想外の反発の強さに、秋月は思考停止状態に陥り、沈黙してしまう。彼は元来政治力に長けている人物ではなかった。弁舌が達者な訳でもない。ただ、前任者が不名誉な贈収賄事件の責任を取る形で辞任し、他に適当な候補者がいない、という低級な政治遊戯を経た後に宰相の椅子を手に入れた幸運児なのだ。

そして、総理大臣という至高の地位を得た後に、その幸運は尽き果てたようだった。彼は明確な展望(ビジョン)を持たぬままに戦争を始め、最初から国家存続危機に立たされた。あの時に得られた幸運は、もしかしたら死神の嘲弄（ちょうろう）によるものではないか――とさえ彼には思えた。今はせいぜい良い気分させてやる。夢から覚めた時が見物だわ――

頭の上を何度も天使が行き交う幻想を、秋月は視た気がした。彼は強烈な目眩（めまい）を覚えた。そのまま崩れ落ちる。手にしていた原稿用紙が花びらのように舞い散る。傍目からは脳溢血（のういつけつ）か何かを起こしたように見えたが、単純に重圧感（ストレス）から来る失神だ

った。彼は秘書官に担ぎ出されて国会を後にしたが、結局二度と戻ってこなかった。侍医から健康面での問題を指摘され、長期療養を余儀なくされたからである。彼はこれ幸いにと、代理人を通じて辞意を表明、他の内閣閣僚たちも、暴徒化した国民に官舎を襲撃されたりしたので、総理の行いに倣い、内閣総辞職の運びとなる。

英たちが耳にした電波放送は、丁度そのあたりの事柄について触れたものである（一般国民向けのものなので、真実からは遠く、仮定が大幅に端折（はしよ）られているのはご愛敬だ）。

貴族院・皇民院の両院は、責任者を辞職に追い込むのに成功したが、今度は別の問題に直面させられた。秋月がやめたのだから、新しい内閣を作る――戦時内閣を組閣する必要が生じたのだが、皆が貧乏籤を引くのを嫌がり、後任が直ぐには決まらないとの事態が発生したのだ。

議会制民主主義の国で、その代表者が不在であるとの状態を長く続ける訳にはゆかぬ。

そこで議会は天皇――憲法上の国家元首である帝に、次の政府首班を指名して欲しいとの要望を出した。瑞穂暦二〇〇一年時、今上（きんじょう）天皇――光文帝（こうぶんてい）・桜子（さくらこ）は、即位してから一六年目を迎えていた。しかし彼女はまだ一六歳に過ぎなかった。先帝が生まれたばかりの彼女を残して崩御したので、乳飲み子のうちに幼君として立てられたのである。ゆえに政（まつりごと）は皇太后と外祖父――皇太后の父が摂政として切り回していた。他国なら彼らの専横を批判する者がいたかも知れないが、瑞穂の皇室は飾り物以上の価値をなくして久しいので、それが問題にされる事はなかった。にもかかわらず議会在天皇に意見を求めたのは、体裁を整えるためだ。他の者では納得がいかずとも、天皇が指名したのなら皆が頷く事を、彼らは心得ていた。

天皇は摂政に誰が良いか訊ねた。大規模な戦争をするのは、国としても久し振りなので、見当がつかない部分がある。動乱時に事実上の国家元首として――天皇は君臨しているが統治はしておらず、議会の決定をただ承認するのが仕事という面がある――辣腕を振るえる者が、果たして今の瑞穂にいるのか、と？

それに対する摂政の答えは明白だった。皇民院議長をその任に当てます。皇民院議長は、憲法の規定上は、総理大臣と副総理の双方が職務遂行不可能な際は、その職務を代行する権限を持つ。つまりは国内第三位の地位だ。彼の人に戦時内閣を組閣させる。

その人事は単なる内部昇格のようにも見えた。総理と副総理が足並みを揃えて逃げたので、繰り上げで第三位の人間を首相にしたのでは――と邪推されても仕方のない側面もあった。だが、皇民院議長は海軍大臣を務めた経験もある海軍予備役大將――紀伊國広（きいくにひろ）で、皇室への忠誠心の強さは誰にも負けず、そして何人にも媚びない硬骨漢（こうこつかん）との評価を併せ持つ頼もしい御仁だった。成程彼ならばこの国難の舵取りに相応しいかも知れない。

天皇は摂政の進言を容れた。紀伊はこの時点で六八歳と高齢だったが、他に候補者がおらず、また彼以外の者が役割に必要とされるだけの能力を備えているかどうかとも怪しく、他に選択肢がなかった、との見解も成り立つのだが。

ともあれ、一二月八日――秋月実松首相が電撃辞任をした翌日、大命は降り紀伊内閣は成立したのである。全ては権力の空白を防ぎ、混乱を最小限に治めるための措置だが、瑞穂は彼の指導の下、屈辱的な形での終戦――降伏を避けるために挙国一致体制で戦争に臨む事になる。

賽は投げられたのだった。

5

瑞穂皇国に於いて紀伊内閣の成立が宣言された頃、北加大陸の東海岸に面する聯合帝国の首都――帝都カイゼラス・ガルデンでも政治的な意味を有する発表が、帝国議会（ライヒスターク）でも行われようとしていた。

帝国議会は、現皇帝――ジークフリートが即位した後に設置された。選挙権を有するのは、二五歳以上の男性だけだが、それまでは選挙で国民の代表を選ぶという概念自体が乏しく、高級神官や大貴族が血統を根拠に権力を掌握、国政を壟断（ろうだん）する事甚だしく、腐敗の温床と化していた。皇帝は旧態依然とした体制を一新し、新しい時代が来た事を国民に教えるために、それを設けさせたのである。

帝国議会は元老院・貴族院・青年院とに分かれていた。

元老院は国家に功績のある人間――早い段階でジークフリートを支持した軍人や貴族で構成され、聯合帝国の権力の中枢にいる事を、その席に座るだけで物語る。

貴族院は瑞穂の皇国議会のそれとほぼ同じだった。新旧貴族と上流市民とで形作られ、これは聯合帝国の中間支配層そのままだった。今の地位を足がかりに、国家権力を握りたい野心家が雁首を揃えている。

青年院は元老院や貴族院とは大分性格が異なる。青年院の構成員には貴族は疎か軍人すらいな。三〇歳から四〇歳までの平民だけがそこに籍を置いている。これは市民層にも政治的な発言力を――ある程度までは――持たせるための措置だ。

この中で皇帝に対し異を唱えられるのは、元老院と貴族院であり、青年院議員たちは議会決定を拒否したり皇帝の政策を批判する事が出来ない。しかし彼らは実のところ現皇帝の最も熱心な支持者たちで、制度上の問題を個人に対する熱狂で誤魔化している部分がある。

聯合帝国内に議会を設置する――この改革は国内外に於いておおむね好評のうちに迎えられた。国政に参入したいという青年層には道が開かれたし、専制主義に対する不満から共産革命が起きたら、それこそ面倒になると、多くの資本主義国が考えたからだ。

皇帝は重大な政策を発表する際、あるいは前線で陸海軍が大勝利を収めた時、必ず帝国議会で演説をした。その様子を電波放送で流しもした。彼は国民に対し広く支持を訴えるには電波放送が最良のものだと考え、一般労働者――カ月分の賃金で購入可能なラジオを造らせ、それを一般家庭に普及させていた（政治的な放送ばかりではなく、音楽や活劇（ドラマ）など、娯楽要素の強い番組も多数流し、そちらも好評を博していた）。

帝国議会に席を占める者全員が、演説席に歩を進める皇帝に視線を注いだ。帝国親衛隊の將軍である事を示す、金糸に彩られた黒地の軍服。表が黒で裏地が赤いマント。黒光りする長靴（ブーツ）。全身から放たれる独特のオーラ。

皇帝は聯合帝国の人間の多くがそうであるように、金色の髪をしていた。それはさながら獅子の鬣（たてがみ）のようにも見え、「黄金獅子（ゴールデン・ルーヴェ）」との異名を冠される理由にもなっている。

彼は北加大陸のほぼ全てと南加大陸の三割、そしてヤフリカ大陸北部にまで勢力を伸張させた

大帝国の指導者なのだが、まだ年齢は三〇代中頃に過ぎなかった。「青年指導者」との評はここから来ている。引き締まった体躯と長身を持ち、更に一目見ただけで忘れられぬ美男子一一と来ているから、選挙権を持たぬ女性層からの支持も厚い。

皇帝は演説台の上に立つと、厳かな口調で話し始めた。

「親愛なる帝国臣民諸君、余は諸君らに対し我が帝国の版図が遂に橋道洋にまで及んだ事を発表する。西部帝家艦隊が爬間諸島沖で瑞穂艦隊を壊滅させた事は、既に聞き及んでいる事と思うが、彼の地の守備隊が我らの軍門に降り、黄金鷲（ゴールデン・アドラー）が翻る土地がまた一つ増えたのだ」

「黄金鷲」とは、帝室の紋章を指す。深紅の旗に金糸で彩られた鷲は、カリメヤ聯合帝国を現すもの、その一つなのだ。これは聯合帝国国旗一一星円旗（スターズサークル）よりもある意味で馴染みのあるものだと言える。

皇帝の演説の特徴として上げられるのは、初めはゆっくりとした口調で話し、周囲の人間の反応を伺う事だ。聴衆が興に乗らぬのに話を続けても意味がない事を、彼は過去の歴史と経験から学んでいる。

「諸君らは戦線が橋道洋にまで及ぶ事に不安を感じた事であろうが、現実はこの通りである。世界有数の工業国として繁栄を謳歌した瑞穂は、過去の気概をなくした。後に残されたのは大義を見失い経済活動にのみ重きを置いた、空洞のような人間ばかりである！」

演説原稿すら持たずに話す皇帝の姿は、その大仰（おおぎょう）な身振り手振りからも判るように、人目を引いた。役者がどうすれば観客の注目を浴びられるかを心得ているように、彼もまた観衆一一帝国という名の舞台を見つめる国民の関心を引く術を心得ているのだ。

「我軍は、初戦にして瑞穂艦隊の主力戦艦群、その過半を葬り去る事に成功した。島国である瑞穂が海軍力を喪えばどうなるかは、改めて説明するまでもなからう。彼らは我々に対して抵抗する術をなくしたのである。余は彼の国に対し、無益な抵抗をやめ、城下の誓いを結ぶ事を要求する事にした。彼らがそれを拒否したところで、我々の艦隊が瑞穂本土にまで攻め込み、皇（すめらぎ）湾で降伏調印をさせるまでだ」

「皇湾」は海側からの皇京の出入り口だ。瑞穂海に面しているため、敵対国家の戦闘艦艇は絶対に進入できない一一瑞穂海は、別名「大皇の浴槽」とまで呼ばれている、瑞穂の内海だ一一と豪語されている。そこに押しかけると口にしているのだから、皇帝の自信の程が窺える。

「橋道洋を我らの経済圏内に組み込めば、もはや我々に敵対する国家など、この地球上にはあるまい。我らは新たな繁栄の一步を、爬間諸島に記したのだ。それは何人たりとも否定できぬ歴史上の事実になるであろう。

橋道洋への進出を、我らの凶兆だと放言した莫迦者には、これを機会に是非とも猛省を求めたい！

橋道洋への進出は我が帝国にとって凶兆か!?

否（ナーン）！ 断じて否である。彼らにはもはや勝機など零（ゼル）に等しい。何度でも言おう！ 彼らには勝算はなく、遅くとも来年の年末一一聖父聖誕祭の頃には、彼の国を打倒する事を余は国民に約束する！」

皇帝が大きく両手を拡げてそう宣言すると、帝国議会内は大いに沸いた。右手握り拳を高々と掲げる、帝国親衛隊風の敬礼の手がそこかしこから伸び、皇帝を称える声が場内を満たす。

「皇帝万歳（ハール・カイゼラー）！」

ゲルマニヤ系移民が多い帝国本土であるが、帝国議会の中では帝国公用語の使用が義務づけられている。これは各民族の言語を融合させたもので、将来的には各官庁の公文書や小学校の教育にまでそれを用いる事が決められているが、今のところは馴染みが薄いので、皇帝が居合わす場でだけ用いられている格好だ。

熱狂する議員たちに対し、皇帝は満面の笑みで応じる。今回は時間的な制約で間に合わなかったが、帝国本土軍を既に橋道洋方面へ投入する手筈（てはず）は整えられている。聯合帝国軍の中で比較的弱体だと目されている西部帝家陸海軍で圧倒できる程度の相手なら、それで決着がつくはずだと彼は信じている。

演説で繰り返し述べられているように、この段階では瑞穂には勝利を約束できる材料は何もなく、そして聯合帝国に凶兆を感じさせるものは何もなかった。勝利は目前かつ容易いのだと、皆が頭から信じ込んだ。

だが、帝国宰相フランツ＝ヴァルテンベルクは拍手の輪に加わりながらも、内心では苦い顔をしている。

——西平洋と橋道洋を跨いだ、現代のラティウム帝国を造ると皇帝陛下は息巻いているが、此度の事は底なしの泥沼に頭から突っ込んだのと同じ効果を我が帝国にもたらずのではあるまいか……？

ヴァルテンベルクは根拠のない悲観論に傾いているのではない。彼なりの計算がある。聯合帝国軍は既に南加大陸北部、そして西平洋、果ては北ヤフリカにまで派兵して戦争を続けている。今のところは連戦連勝を続けているが、攻勢終末点を遙かに超えたところで百万単位の軍勢を動かしているのではないか——と思われるふしが、必要とされる軍事予算や各種物資からも見え隠れしている。

——ただでさえ軍事予算に圧迫を受け、その他の予算は不足しがちなのに、これで橋道洋方面にまで多数の軍勢を送り込むとなれば、一体どうなるんだ？

彼はこの先に必要とされるものを思うと頭が痛い。戦争の神とは余程貪欲に違いない。万単位で生じる戦死者。働き手を奪われて疲弊する都市群。民需製品の不足から来る一般国民の生活苦。

皇帝万歳の声が、いつの日にか消え去り、後には自分たちを際限のない戦争に駆り立てた指導者に対する怨嗟（えんさ）の声のみが残るのではないか？ ヴァルテンベルクはそんな不吉な未来を予想する。勝利してはならない時に勝利し、最終的な敗北に追い込まれた国家は無数に存在する。我が帝国が先人たちが残した教訓から学び、愚行を再演する事がなければ良いが——

そんな帝国宰相の不安とは裏腹に、場の喧噪はいよいよ激しくなり、絶える事のない拍手が雷鳴を思わせた。

橋道洋全域を支配する瑞穂皇国首都――その中央部にある宮殿の廊下を、海軍第一種軍装に身を包んだ戦船宮英治元帥と、はち切れんばかりに膨らんだ体躯を、燕尾服に押し込めている、大皇の外祖父と摂政を兼ねる人物――五十旗公爵が歩いている。二人とももう七〇を過ぎているのに矍鑠（かくしゃく）としているのは、その足取りからも判る。

「紀伊君は首相就任を引き受けたのだな」英治が訊ねた。緒戦から手酷い損害を受けたため、海軍の台所事情に詳しい者程腰が引けるのではないかと彼は考えていた。

「ああ」五十旗公爵は頷いた。彼は英治と海軍兵学寮が同期で、机も隣同士だった。気心が知れている。

「陛下直々のご要望とあらばと二つ返事でな」

「かなり苦しい戦いになると思うが」

「彼も承知の上さ。敵が要求してきた降伏条件を視れば、子供にでもそれが判る」

英治は眉を顰めた。爬間諸島沖海戦終了直後、戦争の早期終結――際限のない規模の拡大を防ぐべく、外交交渉は始められた。瑞穂には海戦に敗れたという弱みがあるためか、あるいは初めからそうするつもりでいたのか、過酷な要求が突きつけられていた。

「天文学的な賠償金の支払いに領土割譲。軍備の一方的な削減に、内地の保障占領――」

「まだある。労働力の提供と各種の技術公開だ」

「賠償金の支払いならまだよい。領土割譲にしても国が残るのであれば」英治は苦虫を噛み潰したような顔をする。それだけで済むのならば、講話――条件付降伏も成立する余地があるのだが、と呟きながら続ける。

「だが、軍備削減や内地の保障占領、労働力の提供と各種技術の公開は到底呑めない。そんな屈辱的な条件を受諾するとあれば、国民は暴動を起こすぞ。軍部も納得が出来ない人間が集まり、武力政権転覆(クーデター)を企てるかも」

「近衛師団が帝を幽閉し、徹底抗戦を宣言したりしたら最悪だ。我国は民族の滅亡まで戦争を続ける事になりかねない。二〇艦隊計画で揉めた時とは訳が違う。あの時はどうにか収まりがついたが」

「無条件降伏同然な相手方の要求を、どうにか緩和せねば、我国は滅ぶ。そのまま呑めば骨抜きにされるし、納得できない人間が大暴れして收拾がつかなくなる可能性が極めて高い」

「僕も同感だ。だから英雄を意図的に造る必要がある」

「英雄を造る？」

怪訝な顔をする英治に、五十旗公爵は構わず続けた。

「負け戦なればこそ、戦い続けるのに希望が必要になる。此度の脱出口で貴男の娘は再び英雄となる条件を得た。彼女を利用させていただく。国民は二年前の出来事をまだ覚えているだろうし、さほど難しくない」

「しかし、それは……」

「嫌とは言わせんぞ」五十旗公爵は顔に凄味を覗かせた。彼は二〇艦隊計画が財政問題からご破算になり、海軍部内が揺れ動いた時に首相を務めていた。武力政権転覆が実行に移される一歩手前まで行きながら、体制を整え直した手腕を持つ。

「この歳で国が滅ぶ様を互いに視たくはないはずだ。そうだろう？」

促されて、英治は曖昧に頷いた。短く刈り込まれた頭髪は、あたかも雪が降り注いだかのように真白だ。白髪染めを使えばもう少し若く見えるのだろうが、抱えている女の殆どが死に絶え、残されたのは老婆ばかりと来ては、外見に若さを求める気にはなれない。

髭も口や顎を覆うもの全てが真白で、顔の各所にはこれまでの苦労を忍ばせる皺が無数に刻まれている。「年老いた爺(いか)めしい軍人」との評がピタリと来るような姿だ。これでも若い頃は美男子な漁色家で、社交界にいる花々——数多(あまた)の美女と浮き名を流したものののだが。

英治は少し考えてから、五十旗公爵を睨んだ。平均寿命が男女共に六〇代前半である瑞穂では、七〇歳と言えはもう最晩年である。いつお迎えが来てもおかしくない年齢だと言える。ゆえに彼は娘を政治的な道具として使う気にはもうなれない。特に昔から眼をかけてきた末娘だけは。

「悪い話ばかりではない」五十旗公爵は盟友に対し弁明した。「貴男の姫君には兵を上手に扱う才能がある。平時には危険きわまる才能がね。だが今は戦時だ。活躍の場を与えれば輝くのではないか？」

「それはそうだが」

「皇国聯合艦隊はどのみち再建せねばならん。その際に新設された艦隊を貴男の娘——英殿下に担当させる。そうすれば国民は納得するし、敗北に動揺している海軍部内を落ち着かせる効果も望める」

「政治的配慮かね？」

「必ずしもそうだとは限らん。此度のように敵に一方的な打撃を与えて勝利してくれるならば」

「まあいい」

英治は片手を上げて話を遮った。艦隊司令官となると、臨時編成されたものを除けば、中將がその任に就くのが通例だ。つまり英を中將に昇進させる必要がある。今でさえ歴代大皇でもない限りあり得ない地位にいるのに！

「出る杭は打たれる」という諺(ことわざ)があるように、若くして高い地位を得た者には、必然的に妬(ねた)みや嫉(そね)みが集まる。海軍元帥の父親が特別勲(いさ)賞しているから——との形が取れるから、自分が健在な限りは風当たりはそれほどではあるまい。

だが、強大極まりない敵軍と向き合いながら、内の敵の相手をするというのは、非常に骨の折れる話だ。能力が不足する者は多くの場合徒党を組んで優秀な者の動きを阻害してきた。

英は航空部隊司令官としては抜群の切れ味を見せてきたが、そういう表沙汰にならない戦い——嫉妬から来る暗闘——の方はどうなのか？ 勿論可能な限り自分が護ってやるが。本人に自覚がなければそれまでなのだ。

これは有能無能を問う問題ではない。性格の問題なのだ。英は朗らかかつ爽やかな部分があるため、他人の陰険な策略に無頓着(むとんちゃく)なのだ。やはり、辞退させるべきか——と考え進めた。

しかし自分に代わり軍事的栄光を手にして欲しいとの願望も確かにあり、であるならば一個艦隊の最高司令官でいてくれた方が何かと都合が良い。どのみちあの艦を使いこなせる人間を見つ

ける必要がある訳だし。

「いいだろう。英には儂の方から話しておく」

英治は思い直して言った。これは賭だった。マイナスにマイナスを掛け合わせればプラスになるように、個性の強い者同士を組み合わせれば、爆発的な力が生じるかも知れない。瑞穂建国以来の国難を迎えようとしている今、その未知の力に国家存続の希望を賭したくなった。

「やれるだけやろう。お互い、御国のために」

五十旗公爵の言葉に、英治は力強く頷いた。

## 7

—二月—二日—

第一東遣艦隊所属艦艇は、旅路の果てに遂に故郷の姿を見る。讃州県美呉軍港に辿り着いたのだ。ここまで来れば敵艦隊の追撃や潜水艦の襲撃はない。昨日のうちに四内（よつない）水道に入っていたので、その段階で安全は確保されていたのだが、やはり故郷の陸地が見えてきたとなると、感慨もひとしおなのだ。

美呉軍港の近くには、瑞穂国旗—天昇旗を掲げた一般人が集結していた。事前に艦隊の帰還を知らされていたのか、どうやら自主的に集まってきた様子だ。政府の役人が景気づけのために無理矢理かり集めたという感じではなく、歓迎されているのが判る。

英は二航戦旗艦「翔龍」—搭載機が一連の航空戦で激減した航空母艦の島型装甲艦橋から、その様子を眺めている。讃州県は戦船宮家が中央から軍関係の仕事に誘引し、それが落とす金で喰っている田舎なので、そこの姫君が指揮官を務める艦隊に非難の声を浴びせる者は、公の場では現れないだろうが—と予想を立てていたが、それとはまた別の反応なので驚いている。

「還るや否や『国賊！』と罵られる情景を覚悟していた訳ではないが」英は熱烈な歓迎風景に戸惑いを隠せない。「何かあったのか？ 本国は秋月内閣退陣などで大荒れだと聞いたのだが」

「どうやら我々は凱旋艦隊の扱いのようです」美星が伝えた。「航空母艦七隻を撃沈破し、友軍の転進支援を成功させた事を、総本営は高く評価し、宣伝に努めたようです」

「高く評価—か」英の声には僅かな棘（とげ）が滲んでいる。

彼女は声に出さずに呟いた。古来より敗北を隠す時の常套（じょうとう）手段が使われたのだろうな。全体的な敗北は誤魔化せないから、撤退支援戦闘での戦果を、追撃に来た敵軍を撃退したと発表してしまうという。

敗北の責任を押しつけられる贖罪羊（スケープゴート）にされるよりかは、何倍もましか—と英は思う。猪松大将の見通しの甘さもさることながら、軍事に疎い政府役人からの圧力もまた、大敗を喫する原因となった。それらは彼女の手の届かない部分で決定した事柄であり、責任を負う必要など微塵もない。

だが、誰かが責任を負わねばならず、その際に供物にされるのは、いつの世でも権力や後ろ盾を持たない弱者なのだ。上層部の判断ミスから来る戦線崩壊を「戦意不足」だの「敵前逃亡」と言われて、階級を剥奪されたり銃殺刑に処された者は、歴史上数多い。

もっとも、皇族海軍元帥を父親に持ち、今上帝の外祖父である五十旗公爵の親戚—腹違いの兄が彼の娘を正室としている—でもある自分が「社会的弱者」などと主張したら、草葉の陰に



入る不幸な方々が烈火の如く怒るだろうが。

何とも言えない表情を浮かべる英に対し、

「帰還式典をこれより催すのだそうです。元帥宮様——英治公もご出席なさるそうで、提督にも是非にとも出席していただきたいとのご要望が来ておりますが」

美星がこれまた複雑な顔つきで言った。彼女もまた第一東遣艦隊が「凱旋してきた」との評価を受けているのを政治的配慮の一環だと受け止めている様子だ。有り体に言えば莫迦莫迦しいのだろう。

「艦隊司令官が出席せんのでは締まらない」英は父親の顔を潰すつもりはない。「出席すると伝えてくれ」

頷いた美星が艦内電話を手にする様に一瞥をくれつつ、英はため息をついた。第一東遣艦隊は臨時編成の部隊である。恐らくこの式典を終えれば解散が宣言され、自分は単なる二航戦司令官に戻るか、別の部署への配属——前線での敗北、その実相を知る者として前線から遠ざけられるだろう。

どのみち愉快的事はなさそうだ。

「義姉上……」

不安げな顔を浮かべる美御の存在に気づいた英は、表情を改めた。殊更朗らかな調子で義弟に言った。

「なあに、そんなに気にする事はないさ。我々だけに限れば敵艦隊に勝ったのだからね。海軍総司令部が要求してきた作戦目標も完遂した。何も臆する事はない。胸を張って美呉の土を踏むといいさ！」

艦隊司令官の空元気に皆が無理を感じたが、何も言わなかった。今はただ故郷に帰れただけで満足だった。

帰還式典は軍楽隊が派手に鳴らす喇叭（らっぱ）の音と共に開始された。戦没者の慰霊も兼ねているので、荘厳な旋律（メロディ）を持つ軍歌——「海征（かいせい）」が最初に奏でられたのだ。これは勇敢に戦った水兵たちの姿と、戦いが終わった後の無情を謳ったもので、成程確かにこの場に相応しいものなのだろう。

式典に参加している将兵は、皆が一律に白い海軍第二種軍装を着用している。これは第二種軍装が礼装を兼ねているためで、冠婚葬祭（かんこんそうさい）に纏（まつ）わる儀式に軍人が出席する際は、そうすべし——と不文律化されている。

日頃は讃州県海軍国民防衛隊の大佐服姿の英も、この時は流石に第二種軍装を着用している。美呉鎮守府司令官の隣に座している。鎮守府司令官は中将で英は少将なのだが、形式上艦隊司令官は鎮守府司令官と同列に扱われるのでそうなる。

陸軍が地方ごとに聯隊を編成するように、海軍もまた出身地方により水兵の所属する鎮守府を決めていた。第一東遣艦隊は美呉鎮守府に籍を置く艦ばかりで構成されていたので、戦死者と言えば九割以上がそうだ（定期異動のある将校は讃州県出身とは限らない）。

軍事に纏わる儀式というものは、どうしても死の臭いがする——と英は表情を変えずに思う。戦死者が零で成功する作戦など、敵が放棄した場所の占領作戦ぐらいではないか？ いや、それ

すらも過剰な警戒が引き起こした同士討とは無縁でいられず、百名単位の死傷者を出した事例は少なくないのだ。

観艦式とは違い、華やかさに欠ける式典は、形式通りに進められ、途中で滞（とどこお）りが起きる事もなく終了した。すなわち戦死者の犠牲を無駄にはしない事が厳かに宣言され、御国のために戦う事が改めて告げられただけだ。

泣き喚けば現状が変わる訳でもないし、溺れられる程に涙を流せば戦死者が蘇る訳でもない。

まあ軍事的な儀式なのだから、そんなものだろうな、と英は割り切る。艦隊所属将兵には、これから海軍総司令部が寄越した調査官による聴取（ききとり）調査が行われる。まだ記憶が生々しいうちに、聯合帝国艦隊との戦闘の記録を編纂し、今後に役立てるためだ。

艦隊司令官を務めた英もその義務の例外とはなれず、彼らに協力する必要がある。いや、一般水兵とは異なり、司令官として戦場を眺めた自分にこそ、有益な情報を友軍に伝える義務があるのだ――と英は自らに言い聞かせる。

航空部隊の消耗がこの調子で続くようならば、艦載機隊や基地航空隊が活動不能になるのは遠い未来の話ではない。より生存性の高い機体を開発するとか、飛行士の育成期間を短くしながらも質を維持できる方法を考案するとか、今後の課題は多いのだ。

海軍総司令部へ提出する予定の戦闘報告書（アクション・レポート）をもう一度見直すか――と考え進めて踵を返した英に、「英殿下」と声をかけたのは、英治の副官を務める小鳥遊誉（たかなしほまれ）大佐だった。

「うん？」聞き覚えのある声を聴いて、英は振り返る。懐かしい顔を視て微笑を返した。

「お久しぶりです」小鳥遊は一礼した。彼は英治の娘婿の一人である。英の腹違いの姉、その良人なのだ。年齢は英のほぼ倍である三五歳。綺麗に整えられた口髭がよく似合う男性的（ダンディー）な人物だ。少年的な美しさを持つ美御とはまたタイプが異なる。

彼は英の義兄になる前から、実のところ英治と親戚だった。英治の母親が小鳥遊家の出身で、彼の祖父が英治の生母の兄に当たる。そうした縁から英治に可愛がられ、現在の地位を手に入れた。

唯才主義――実力主義を掲げる英治の眼鏡に叶った人物だから、決して無能ではない。英も彼の事を参謀と部隊指揮官の双方を務められる軍人だと思っている。それは経歴からしても当てはまる。

「どうしたのです？」何か用事があるのかと思い、英は訊ねた。顔にもそんな色がある。

「義父上が――元帥宮様が貴女をお呼びです」

「父上が？ 何か改まった話でもあるのか？」

「詳しい話は美呉御所で話すそうで」

それだけで機密事項に属する事柄だと察せられた。美呉御所は戦船宮家が昔から使っている宮殿で、それだけに使用人にも気が払われている。身許の怪しい者はなく、各種防諜（ぼうちょう）態勢――間諜（スパイ）対策もそこなら万全だ。

何かまた問題が持ち上がったのだろうか――英は嫌な予感を覚えながら頷いた。皇国聯合艦隊・第一艦隊が爬間諸島沖で壊滅し、内閣まで交代したのだ。問題は誰が視ても山積みだ。何から

手をつけてよいのかも判らない。

そして、英は父から告げられた言葉を耳にし、予想通り衝撃を受ける事になる。

その艦は瑞穂を取り巻く情勢など知らぬげに洋上を進んでいた。場所は瑞穂海軍が訓練海域に定めている橋架内海の東部である。美呉軍港が水平線の彼方に霞んで見えるところなので、非常に陸地に近い。何をしているのかと言えば、最終調整——竣工を宣言する前の、最後の試験航海なのだ。

彼女の近くには、世界で最初の純粋空母——今は練習航空母艦に艦種変更された「龍飛（りゅうひ）」がいる。全長一八〇間の「龍飛」は、重巡洋艦と艦体の大きさがほぼ同じだ。にもかかわらず、その艦は「龍飛」が駆逐艦か水雷艇に見えるような凶体をしている。

全長三三三間。全幅四五間。彼女はこれまで建造されてきたどの戦闘艦艇よりも巨大だ。艦の中心線上に配された五—サンチ三連装主砲塔三基・二〇・三サンチ三連装副砲塔二基がその最大の証明で、針鼠のように装備された各種対空火器——二・七サンチ高角砲や四〇ミリ対空機銃、真新しい対空噴進弾発射口なども力強さを現す指標となっていた。

丈高く聳(そび)える艦橋は、瑞穂の他の戦艦がそうであるように、特徴的な形をしている。瑞穂の古城——その天守閣(てんしゅかく)のような外見をしており、名のある画家が題材とすれば、さぞ見栄えの良い絵が出来る事は請け合いだと言えた。

だが、その何よりも人の目を引くのは、煙突らしきものを装備しながらも、そこから煤煙が一切出ない——航行していながらも、まるで排煙をしていない事であろう。

満載排水量が一二万石を超える戦艦が、排煙をせずに動くなど、普通はあり得ない。だが彼女はそれを実現している。あまつさえ速力は三〇航里を今まさに突破しようとしており、操舵手が緊張に歪んだ顔で、

「現在速力三一航里……三二航里……三三航里……」

そう告げている。これは戦艦の速度ではない。重巡か正規空母に匹敵するもので、彼女の韋駄天ぶりが窺える。

「速力三四航里！」

それが予定最高速力であった。公試運転で型録通りの速度が出せる事が証明された。

艦内電話を通じてその事が確認されると、第一艦橋内は歓喜に沸いた。「万歳！」を叫ぶ者もいる。

「御目出度(おめでと)う、牧原(まきはら)さん。貴女の設計の正しさが、これで証明されたね」

その艦の艦装(ぎそう)委員長——瓜生願(うりゅうねがう)少将が、名前にある通りの瓜実顔(うりざねがお)を綻ばせながら、傍らに立つ造船官——牧原希(のぞみ)大佐に向かって言った。

「はい。無限機関が予定通りの出力を記録したのは、確かに目出度い話です」牧原は応じた。丸眼鏡(まるめがね)をかけた小柄な女性だ。乗っている艦の巨大さと比べると、尚更そんな感じ

がする。

「ですが、瑞穂が現在置かれた状況を考えますと、本当に大変なのはこれからです」

「うん」と瓜生は頷いた。

第一艦隊は傷つきながらもどうにか残存艦艇が帰還できた。しかし所属していた戦艦の半数――一矢隠級戦艦二隻を含む四隻が沈没し、残された戦艦も完全修理には三カ月か半年はかかる計算で、その後に補充された乗組員の再訓練となると、再建するのに一年かそこらは必要になる。

それに対し聯合帝国艦隊は西部帝家艦隊が有する戦艦だけで七隻を数え、状況次第では他方面からの戦力投入もあり得る。もう何カ月かしたら一〇隻以上の戦艦が橋道洋で活動を開始すると見てよい。

前線に投入されず、本国待機を余儀なくされた第二艦隊の巡洋戦艦群や機動部隊が健在なので、戦争継続は不可能ではないのだが、いきなり横綱が半身不随にされて、残されたのが年老いた関脇にようやく幕内力士になった新米ばかりと来ては、前途は決して明るくない。

「この艦には他の戦艦から引き抜かれてきた熟練（ベテラン）兵が多数乗っている。訓練は三カ月もあれば充分だ。そして僅か一隻で戦局を左右するだけの力がある――」

瓜生は楽観主義から来るでたらめを口にしていない。真実なのだった。少なくともこの艦に載せられている機関（エンジン）が想定通りの働きをすれば。

「はい。私もそのつもりで造りましたから」

牧原は眼鏡の位置を直しながら言った。嘘は欠片もついていない。だが――と彼女は思う。私は――いや、この艦は迫り来る鋼鉄の暴風に一隻で立ち向かえるものだろうか？ 果たして奇跡は起きるのだろうか？

「主砲射撃始まります！」

そんな牧原の思惑を打ち消すかのように、艦橋見張員が告げた。仰角をかけた各主砲塔が、交互撃ち方を始めた。耳を聳（ろう）せんがばかりの轟音が響き、発砲炎が煌めく。音速を超える速度で撃ち出された砲弾は、一度成層圏にまで届いてから落下を開始する。何よりも男性的な光景。

今、悩んだところで仕方がないか。牧原は自身が設計し完成にまで導いた戦艦の力強い姿を見やりながら思う。「八洲（やしま）」が常に万全の状態で作戦できるように、私は力を尽くすまでだ。

その艦――「八洲」の主砲射撃音は、長く続いた平和が遂に破られた事を告げる鐘の音なのではないか？ そんな感慨を多くの乗組員たちに抱かせた。そしてそれは事実だった。「八洲」はこの先多くの戦場で血を流し、伝説を書き連ねる事になる。

瑞穂暦二〇〇一年一二月一六日、「八洲」竣工――

瑞穂皇国の別名が冠された戦艦がその秘めたる力を発揮する時は、果たしていつか？

「八洲」よ母なる国の危機に際し立ち上がれ！